



目次

はじめに	1
第一番 ゆっくりと苦しみをもって Lent etdouloureux	
1	5
2	18
3	27
第二番 ゆっくりと悲しさをこめて Lent ettriste	
1	35
2	44
3	56
4	71
第三番 ゆっくりと厳粛に Lent etgrave	
1	83
2	87
3	92
4	101
第四番 ゆっくりと をもって Lent etblanc	
1	113
引用・著者情報	119

はじめに

本作は個人制作であり、執筆、校正等も全て個人で行っております。

何度も校正等の修正作業は行っておりますが、もし誤字脱字等を見つけた場合にはTwitter、サイトにて閲覧されている方はこのページのコメントにてご報告いただけると幸いです。

それでは、本作をお楽しみください。

時計塔プロジェクト 吉岡大地

第一番 ゆっくりと苦しみをもって Lent
etdouloureux

1

「あなたはこの先も、孤独のままでいられますか？」

僕は手のひらサイズの通信端末が映す広告文を読みあげた。目を覚まそうと声に出してみたが、思った通りの効果は得られなかった。窓から差し込む光を見るに、もう朝がきてしまったらしい。

根が張っているように重い上半身を起こす。いつも起きている時間より数分早い。

遅れて、中途半端な時間に送られてきた広告メッセージに苛立ちを覚えた。しかし、どんな文言だったかはもう思い出せない。

「コハル」

返事は返ってこなかった。僕の声は、薄暗い部屋に吸い込まれていく。

端末を持ったままベッドから降りて、部屋の真ん中にあるテーブルへと向かう。タイルの床がひんやりとしていて、気持ちがよかった。

テーブルに端末を置くと、身震いをするように一瞬だけ振動した。どうやらコハルもこのタイミングで目を覚ましたらしい。

「おはようございます。リタ様」通信端末からコハルの声が聞こえる。

「おはよう」

天井に吊るしていたライトが灯り、部屋がほんの少しだけ明るくなる。床と壁は真っ青なタイル張り、天井は打ちっ放しのコンクリート。物置だった部屋を無理やり居住部屋にしたと大家からは聞いているが、この無骨さといい、無機質さといい、毎日住んでも飽きないくらい僕好みのワンルームだった。

「お食事はどうされますか？」

僕は再び端末を手にとる。画面には『トースト』『シリアル』と表示されていた。

「トーストで」

「かしこまりました」

画面が切り替わる。『ハムエッグ』『ベーコン』『ベリージャム』の表示。

「今日のトーストって、いつもの？」

「はい。C区のパン屋で仕入れたものです」

「じゃあ、トーストだけでいいや。あとは紅茶を持ってきて」

「かしこまりました」

また画面が切り替わる。『準備中』と表示されていた。

配膳に十分以上掛かるときはコハルがそう言ってくれるので、きっとすぐに朝食が運ばれてくるだろう。いつもはここで一息つくが、今日はそういうわけにもいかないらしい。僕は端末をテーブルに置いて、洗濯機を回すことにした。

シャワールーム前のドアに置かれた、服でいっぱいになったカゴを抱える。最近はずっと続きだったせいで、これでもかというほど洗濯物は溜まっていた。

ベランダに続くガラス戸を開けると同時に、濡れた土と草の匂いがした。昔、幼なじみとよく遊んでいた公園の匂いを思い出して、懐かしい気持ちになれる。僕がここに住むことを決めた理由の一つだ。

湿り気のあるスリッパを履いてベランダに出る。身を隠すように設置されている洗濯機に服を投げ入れ、洗剤を入れて適当なボタンを押す。洗濯機は気の抜けた電子音を鳴らし、気だるそうに駆動しはじめた。

朝食までにやらなくてはならないことは終わったので、手すりが乾いているところを探して両肘をつき、そのままアパート裏の公園をぼーっと眺めた。

公園といっても、二階にある僕の部屋からでも隅まで見渡せる程度の広さで、遊具もない、ただの緑地だった。昨年までは、モチーフの分からない網目状の球体のような遊具があったが、それで子どもが怪我をしたという理由で撤去されてしまった。

大体そういった土地にはすぐに買い手がついてマンションが建つのだが、広さが中途半端なこと、この地区があまり人気がないこともあって、一年間緑を保ち続けている。

「リタ様」

部屋の方からコハルの声が聞こえる。端末越しに喋ったのだろう。僕はサンダルを脱いで部屋に戻った。

「ごはん？」

「はい。お持ちしました」

「分かった。今開けるよ」

僕は最低限の会話をして、玄関のドアを開けた。

「トーストと紅茶をお持ちしました」

「ありがとう」

コハルはたどたどしくトレイを差し出した。僕はそれを慎重に受け取る。

「レモンをお付けしたのですが、よろしかったですか？」

「ああ、そっか。言い忘れてた」

トレイを見ると、ティーカップの隣に輪切りのレモンが小皿で添えられていた。僕がいつもレモンティーを頼んでいるので、気を利かせてくれたらしい。

「大丈夫。これでいいよ」

「かしこまりました。それでは失礼いたします」

コハルは恭しくお辞儀をして僕の部屋から去っていった。僕はいつものようにコハルが転ばないか、外廊下から階段を降りるところまで見守って玄関のドアを閉めた。

トレイをテーブルに置いてイスに座る。すぐに仕事のことを思い出して、手を伸ばしてベッドの袖机にしまってある開閉式の薄型パソコンを取り出した。

幼なじみからは化石のようだと言われるような古い型のパソコンだったが、表示画面と入力端末が上下に分かれており、それを重ねるように折りたためるので片付けやすく、一目見て購入を決めた愛用品だった。

電源ボタンを押すと、すぐに画面が光った。部品やソフトウェアはさすがに互換性がなかったので取り替えている。画面には『起動中』と表示されていた。

僕はパソコンが起床をするあいだに朝食をとることにした。起きたては僕も頭が回らない。その点でも、このパソコンに親近感を持っていた。

トーストを半分ほど食べたあたりで、パソコンは操作を受け付けるようになった。そのまま会社のソフトをいくつか立ち上げる。一昨日片付けたはずの仕事が、休日を一日挟んだだけなのに一昨日の倍くらい溜まっていた。

僕は現実逃避をするために会社のソフトを閉じ、メッセージソフトを立ち上げた。仕事は始めていないから、今はまだプライベートの時間だ。と自分に言い聞かせる。

と言っても、なにか真新しいメッセージが届いているわけでもなく、いつものように機材や食品の広告を流し読みして削除した。

いつもより早く仕事を始めれば、それだけ早く終わることができる。やることもなくなったので仕事を始めてしまおうか。と考えはじめたのと同時に、パソコンからメッセージを受信した旨を知らせる通知音が鳴った。

広告業界ではあえて中途半端な時間に送るのが流行っているのかと思ったが、メッセージの送り主は幼なじみからだった。

彼女が僕にメッセージを送ってくるときは、ほとんどが今から会えないかという旨の内容だ。ただ、こんなに朝早くにメッセージが来るのは、この時間に送られてくる広告と同じくらい珍しいことだった。

【件名】おはよー

【内容】話したい事があるから今から会えない？

予想通りの内容ではあったが、会うことに理由をつけている部分だけはいつもと違っている。小さな違和感を覚えつつ、僕はメッセージを開く前から考えていた断りの文言で返信をする。

このまま彼女とメッセージを送り合ってもいいが、返信を待つあいだは結局なにもすることがない。僕は気持ちを切り替えて会社のソフトを開き直した。

最後の一口だったトーストを紅茶で流し込み、会社に勤務開始の申請を送ろうとしたとき、彼女からメッセージが届く。

【件名】RE:RE: おはよー

【内容】最近断ってばっか どうせ用事って仕事でしょ？

彼女は僕の仕事について、なにか勘違いをしているらしい。家でする仕事とはいえ、会社からはパソコンの操作を常にチェックされているし、しばらく入力がなかったり、報告なく離席するとすぐに確認の連絡が飛んでくる。トイレや郵便物の受け取りですら報告しなくてはならないし、休憩も一秒単位で管理されている。つまり、人と会う余裕などないのだ。

返信文を考えていると、ベランダから電子音が聞こえた。どうやら洗濯が終わったらしい。丁度よかったので、洗濯物を干しながらメッセージを練ることにした。

頭の中で申し訳なさそうにしている自分を想像する。こうすると、自分が思っているよりも気の利いた文章が書けるような気がした。

洗濯物を干し終えて部屋に戻り、メッセージの返信文を入力していく。

【件名】 RE:RE:RE: おはよー

【内容】 悪いとは思っているけれどサボれない仕事だから。夜なら会えるけど。

送信ボタンを押してからメッセージソフトを閉じ、すぐに会社へ出勤の申請をした。「おはようございます」という機械的な効果音が鳴ったあと、勤務時間が一秒単位で記録され始める。

準備運動がてらすぐに終わりそうな仕事からこなしていき、件数的に半分をこなしたころ、パソコンの横に置いてあった端末からコハルの声が出た。

「あと十分で十二時になります。お食事はどうなさいますか？」

「今日のメニューは？」僕は仕事をしたまま尋ねる。

「本日はカルボナーラの Pasta、ハンバーグ、野菜炒めがございます」

「ハンバーガーはない？」

「具材はいかがなさいましょう」

「ビーフパティとベーコン、レタスとトマト。マスタードっぽいソースだと嬉しいかな」

「材料がありませんので、少しお時間をいただきます」

「どれくらい？」

「二十分ほどいただきます」

「じゃあそれで」

「かしこまりました。お飲み物はどうなさいますか？」

「炭酸のやつがいい」

「コーラとソーダがございます」

「じゃあ、コーラで」

「かしこまりました」

最低限の情報を交換して、僕とコハルはそれぞれ仕事に戻った。コハルとの会話には、明確な理由と目的がある上に、無駄がないからストレスなく話すことができる。

コハルとの会話で乱れた集中が戻りかけたとき、部屋のインターホンが鳴った。

この国で事前連絡のない来客はほとんどない。定期便の配達かとも思ったが、確かそれも来週だったはずだ。

もしかするとコハルかもしれない。なにかが噛み合わず、急に部屋まで配膳しに来ることが数カ月に一度のペースであるからだ。

僕は会社へ休憩する旨を伝えて席を立つ。コハルがハンバーガーを持っている姿を想像しながら、玄関のドアを開けた。

しかし、そこに立っていたのはコハルではなかった。予想外の来客に、僕は呆然とする。

そんな僕を見て、彼女はくすくすと笑った。

「久しぶり。レタ」

「レベッタ……」

「来ちゃった」

「仕事があるって言ったじゃないか」

「だって、会いたかったんだもん」

僕はこれみよがしにため息をついた。

「やっぱり、まずかった？」

「あんまり良くないね」僕はパソコンのモニターを確認する。画面に表示された休憩時間が一秒ずつ減っていた。「だけどまあ……、今さっき休憩とったから、その時間分なら大丈夫だよ」

「そっか。よかった」

レベッタはすりと僕の部屋に入った。

「靴はここで脱ぐんだっけ？」

「うん」

「レタの家にくるの久しぶりだから忘れちゃった」

レベッタは淑やかに笑った。彼女には似合わない、他人行儀な笑い方だった。

「確か、前に来たのってレタが引越した日じゃない？」レベッタはふらつきながらヒールを脱いだ。「そしたら、もう二年か」

「そうだっけ？」僕は玄関脇に置いていたスリッパをレベッタの足元に移動させた。

「ねえ、レタ」

彼女の呼びかけに僕は頭を上げる。

「私、髪切ったの」

「随分とさっぱりしたね」

僕は適当に相槌を打ってベッドに座った。この部屋は来客を想定していないので、無理なく座れる場所といえば、さっきまで使っていた立て付けの悪いイスとベッドくらいだった。

「相変わらず寂しい部屋ね」

レベッタは無表情になっていた。この方がずっと彼女らしい。

「僕はそうは思わないけど」

「ショールームのほうがまだ生活感ありそう」

彼女はそれが常識だと言わんばかりに堂々と僕の部屋を評価した。

「床も、壁も、真っ青なタイル貼りで、台所も居間も寝室も全部一緒のワンルーム」

「僕の部屋について語りにきたのなら、また今度にしてくれないかな」

「あ、いや、そういうつもりじゃないんだけど……」

彼女は明らかに別のことを話したがっている様子だった。しかし、その話題に行き着くまでの自然な会話の流れを読んでいるのだろう。

「それで、話って？」

ただ、僕はそういった遠回りな会話が好きではない。単刀直入に彼女の話の聞きだすことにした。

「ちょっと待って。喉乾いちやった」

「冷蔵庫に水があるよ」

レベッタは一瞬だけ眉間に皺を寄せたが、すぐに穏やかな表情に変わった。以前までの彼女であれば、文句の一つや二つあったかもしれないが、いつの間にか感情をセーブする技術を身につけたらしい。

「水しかないんだけど」

冷蔵庫を開けたレベッタは、不満そうにつぶやいた。

「それしか入れてないからね」

「食事は？」

「ルームサービス」

「あっそ」

ジョークを言ったつもりだったが、彼女には伝わらなかったようだ。レベッタはそっと冷蔵庫を閉める。水の入った瓶を持っていたので、結局飲むことにしたらしい。

レベッタは僕の様子を見ながら器用に蓋を開け、ゆっくりと水を飲んだ。僕の部屋に入ってきたときから、彼女は妙な緊張感をまとっている。

「落ち着いた？」僕は問いかける。

レベッタは半分ほど飲んだビンを、コトン、とテーブルに置いた。

一歩、彼女は僕に近づいた。

また一歩。

もう一歩。

ついには、ベッドに座っている僕の目の前までやってきた。ほのかに香水のような、人工的な匂いがする。

「座りたいなら、これ使っていいよ」

僕はテーブルの方にあるイスを見る。

しかし、レベッタは動かなかった。

「座らないの？」

僕が尋ねると同時に、レベッタは僕の上に覆いかぶさった。僕はベッドの外に足を投げだして、仰向けに倒れる。

「……なに？」

「ねぇレタ。私たち、一緒に住まない？」

「またその話？」

「私の話はいつだって、この話」

僕は面倒になってレベッタから視線をそらした。だらしなく垂れ下がった彼女のTシャツからは、派手な色の下着が見える。

「一緒になったら、好きにしてもいいよ」

僕は再びレベッタと目を合わせた。

「悪いけど、僕の答えもいつだってノーだ」

レベッタはにこりと笑った。

「私、あなたしか知らないの」

「それは、知る機会がなかったって話？」

「あなた以外知りたくないってこと」

「意味が分からないんだけど」

「これから、たくさん教えてあげる」

そう言うと、レベッタは僕に顔を近づけた。

「もうすぐ、コハルが来るから」

レベッタの動きが止まる。

「コハル？」

「ルームサービスしてくれるホテルマン」

「ああ、あのアンドロイドね」

僕はレベッタの両肩を掴んでゆっくりと起き上がろうとする。レベッタは観念したのか、潔く立ち上がった。

「このために、そんな格好できたんだ？」

「そんな格好って？」

「扇情的」僕は彼女の服を顎でさした。

レベッタはTシャツの袖をひっぱって右肩を露出させた。

「実力行使ってやつ？」

「訓練でもしたの？」

「試してみる？」

「ノー」

レベッタは両手をひらひらとさせて、お手上げだという意思表示をした。

「リタ様、お食事をお持ちしました」

通信端末からコハルの声が聞こえた。

「うん。今開けるよ」

僕は立ち上がって玄関へ向かう。

「アンドロイドと話してるの？」

鼻で笑うレベッタを無視してドアを開ける。外廊下には、紙に包まれたハンバーガーとコーラをトレイに載せたコハルが待っていた。

「ハンバーガーとコーラでございます」

「ありがとう」

「朝食でお渡ししたトレイのご返却にご協力ください」

「ああ、そうだね。忘れてた」

僕はコハルの勤務時間をいたずらに延ばさないよう、足早にテーブルを歩き来した。

「ご返却承りました。ありがとうございます」

コハルは恭しく礼をした。

「注文いいかしら」

後ろからレベッタの声がしてすぐ、僕の右肩に手が置かれた。コハルはすぐに頭を上げて僕の右肩ごしにレベッタを見る。

「B区4丁目のコーヒー、いれてもらえる？」

耳元で聞こえるレベッタの声は機械のように無機質だった。

「材料がありませんので、少しお時間をいただきます」

「ええ、どれくらいかかるの？」

レベッタは僕の肩を叩いた。まるで意味のない行為だが、それが却ってレベッタらしくて笑みが溢れる。対してコハルは、レベッタの声色に警戒をした様子で慎重に答えた。

「すでに配達手配をいたしましたので、十分少々でお持ちできます」

「ま、それならいいか。じゃあ、持ってきて」

「かしこまりました」

コハルはもう一度、恭しく礼をして外廊下を歩いて行った。

「コハルが可哀想だよ」

僕は玄関のドアをそっと閉める。

「可哀想？ 機械が？」

レベッタはさっきと同じように鼻で笑った。

僕は肩に置かれた手を優しく振りほどいてイスに座った。レベッタに譲ってもよかったが、コハルと話しているのを笑われたこともあって、そこまで譲歩する気にはなれなかった。

「ねえ、レタ」

レベッタは僕の思惑を知ってか知らずか、何食わぬ素振りでベッドに座った。

僕はなにも答えずハンバーガーの包み紙を開いた。

「寂しくない？ この国での生活」

「べつに」

「どうして？」

僕はハンバーガーをコーラで胃に流し込んだ。

「それは、こっちのセリフだけど」

「信じられない」

「右に同じ」

レベッタはベッドのスプリングで勢いをつけて立ち上がった。

「この国には刺激がない。退屈がずっーっと続いている」

「僕はそうは思わないけど」

「退屈じゃないの？」

「べつに」

レベッタはテーブルに置いていた飲みかけの水を飲む。

「この国の人たちはみんな、死んでるみたいな顔してる」

僕は一瞬だけレベッタの表情を伺う。

「それには、僕も含まれてる？」

「含まれてない、かな」レベッタは首を振った。「レタだけは、特別」

「じゃあ、レベッタは？」

「そうね」

レベッタはテーブルにもたれかかって、ガラス戸越しに裏手の公園を眺めた。

「死んでいるのかもしれない」

それきり、レベッタは電源を落とした機械のように動かなくなってしまった。僕は彼女から目を離して、ハンバーガーを食べ進めた。

レベッタが言った、`僕は特別、という言葉にはどんな意味が込められているのだろう。言われてみれば、物心ついたときから今の今まで、瞳を輝かせるという経験をしてきた覚えはない。それはきっと、この国で生まれた人たちはみな同じだろう。

だけど、それでなにか不満があるわけでもなかった。むしろ、こうして安全に、文化的な毎日を過ごせる時点で幸せだ。と、すら思っていた。これ以上、なにを望むことがあるのだろうか。心の底から欲しいものなど、この静かな生活以外なにもなかった。

特別というのが少数派、という話であれば、むしろレベッタのほうが特別なのではないかと思えた。この国において、寂しいという感情が沸き起こることなんてない。そう思わないからこそ、この国にいるのではないだろうか。

ハンバーガーを食べ終えて包装紙をたたんでいるときに、通信端末から声が聞こえた。「コーヒーをお持ちしました」

「コハルだ」

僕はレベッタに視線を送った。自分の分は自分で取りに行けというジェスチャーだった。

レベッタはなにも言わずに玄関のドアを開け、コハルからコーヒーを受け取った。僕はコハルが怯えてないか心配だったが、杞憂だったようだ。

コハルが恭しく一礼をしようとしたところで、ドアは閉められた。

「休憩時間、もうすぐなんじゃない？」

レベッタはそう言いながらベッドに座った。僕は端に寄せていたパソコンを見る。彼女の言うとおりの、休憩時間は残り三分を切っていた。

「私のせいでごめん。せっかくの休憩だったのに」

「いや、いつもご飯食べたらずぐ仕事に戻るから」

レベッタはコーヒーを一口飲んだ。

「もう少し、居てもいい？」

「いいけど、退屈だよ」

「退屈しないんじゃないの？」

「僕はね」

レベッタの返事がなかったので、そのまま休憩終了の申請をして仕事を再開した。

しばらく僕が鳴らすキーボードの音だけが部屋に響いていた。隣の部屋の生活音も、外を走る車の音も聞こえない。

もしも今日目覚めた世界が、僕と、レベッタと、コハルだけの世界だと言われても信じてしまえるような静けさだった。だからこそ、レベッタは僕に会いに来たのかもしれない。

この国が守る心地よい沈黙を聞きながら、黙々と仕事を進めていく。近くに人がいる状態で働くのは初めてだったが、思っていたよりも集中することができた。

「ねえ、レタ」沈黙のような優しい声が聞こえる。

「なに？」

「本当に、寂しくないの？」

「寂しくないね」

僕は仕事の手を休めることなく答える。

「どうして？」

ついさっきも同じやりとりをした気がするが、レベッタは納得していなかったのだろう。僕はより具体的に、正直に答える。

「そもそも、寂しくなったことがないから分からないよ」

「寂しくなったことがない？　だって今、レタは一人なんだよ？」

「レベッタと一緒にいるけど」

「そういうことじゃなくて」レベッタは語気を強めた。「もっと、なんていうか、精神の話」

レベッタの言いたいことが理解できなかったのになにも答えなかった。

「私が帰ったら、一人じゃん」

「そうだね」

「そしたら、レタは一人だよ？」

そこで僕は、レベッタが言いたかったことの意味が少しだけ分かった。

「人は、みんな一人だよ」

「二人になりたいよ」

「それも結局、一人と一人だ」

後ろから微かに、コーヒーを飲む音が聞こえる。

「私たち、一緒になったら絶対に幸せになれるよ」

「そうかな」

「名前もちょっと似てるし」

なんの脈絡もない理由で、思わず笑ってしまった。

「それは、関係ないと思う」

「そうかな……」

レベッタの質問にもめげずに仕事を進めたおかげで、今日のノルマはほとんど終わった。あとは潰れた文字を目視で解析するだけの、比較的楽な仕事だけだった。

僕は会社に仕事内容と、場合によっては作業の手が止まる旨を報告した。

「どしたの？」

レベッタが右肩に顎をのせてきた。延々と鳴っていたキーボードの音が止んだので気になったのだろう。

「仕事の種類が変わっただけ」

僕は体を左にずらして右肩を開放した。レベッタもすぐベッドに座り直す。

「今更だけど、仕事っていつもなにやってるの？」

「翻訳業」

「それは知ってる」

僕はモニターに表示されているひしゃげた文字をじっと見つめた。

「最近では機械翻訳できない古典が多い。あとは、機械が読めなかった文字の解説」

「機械にも分からない文字ってあるんだ」

「昔は文字も手書きだったからね」

「手書き？」

「レベッタって本とか読む？」

「まあ、雑誌とか、辞書くらいは」

「昔、本は紙で出来てたんだよ」

「ああ……。それで手書き」

「今はほとんどが機械入力だけど、昔はそういうわけにもいかなかったから」

「ミミズみたいな文字」

レベッタはいつの間にか立ち上がって、僕の頭の上からモニターを見ていた。

「一応、社外秘のデータなんだけど」

僕は解読した文字を入力し、次の文字を表示させた。

「なるほど、人によって癖があるから機械で簡単に読み取れないってことか」

「そういうこと」

レベッタがこの仕事に理解を示してくれるチャンスだと思い、いつもより丁寧に説明してやる。会えない理由も、少しは理解してもらえらるだろう。

「つまらなそう」

そんな僕の算段をレベッタは一蹴した。こればかりは、レベッタの関心を見誤った僕のミスだ。

朝の段階で途方もなく積み上がっていたはずの仕事は、あと二割ほどしかなかった。僕はすっかり気の抜けたコーラを飲んで、解読を進めていく。

「そういえばさ」

レベッタが急に笑いはじめた。

「あの機械にリタって呼ばれてない？」

「コハルね」

僕の訂正を聞いていなかったのか、レベッタはくつくつと笑い続けていた。

「どうしてあんな風に呼ばせてるの？」

「自己紹介したときに、僕の滑舌が悪かったみたいで聞き間違えたみたい」

「再登録は？」

「面倒だし……。それに、今更言っても気まずい」

レベッタの笑い声が止んだ。

「気まずいって、相手は機械でしょ？」

「コハルだよ」

「信じられない。あのね、機械に人格はないんだよ」

「人じゃないからね」

解読していた文字がどうしても分からなかったため、不明と登録して次の文字にとりかかる。

「小さいころ、よく遊んだんだ」

「誰と？」レベッタがベッドに寝転ぶ音が聞こえた。

「ああいう、アンドロイドと」

「……ああ、そう」

レベッタはそれきり喋らなくなった。仕事のことについて、アンドロイドとの距離感を伝えるいい機会だと思ったが、またしても判断ミスをしてしまった。なかなかどうして、レベッタに僕のことを伝えるのは難しい。

興味を持ってもらえない会話をしても仕方がないので、僕もそれきりなにも言わず仕事に集中をした。

外が暗くなりはじめ、レベッタが部屋の電気をつけたころ、ようやく仕事を終わらせることができた。いつもより一時間多く働いたが、その分の給与は支給されるので悪い気はしない。

報告書を送信し、退勤の申請をしてパソコンの電源を落とす。仕事が終わったことを察したのか、レベッタは僕の顔を後ろから覗きこんできた。

「終わったの？」

僕はうなづく。

「やっぱり、退屈だった」

「僕と一緒にになったら、毎日こんな感じだけ」

僕はパソコンを折りたたんで、ベッドの袖机にしまった。

「確かに、そうなるね」

「それに、休みの日も大体こんな感じ」

レベッタはイスに座っている僕の横にしゃがみこんだ。

「ねえ、レタ」

「なに？」

上目遣いのレベッタと目が合う。

「他の国へ行く気はない？」

「うんって言うと思う？」僕は笑った。

「だよね」レベッタは無表情のまま立ち上がった。「あのさ、これからご飯食べにいかない？」

レベッタの提案を飲むか考える。構わないという気持ちと、面倒くさいという気持ちが半分ずつ均等に分かれていた。

「夜なら会えるって言ってた」

レベッタは淑やかに笑った。

「分かったよ」

僕は観念して立ち上がり、通信端末を手にとった。

「コハル」

端末の画面にデフォルメされたコハルのアイコンが映しだされる。

「いかがなさいましたか？」

「今日の晩ごはん、外で食べるからいらないよ」

「かしこまりました」

「うん。それじゃあ、行ってくるね」

「夜は肌寒くなるとの予報です。お気をつけて行ってらっしゃいませ」

僕は通信端末をテーブルに置いた。

「今のアンドロイドって、そんなことまで話せるんだ」

「そんなこと？」

「夜は肌寒いって」

「そんなの、僕たちが生まれたときからあった機能だよ」

「そうなんだ……」

感心しているレベッタをよそに、僕は外へ出る支度をした。

「それで、行くところは決まってるの？」

レベッタは自慢気にうなづく。

「E区2丁目のバーがいいかなって」

「うん。じゃあ、そこにしよう」僕はベッド横のクローゼットから薄手のコートを取り出す。「肌寒いらしいけど、なにか羽織る？」

「お構いなく」

レベッタは手を振って、そそくさと部屋を出て行った。肌の露出が多かったので心配をしたのだが、余計なお世話だったようだ。

僕はコートを羽織って電気を消し、レベッタのあとを追った。

2

日はほとんど沈んでいて、立ち並ぶマンションのエントランスの光が通りをぼんやりと照らしていた。見る限り人はおらず、僕たちの足音だけが辺りに響いている。きっと、E区に行ってもこの静寂は変わらないだろう。

隣を歩いていたレベッタが、ショートパンツのポケットから煙草の箱を取り出した。

「吸ってもいい？」

「どうぞ」

レベッタは手慣れた手つきで煙草を咥え、火をつけた。

彼女が吐いた煙がコンクリート色に溶けていく。優しく吹いていた風のおかげで、僕の方に煙がくることはなかった。

「ここ数年、本気で笑ってないなあ」

「なにそれ」脈絡のない話に僕は笑う。

「どんな映画とかドラマを見ても、虚しくてさ」

きっとこの会話に意味はないのだろう。そういった類の話をするはいつも、彼女はほんの少しだけ微笑む。

「虚しいって？」

意味のない会話は嫌いだが、目的地までの暇つぶしには丁度いいかもしれない。僕もレベッタと同じように少しだけ微笑んで、球のない会話のキャッチボールをすることにした。

「どんなハッピーエンドでもさ、自分と重ねちゃうの」

「珍しい楽しみ方だね」

「最近そうだったって話。どんなにいいお話を観ても、私の生活はなにも変わらない」

「だから面白いんじゃないの？」

「どういうこと？」

「だって、観た作品がそのまま自分の世界に影響を及ぼしたら、気軽に好きな作品を観られなくなるし、あらゆるものが破綻していくよ」

「破綻すればいいのに」

「それが目的なら、映画を観るのは遠回りだ」

レベッタは煙草の煙を吐いた。それがため息なのかは分からなかった。

「レタには夢がないの？」

「夢？」

「将来こうなりたいとか、あれが欲しい、とか」

「さあ……」

「私は愛が欲しい」

「そう」

「レタは欲しくないの？」

「なにを？」

「愛」

僕は空を見上げて、答えを考える。

「愛ってどんなもの？」

レベッタは答えなかった。まばらな足音が会話の隙間を埋める。

「分からないよ」

レベッタが小さくつぶやいた。

「分からないから、それが欲しいの」

彼女の答えに、今度は僕がなんにも言えなくなってしまった。

分からないものが欲しい。とは、一体どういうことなのだろう。それがどんなものか分かっているからこそ、欲しくなるのではないだろうか。分かっているものを手に入れて、それがいざ自分の思っているものと違ったとき、彼女は納得するのだろうか。

「それって、本当に愛じゃなきゃ駄目なの？」

レベッタは吸い終わった煙草を道端に捨てた。

「愛じゃなきゃ、駄目なの」

僕は捨てられた煙草から目を離して前を向く。もうすぐそこに、目的の店が見えていた。

「お店のおすすめは？」

「レタが好きそうなのは多分、ピクルスかなあ」

「ピクルス？ 食べたことない」

「甘いカクテルに合うから、気に入ると思う」

「お酒は飲まないよ」

「いいじゃん。今夜くらい」

レベッタは店の前までスキップをしたあと、ドアを開けて僕を招き入れてくれた。店の中は薄暗く、光の弱い照明が間隔を空けて設置されている。場所によっては足元が完全に見えないところもあった。

「電球切らしてるのかな？」

僕はレベッタに耳打ちした。レベッタは機嫌が良さそうに笑ったあと、バーカウンターにいた店員に挨拶をした。

「いらっしゃいませ」

低い声をした店員がバーカウンターから出てくる。体格がしっかりとしていたので少し威圧感があったが、所作は上品で丁寧だった。彼の雰囲気から、もしかすると店の照明は雰囲気作りのために敢えてしているのではと気が付く。

「予約してたんだけど」

「レベッタ様、ですね。こちらどうぞ」

店員は僕たちを店の奥にあるテーブル席へ案内する。

「ハンガーが後ろにございますので、よければお使いください」

「どうも」

なぜかコートを着ていないレベッタが返事をして、僕に目配せをする。安いコートなのでイスの背もたれにでも掛けようと思っていたが、もしかするとコートをハンガーに掛けることがこの店の決まりなのかもしれない。僕は意味もなく大事そうにコートを掛けた。

「本日のおすすめはこちらになります」

僕が席についたことを確認すると、店員は上質な紙で作られたメニュー表を広げ、そこに書いてあるアルコールを二つ順番に指さした。

「いかがなさいましょう？」

「どうする？」

レベッタは翻訳者のように同じことを僕に尋ねる。

「任せるよ」

僕がそう言うと分かっていたのか、レベッタは悩むことなく二人分の注文を済ませた。外国のお酒なのか、僕にはレベッタが呪文を唱えているようにしか聞こえなかった。

詠唱が成功したのか、店員は深々と頭を下げてバーカウンターに戻っていった。

「普段はこないの？　こういう店」

レベッタと目が合う。どういうわけか、僕の部屋にいたときよりも彼女が色っぽく見えた。

「こないね」僕は肩をすくめてみる。

「一度もないんだ？」

「就職祝いに、レベッタと行ったとき以来かな」

「ああ、あのとき」

レベッタは微笑んだ。

あれは確か、もう五、六年前だろうか。僕の就職が決まったと聞いたレベッタが、どうしてもお祝いしたいと半ば押し切られる形でレストランに行ったことがあった。高層マンションに併設されているお店で、高いところから一望できるマンション群の灯りは、今でもたまに思い出すくらいに綺麗だった。

「懐かしいね。あのとき、二人とも初めてお酒を飲んだんだよね。そういえば」

「そうだっけ？」

「そうだよ。私がお酒好きになったのは、あのときのお酒が美味しかったせいなんだから」

レベッタの話聞いて、そのとき彼女と話したことを思い出す。

「そっか。そうだった。僕はちょっと強めのお酒を頼んじゃって……」

「そうそう。どっちもお酒のことなんて分からなかったから、店員さんのオススメを頼んだ」

「でもあの人、度数が高いなんて言ってなかった」

「言ってたって」レベッタはくすくすと笑った。「帰り道、送っていくの大変だったんだから」

その日、どうやって家に帰ったのかは覚えていないが、レベッタが僕の家まで送り届けてくれたらしい。ただ、その日の帰り道にレベッタから一緒に住もうと誘われ、僕は断った。その記憶だけ、おぼろげながらも覚えている。

「私の思い出にはね、いつもレタがいる」

「そうなんだ」

「レタの思い出に、私はいる？」

僕とレベッタでは、おそらく思い出の定義が違うような気がした。僕はそれを思い出とは呼ばず、記憶と呼んでいた。

「思い出ってというのは、誰かと一緒になにかをすることで生まれるの」

レベッタは僕の返事を待たずに話しはじめた。

「だから、私の思い出はレタばかり」

「人がいないと思い出にはならない？」

レベッタは煙草を取りだして火をつけた。

「知らないけど……。一緒に記憶を持つから、思い出になるんじゃない？」

どうやら彼女の定義では、僕が記憶と呼ぶものも思い出に分類されるらしい。

「おまたせしました」

会話の小さな隙間をついて、店員が料理とお酒を運んできた。僕とレベッタの前にカラフルなカクテルを一杯ずつ慎重に置く。感嘆の声をあげるレベッタをよそに、ピクルスをはじめとしたいくつかの小皿も置いていった。

「ご予約の料理はどうされますか？」

「出来上がったら持ってきて頂戴」

「かしこまりました」

レベッタはコハルには言わなかった礼を店員に伝えた。

「さ、飲も。せっかく会えたんだから」

レベッタはまるで今日が特別な日かのように言って、グラスを目線の高さまで持ち上げた。僕も彼女にならってグラスを持ち、お互いのグラスを軽く触れさせる。

「乾杯」

「乾杯」

一口飲んだだけで、このカクテルが上質なものと分かった。普段飲まない僕が分かるくらいなのだから、レベッタは相当このカクテルに惚れ込んでいることだろう。

「美味しいでしょう」

レベッタはうっとりとした様子で笑った。

「うん、驚いた」

「私、カクテルは飲まないんだけど、ここのだけは飲むの」

「そうなんだ」

「これも食べてみたら？」

レベッタはグラスを持っていない手でフォークを持ち、ピクルスを頬張る。僕はレベッタの様子を伺ったあと、グラスからフォークに持ち替えて大きめのピクルスを頬張った。不思議な味ではあったが、間違いなく美味しかった。

「どう？」

「そうだね。とても美味しい」

「そう」

レベッタは満足そうにうなずいた。

「レベッタはよく来るの？　こういうお店」

「うん。あの日、お酒にハマってから、いろんなお店に行った」

「いいところはあった？」

「たくさん」

レベッタは灰皿に置いていた吸いかけの煙草を口にする。

「でも、あの日のお酒が一番美味しかったな」

煙を吐きながら、レベッタは遠い目をしていた。彼女の目に僕が映っていないような、そんな錯覚をしてしまう表情だった。

「レタ」

「なに？」

レベッタは微笑んだ。どういうわけか、今日の彼女は感情が読めない。楽しくて笑っているのか、僕の機嫌を損ねないための気遣いなのか。ただ、どちらにせよ、彼女らしくない所作だった。

「食べ物、苦手なものとかある？」

「苦手なもの？」

「嫌いなものは食べたくないでしょ？」

「まあ、そうだけど」僕は考える。「ミルクが飲めない」

「え、そうなの？」レベッタは目を見開いた。

「小さいころに腐ったのを飲んじゃって、そのときから苦手」

「そうなんだ」レベッタは一瞬、バーカウンタの方を見た。「甘いものは大丈夫？」

「それは大丈夫」僕はうなずく。

「そっか。ならよかった」

レベッタは煙草の火を灰皿に押し付けて消した。

「レタのそういう話、もっと聞きたい」

「そういう話って？」

「好きなこと、苦手なこと」

「残念だけど、もうないよ。それ以外好き嫌いはない」

「じゃあ、なにか別の話でもいい。レタの話、聞かせて」

僕は頭の中で話せそうなことを探しはじめる。僕の毎日はずっと同じで、特別話せるような記憶はなかった。そもそも、なにか起きてても日が経つとすぐに忘れてしまう。

「じゃあ、僕がどうしてあの部屋に住んでるのかって話は？」

レベッタは口をへの字に曲げた。

「つまんなそう」

「やめとく？」

「ううん。今日はレタの話を聞きにきたから」

そんな目的があったのなら、事前に知らせておいて貰いたかった。そうすれば、いくつか話題を用意できただろう。こういう話のときはいつも、最終的にレベッタが自分自身の話をはじめて会話が終わる。今回も同じようなパターンだと思っていたので、すっかり油断をしていた。

「レタはどうして、あんな部屋に住んでるの？」

レベッタは煙草に火をつけた。それで少しでも暇を潰してもらえるのならありがたい。

「あの無機質なところがいいんだ」

「そう」

興味がなさそうにレベッタは相槌を打った。

「無関心というか、余計な詮索をしてこない感じがいい」

「部屋が無関心？」

「そう。誰が住んでいるかなんて気にも留めてない」

「当たり前でしょ？ 部屋なんだから」

「でも、僕に対して余計な気遣いをしてこない部屋は、あそこしかなかった」

「床も壁も真っ青なタイルの物置部屋で？」

「うん」

「日の光もろくに入ってこないのに？」

「うん」

「台所も居間も寝室も一緒の部屋で？」

「うん」

「脱衣所もなく、ドアを開けたらすぐにシャワールームでも？」

「うん」

「部屋に玄関があって、部屋の中で靴を脱ぐんでしょ？」

「うん」

「豪華な食事もないのに？」

「うん」

「それが、無関心な部屋？」

「うん」

レベッタは今日一番の深いため息をついた。

「呆れた……」

「どういたしまして」

「レタってさ、もしかして人にも同じことを望んでる？」

「そうだね」

「そっか」

煙草の煙越しに、レベッタの笑顔が見えた。

「この国の人だね、レタは」

「レベッタもそうだよ」

「私はこの国の住人じゃない」

「それは……精神の話？」

「そうね——」

レベッタが口を開いた瞬間、店内の照明が突然消えてしまった。窓から差し込んだ月明かりが店内の一部を切り取っている。

「停電かな？」僕は小声でレベッタに尋ねる。

「ねえ、レタ」

表情は分からなかったが、レベッタの声は落ち着いていた。

「今日がなんの日か、覚えてる？」

「今日？」

「そう。今日はレタにとって特別な日」

目の前に小さな火が点った。いつの間にか、テーブルのそばに店員が立っている。店員は拳銃式の長細いライターを持ち、その先から小さな火を点していた。

僕の動揺をよそに、店員はライターの火をテーブルに置かれたろうそくに灯していく。

そこで僕は、テーブルの真ん中になにか置かれていることに気が付いた。

「ハッピーバースデー」

撫でるような息遣いでレベッタは言った。

「今日、僕の誕生日？」

「まさか、忘れてた？」

「……うん」

「やっぱり」

レベッタは笑った。

「ほら、火、消して」

僕は言われるがまま、ろうそくに灯された火を吹き消した。

「おめでとう」

レベッタの言葉をきっかけにして、店内が明るくなる。テーブルの上には、小さなホールケーキが置かれていた。

「ありがとう、レベッタ」

僕は久しぶりの祝いごとに、心の底から感動していた。

「去年は誰とも祝わなかった？」

「うん。というか、学校に入る前が最後だから、もう……」

「え、じゃあ十年以上してないじゃん」

「そうなるね」

「そっか」

レベッタはなにかに納得したのか、ゆっくりとうなずいた。

「じゃあ、喜んでくれた？」

「うん、とっても」

「よかった」レベッタはくすくすと笑った。「今日のこと、一生忘れない？」

「もちろん、忘れないよ」僕はすぐに返事をする。

「こういう思い出、あってもいいでしょ？」

「そうだね」

レベッタは満足そうに僕の様子を眺めたあと、フォークとナイフを手にとった。

「今更だけど……ケーキは大丈夫？」

「もちろん」

「半分食べられる？」

「うん」

レベッタは手際よくケーキを切り分けて、半分を彼女の取り皿に盛り付ける。豪華な

皿にのったもう半分のケーキは、僕の前に置かれた。

「おめでとう」

「ありがとう」

僕はフォークを持ち、それをゆっくりとケーキに沈めていく。

「でも、どうして僕の誕生日を？」

「覚えてたのかってこと？」

「そう。言ったことあったっけ？」

「昔に一回だけね。それから、ずっと祝いたって思ってたんだから」

「そうだったんだ」

僕はケーキを一口頬張る。レベッタの言うとおりの、このお店のものはなんでも美味しかった。

「美味しい」

「よかったよかった」

レベッタの口元にクリームがついている。僕が自分の口元を指さすと、レベッタは恥ずかしそうにしながら舌を伸ばしてクリームを舐めた。

今、この瞬間だけ、僕たちは子どものころに戻れたような気がする。幼いころから同じ学校に通い、同じような環境で育ってきた二人。

それなのに、この国に対する考え方は全く違う。

レベッタが欲しがっている愛を知らない僕たちが、それを手にすることはできないだろう。きっと、彼女もそれを分かっているはずだ。

今日が終われば、僕たちはまた分かり合えない関係に戻る。けれど、この瞬間だけは同じことを考えて、同じ場所に立ち、同じ記憶を持っていたあのころの僕たちでいられる。

これが錯覚だということは分かっていた。それでも構わない。そう思えるほど気分が良かった。美味しいものを口にしている今は、美味しい言葉しか口にしたくなかった。

レベッタも同じことを思っていたのか、この時間を噛みしめるようにゆっくりとケーキを食べ、残っていたカクテルを大事そうに飲み干した。同時にグラスを置いて、お互い目を合わせる。

「そろそろ行こっか」

レベッタは店員を呼びつけ、カードを渡した。

「僕も出すよ」

僕は慌てて立ち上がり、掛けてあったコートのポケットを探った。

「いいの。レタの部屋で飲んだコーヒーの分」レベッタはゆっくりと立ち上がった。「あれって、レタに請求がいくでしょ？」

「そうだけど、見合っていない」

レベッタは笑いながら首を振った。

「今日はバースデーなんだから、これくらいさせてよ」

レベッタの言葉に、僕は渋々自分のカードをしまった。

「ごちそうさま。美味しかった」

レベッタは店員からカードを受け取って、颯爽と店を出て行く。僕も同じように挨拶をして、レベッタのあとを追った。

「ああ、美味しかった！」

「そうだね。美味しかった」

僕は店のドアを閉めながら、レベッタの独り言に相槌を打つ。普段なら絶対にやならぬことだが、今日は不思議と返事をしてみたくなった。

「ねえ、レタ」

上機嫌な様子でレベッタは振り向いた。

「これからさ、学校に行かない？」

「学校？」

僕は今の時間を確認しようとポケットを探る。しかし、時間が分かるものを持ってきていなかった。

「今何時だろう」

「八時くらいじゃない？ 明日は早いの？」

「ううん」

「じゃあ、行こ」

レベッタは返事を待たずに僕の手をとった。

3

僕はレベッタに手を引かれながらしばらく歩いた。いつものことだが、道中で誰ともすれ違うことはなかった。

「見えてきた」

レベッタはちらりと僕の方を見たあと、また前を向いた。道の先には、懐かしい建物がマンションの隙間に隠れるようにして建っていた。

老朽化が進んでおり、ところどころにヒビが入っているコンクリートの外装。この国ではすでに珍しくなっている二階建ての建物で、周りに立ち並ぶ高層マンションのせいでも月明かりも届かず、唯一の明かりである街灯も管理が行き届いていないのか切れかけていた。

「ほんの数年前まで、ここに通ってたんだよね」

レベッタはため息混じりに言った。その言葉をきっかけにして、自分の学生時代を思い出す。

入学して半年ほどは、生活をしていくうえで必要最低限の知識と教養を教え、そのあとは、生徒が一番得意なことを中心に学ばせるというのがこの学校の方針だった。僕は早い段階で語学の能力が長けていることが分かり、その代償なのか、国のなりたちや歴史への興味関心が極端に薄く、加えて芸術等の表現をすることが苦手だということも判明した。

担当だった教師は僕の傾向を知るやいなや本来必修であるはずの授業を減らし、語学の授業ばかりをするようになった。後々レベッタから聞いた話によると、その教師は小説家を目指していたそうで、僕を使って半分趣味のような授業をしていたらしい。

ただ、僕自身それで不満はなかったし、それが今の仕事につながっていることもあって、感謝の気持ちのほうが強かった。

恐らく平均的な家庭、少なくともレベッタの家庭よりかは厳しい僕の両親から、授業と知識の偏りを隠し通せたのは、ひとえに対面形式、登校という形をとっていたからに他ならない。授業は在宅でも受けることはできたのだが、皮肉にも僕の両親、とくに母親がそれを許さなかった。

初めて教室に入ったとき、六つある机には誰も座っておらず、授業が始まっても誰も来ることはなかったのも、この国の子どもは自分しかいないのだと思っていた。しかし、これもあとからレベッタに聞いた話だが、余程の理由がないかぎり、登校を選ぶ生徒はいないのだそうだ。加えて、登校も在宅も自分の都合で、自由な時間に受けられるらしく、それを知らされていなかった僕は、毎日のように同じ時間に授業を受けていた。

ただ、そんな毎日を送っているうちに、気付けば隣の席にレベッタがいた。学校に行き始めてから一ヶ月も経たないうちにレベッタと会った気もするが、ほとんど覚えていない。

レベッタはどちらかというと理系に特化していたが、本人の希望で語学を選考していた。僕が語学の勉強を本格的に始めたときも、彼女はずっと僕の隣にいた。学校が終わったあと、レベッタが分からないと嘆いていた問題を、時間を掛けて教えていたことも、今では懐かしい記憶になっている。彼女に言わせれば、これも思い出なのかもしれないが。

レベッタと同じで、僕の記憶にもいつもレベッタがいた。彼女にそう言われるまで、考えたこともなかった。

「懐かしいね」

レベッタがつぶやく。

「覚えてる？ 私が初めて登校した日から、卒業するまで、ずっとレタと一緒にだった」

「そうだね」

「なんで私が語学を専攻したか、知ってる？」

僕はレベッタを見る。レベッタはじっと僕を見つめていた。

「レタと別々の授業になるのが嫌だったの」

「そうだったんだ」

「うん。家でもほとんど一人なのに、学校でも一人は嫌だから」

レベッタは昔も今も、実家ぐらしのはずだった。それも僕が尋ねたわけではなく、彼女の話から知った断片的な情報だった。

「一人になりたくないから、語学を専攻したの？」

「うん」

「本当は数学が得意だったのに？」

「うん」

「将来の仕事が変わってしまうかもしれないのに？」

「うん」

「ついこの前、ライターの仕事もやめたじゃないか」

「うん」

「本当は、こっちの道に進みたくなかった？」

「うん」

僕は今日一番の深いため息をついた。

「呆れた……」

「どういたしまして」

「レベッタにとって、人といえることはそんなに大切なこと？」

「もちろん」

レベッタは入り口のドアまで歩いた。つないでいた手は、いつの間にか解かれていた。

「鍵かかっている」

「当たり前だよ」

僕はレベッタのところまで歩いて行く。ここまで来ると、街灯の僅かな光も届かない。

「まあ、それもそっか」

暗がりのなか、目を凝らしてレベッタの表情を見ようとしていると、突然ライターの花がついた。レベッタが啜っていた煙草に火が点る。

「煙草、いつ始めたの？」

「最近」

「美味しい？」

「全然」

レベッタはゆっくりと煙を吐く。

「この国さ、外からどう呼ばれてるか知ってる？」

僕は黙って彼女の言葉を待った。

「孤独の国、だってさ。笑えるよね」

「でもそれは、この国が掲げている思想だよ」

「他人からの非干渉って、そもそも国としてどうなの？」レベッタは吐き捨てるように言った。「ほんと、馬鹿みたい」

「僕はいいと思うけど」

「私はそうは思わない」

「過干渉な人間といるより、こっちのほうがいい」

「それって私のこと？」

「なにが？」

「過干渉な人間」

僕はレベッタを傷つけないように言葉を選ぶ。

「レベッタは、丁度いいくらい」

咄嗟に選んだ言葉だったが、それが一番しっくりくる表現だった。

「そう」

レベッタは短く答えて煙草を吸った。僕はガラス張りのドアに寄りかかって、コンクリートの壁に切り取られた夜空を眺める。周囲が暗いせいか、星がよく見えた。

「どうしてレタはこの国で生きていけるの？」

「どうしてって……。どうしてだろう」

僕は思ったことをそのまま口にする。

「寂しくないの？」

「寂しくないね」

「朝起きたら一人で、夜寝るときも一人なんだよ？」

「また、その話？」

「どうして寂しくないの？ それって、孤独なんじゃないの？」

「孤独かもしれないね」

「じゃあ、どうして……？」

僕は星空を眺めながら考える。今日はいろいろと考えさせられる日のようだ。

「そもそも、孤独って寂しいのかな？」

「え？」

「僕にしてみれば、孤独ほど自由なことはないと思う。僕を縛りつけるのは、いつだって他人だから」

煙草の火がレベッタの口元にある。彼女は次の言葉を待っているようだった。

「誰かと一緒にいると、どうしてもその人との摩擦を減らすために自分から歩み寄りな
きゃいけない。僕はその歩み寄った距離に、価値があるとは思えないんだ」

「どうして？」

「これは価値観の話だから、理解されないかもしれないけれど……。お互いが歩み寄った
ところで、行き着く先に本当の自分はいないんだ。摩擦が限りなく無くなった中間地点
は、本来の自分でいられる場所とはかけ離れているというか……」

「それじゃあ、今のレタがいる場所は、本当の自分でいられる場所じゃないの？」

「いや、僕は自分の場所から離れないから」

「それじゃあ、私といるときには摩擦は感じない？」

「僕はね。でも、レベッタはきっと違う」

レベッタはなにか言いかけて、黙ってしまった。

「レベッタは僕に歩み寄っているんだ。だからいつか、僕に近づいた分だけストレスと
か、不満が募っていくと思う。そしていつか溢れて、僕にもっと歩み寄って欲しいって
思うはず」

「歩み寄らなくてもいい方法はないの？」

「まったく同じ思想を持っていれば、できるかもね」

「思想が違ったら？」

「自分の思想を変えるか、相手の思想を変えるしかない。さっきと同じ話になるけど」

「そっか」

レベッタの手元から小さな煙草の火が落ちて、地面につく前に消えた。

「結局、孤独になるしかないのかな」

レベッタはため息のように煙を吐いて、煙草を地面に捨てた。

「ありがとう。レタのおかげで、素敵な夜になった」

「それは、僕の方こそ」

レベッタは僕の方を向いて、そっと手をとった。

「あったかいね」

「そうかな？ レベッタの手のほうがあったかいと思うけど」

「ううん。レタの手、あったかい」

そう言って、レベッタは俯いた。

「ねえ、レタ」

「なに？」

「今晚だけ、レタの部屋に泊まってもいい？」

僕の脳裏に、昼間レベッタに押し倒された映像がフラッシュバックする。そのまま僕
は、反射的にレベッタの手を離してしまった。

「レベッタがどんなつもりで言ったのか分からないけれど……」

僕もレベッタと同じように俯いた。

「それは過干渉だ。僕にとって」

レベッタは一呼吸も二呼吸もおいて、やっと一言つぶやいた。

「そっか……」

レベッタの悲痛な声を聞いて、胸のあたりが締め付けられるような感覚になった。しかし、ここで同情して歩み寄ってしまえば、僕は僕でなくなる。この国で自分を守るのは自分だけなのだ。それは、肉体や精神の話ではなく、もっと根本的な、性質の話。

「僕は、わがままなんだ。きっと」

自分でも分かるくらいに声が震えていた。

「今の自分が気に入ってるから、手放したくないんだと思う。そして、この国ならその生き方ができる」

レベッタはポケットから煙草を取りだして口にくわえ、ライターを僕に差し出す。レベッタの意図は分からなかったが、僕は黙って彼女の煙草に火をつけた。

「ありがとう」

レベッタは微笑んだ。

「ううん」

僕はレベッタのショートパンツのポケットにライターを返してやった。

「なんか、今日のレタの話聞いて、いろいろ納得できたかもしれない」

「納得？」

「うん」レベッタはうなずく。「ごめんね。こんなところまで付きあわせちゃって」

「別に構わないよ」

「今日だけなら？」

僕は一瞬考える。

「そうだね。今日だけなら」

レベッタはさっきと同じような顔で微笑む。それは仮面のように、本音の上に張り付けた表情のような気がしてならなかった。

どうして彼女は、僕に干渉したがるのだろうか。もしかすると愚問なのかもしれない。けれど、いくら考えても納得のいく答えは出なかった。ただ、それを彼女に尋ねるという行為が愚かであることだけは分かっていた。

僕は僕自身を守るために、沈黙を選んだ。優しい言葉をかけたい気持ちは本音だが、それは僕が守っているものを消費してしまう。けれど、レベッタを拒絶するような言葉は本音じゃない。

心と言葉が一致してないときは、なにも言わないほうがいい。幼少期から誰に言われるでもなく身につけた、自分を守る方法だった。

心にもない言葉を発したときに、初めて矛盾が生じる。そして、それを正当化するために取り繕う。誰かに矛盾を指摘されないために。自分の言葉が軽くなるために。

そうしていつしか、自分の言動は誰かの価値観に左右されていく。それらは遅効性の毒のように、じわじわと自分を蝕んでいく。

精神も、感性も、生活も、そして、生き方も。

だからこそ僕は、取り繕う必要のない孤独の国の思想に惹かれ、住みついている。

他人との非干渉。これは国の思想ではない。僕自身の思想だ。僕がそうありたいと思っていたところに、偶然この国があったのだ。

一人でいい。

一人がいい。

一人の集団のなかで、僕は生きていたい。

「レタ」

レベッタの声を聞いて顔を上げる。その声色には、どこか棘があるような気がした。

「今度はいつ会えそう？」

「さあ」僕は考えるフリをする。「暇なときなら、いつでも」

「いつも暇じゃない」

「仕事と遊びの分別はついているつもりだけど」

「冗談」

レベッタは笑って僕の肩を叩いた。

「じゃあ、私帰るね」

「うん。気をつけて」

「それは、お互い様」

レベッタは手を振って、僕の元から去っていった。

僕はレベッタの姿が見えなくなるまで、ただ、立っていた。

第二番 ゆっくりと悲しさをこめて Lent et triste

1

僕の誕生日から一ヶ月が過ぎたある日、朝食後のホットコーヒーを飲みながらベランダで一息ついていると、アパートの裏手にある公園に一人の若い男性が入ってきた。

この公園に人がいるの見たのは去年ぶりだった。僕はコーヒーを飲み切るまでの暇つぶしに彼の行方を見守ることにした。大きな旅行カバンを引きずっているのが、旅行者か、もしかすると引っ越しの最中なのかもしれない。

公園の中央に差し掛かったところで彼は立ち止まった。両膝に両手をつき、わざとらしく全身で疲れを表現しているところを見ると、外国の人間のように思えた。

しばらく様子を見てみると、彼は小さく「よし」とつぶやいて顔を上げた。「すみませーん。どなたか道案内してくれませんか？」

彼の通る声が辺りにこだました。僕は驚いてカップを落としそうになる。今の動きで居場所がバレてしまったかと思ったが、彼はもう一度同じように叫んだ。

静寂を守るこの国で大声を出すことは、緊急事態を意味する。だが、内容を聞くに緊急性があって誰かを呼んでいるわけではなさそうだった。

このまま何度も大声を出せば、不測の事態と思われるか、彼自身が危険因子とみなされるか、どちらにせよ警察に通報がいくだろう。

放っておいても良かったが、外国から来た人間のほとんどは、コンクリートだけで代わり映えのしない風景に自分の居場所が分からなくなる。道が分からないだけで通報され、万が一にでも国を追い出されるようなことになったら、それこそ彼は自分の居場所を失うかもしれない。

きっと、彼もこの国の孤独を求めてきたのだろう。

そう思えたのは、一ヶ月前にレベッタと話したからだろうか。

「どうかした？」

ほんの気まぐれだったが、彼に声をかけてしまった。彼と奇行と同じくらい、僕もこの国では珍しいことをしたかもしれない。

彼は静かになり、辺りを見回していた。声は聞こえたが、僕がどこにいるかは分からないらしい。

「こっちだよ」僕は手を振った。「この国であんまり大声は出さないほうがいい」

彼に届くように声を張ってやった。恐らくこの一言で周りの住人も色々と察しただろう。

「あ、すみません……」

彼は頭を下げたあと、ずるずると荷物を引きずって僕の方へ歩いてきた。

「すみません。ご迷惑おかけしました」

彼はもう一度頭を下げたあと、控えめなトーンで謝罪をした。とはいえ、僕はアパートの二階にいたので、真下の階にいる大家には十分聞こえているだろう。

「迷子？」僕は最低限の会話で済むように言葉を選ぶ。

「はい。どこも一緒に分からなくて」

「目的地は？」

「C区五丁目二番地のマンションなんですけど……」

そう言ってすぐ、彼はまた頭を下げた。

「すみません、申し遅れました。俺、ヒィカと言います」

彼は三回目の謝罪をした。すべて違う声色で謝っているあたり、謝ることが得意なのかもしれない。

「C区の五丁目二番地だけど、君が公園に入ってきた道を逆走して、三番目の交差点を右、そのまま真っすぐ行くと車両用の信号が見えてくるから、そこを左に曲がれば五丁目二番地だよ」

僕は彼の不必要な自己紹介を無視して目的地までの道を伝える。彼は即座にメモをとったようだったが、不安そうな表情のままだった。

「えっと、なるほど。了解です。あっと、もう一度だけ確認してもいいですか？」

彼はメモ書きを何度も読み上げた。メモは合っていたが、本人はそこまでの道をイメージできないのだろう。四、五回確認しても表情は変わらなかった。

そんな様子を見かねて、僕は彼を直接マンションへ案内することにした。今日は仕事もないし、これくらいの親切ならばこの国の思想に反することもないだろう。それに、彼がまた迷ってここに戻ってくるほうが面倒だと思った。

僕はすぐに支度をして、コハルに出かける旨を伝えて部屋を出た。アパート脇の細道から裏手の公園に出る。彼は慌てて荷物を持って、僕の方へ駆け寄ってきた。

「本当にすみません。わざわざ」

僕は目配せだけして歩きだす。彼は荷物が重いのか、おぼつかない足取りで僕のあとについてきた。

「ここって、本当に人がいないんですね」

「そうだね」

僕はその感想が妙におかしくて、笑ってしまった。

「すごい国です。夢みたいですよ」

「じゃあ僕は、夢の国の住人かな」

彼は少しだけ早く歩き、僕の隣に来た。

「確かに。そのとおりですね」

ジョークをそのまま受け取ってしまったのか、彼は目を輝かせて僕のことは見ている。

「ここは、静かでいいところですね」

「うん」

僕は短く返事をして前を向いた。今まで何度か外の国の人間と話したことはあったが、彼の言葉や仕草は、今まで会ったことのある人のなかでも一際珍しいものだった。

感嘆の言葉を聞きながら、五丁目二番地までの道を歩いて行く。彼の感想のなかで一番おもしろかったのは「見ていて飽きないです」だった。僕にはコンクリートだらけの

灰色に見えているが、きっと彼にはカラフルな遊園地にでも見えているのだろう。

隣から聞こえる感嘆句のバリエーションがほとんど明らかになったころ、目的地が遠くに見えてきた。

「この先が二番地だよ」僕は道の端にある看板を指さした。

「なるほど。どのマンションだろ……」彼はカバンから写真を取り出した。「三本線のマーカーがあるマンションってありますか？」

「赤二本と黒一本のがあるかな」

「ああ、じゃあ、それです！」

嬉しそうにはしゃぐ彼の一挙手一投足が珍しくて、つい眺めてしまう。本当に、今まで会ったことのないタイプの人間だった。

「すみません、えっと……」彼は困ったような表情になった。「その、差し支えなければ、お名前教えていただいてもいいですか？」

「レタ」

断る理由を考えるのが面倒だったので正直に答える。

「レタさん、ですね。いい名前だ」

彼は納得するようにうなずいたあと、僕を見た。

「せっかくなので、なにかお礼させてください」

「お礼？」

「ご飯でも……と言いたいところですけど、ちょっと差し出がましいですかね」

僕はうなずいた。礼にしては過剰な気もするし、なによりこれ以上彼といると、道案内以上の関係を求められそうな予感がした。

「あ、じゃあ音楽とか聞きますか？ 俺、たくさん持ってるので」

「大丈夫。見返りが欲しくて案内したわけじゃないから」

「あ、いや、それはもちろん、分かっているのですが……」

彼は肩を落とした。もしかすると彼は、過剰に礼をしなくてはならない使命を背負っているのかもしれない。ただ、だからといって僕が協力する義理はない。

「じゃあ、僕はこれで」

「あ」彼は小さくつぶやいて僕の足を止める。

「まだなにか？」

僕は苛立ちを隠すことなく振り向いた。

「本当にこれが最後なんですけど、もしよければ連絡先、教えていただけませんか？」

「連絡先？」

「はい。その、なにかあったときに連絡できるといいかなって」

「なにかって？」

「例えば……」彼は言葉を詰まらせたあと、すぐに表情を明るくした。「そうだ。お礼とかじゃなくて、一緒にお茶でも飲みたくなったときのために」

意外な答えに僕は吹きだしてしまった。なるほど。そういう話ならばお互いにつまらない気遣いはいらぬ。これ以上近い関係になるのはどうかと思ったが、思っていたよりも彼は面白い人間かもしれない。

この国の人間からすれば、外の国の人間は過干渉なところが多いが、不思議と彼の振

る舞いに嫌悪感はなかった。その理由も、ほんの少しだけ気になっていた。

「君の名前、なんだっけ？」僕は尋ねる。

「えっと、ヒィカです」彼は最初に名乗ったときと同じように申し訳なさそうに言った。

「ヒィカね」

僕は道案内を決めたときのような、ほんのささいな気まぐれで、連絡先を渡すことにした。

「引き止めちゃってすみませんでした。また連絡します」

そう言ってお辞儀するヒィカを後目に、僕は帰路についた。

アパートにつくと、ちょうどコハルが外廊下の階段をのぼっているところだった。

「おかえりなさいませ」

コハルは階段をのぼりながら僕に顔を向けた。

「ただいま。危ないから前向きなよ」

「かしこまりました」

慎重に階段をのぼっているコハルについていく。コハルは階段をのぼるのが苦手らしく、いつもふらつきながら段差に足をかけていた。

「オーダー？」

「はい。朝食を伺いにいきます」

「そっか。みんないつもこの時間に朝ごはんを食べるの？」

「申し訳ございません。その質問はプライバシーロックが掛かっています」

コハルに断られて、僕は自分のした質問に驚いた。今まで他人について質問をしたこともなければ、コハルが質問に答えてくれなかったことも初めてだった。もしかすると、さっきまでヒィカと話していた影響で、僕の感覚が少し狂ったのかもしれない。

「それじゃあ、お仕事頑張ってね」

「ありがとうございます」

無事二階に到着したコハルの横をすり抜けて、僕は自分の部屋に戻った。ドアを閉めた瞬間、自分の世界に帰ってきたような気がして、思わずため息をついた。人に会って得られるものはいつも、ほんの少しの後悔と、遠い未来で役に立ちそうな発見だけ。

やはりあのとき無視をすればよかったとも思ったが、そんな後悔こそ、先に立たないものなので考えるのを止めた。

僕はベッドに寝転がり、袖机の上に置いてあった本の電源を入れた。すぐに画面が明るくなり、読み途中の小説が表示される。

何度か寝転がって楽な体勢を見つけたあと、すぐに小説の世界にのめり込んでいった。

ふと、緊迫した声が聞こえた気がした。

もう一度。

コハルの声だろうか。

「リ夕様！　大丈夫ですか！」

頭が上手く回っていない。なぜコハルは僕のことを心配しているのだろう。

「登録住所の管理者へ通報します。あと、二十五秒」

コハルのものではない、無機質なシステム音声がかえった。

その瞬間、僕は飛び起きた。

部屋はいつの間にか薄暗くなっている。僕は飛び起きた勢いそのままテーブルに置いてある通信端末をとった。

「リタ様！」

コハルはいつもよりも大きな声で僕に訴えかけている。端末の画面には危険という文字が赤色に点滅していた。

「コハル」

声を発した途端に、端末の画面は元に戻った。

「リタ様、体調はいかがですか？」

「大丈夫。心配いらないよ」

声が掠れていたの、咳払いをする。

「ただいまお部屋に向かっています」

「大丈夫だよ。えっと……」僕は端末の画面を切り替えて今の時間を確認する。「うん、ちょっと寝すぎただけだから」

「お薬をお持ちいたしましょうか？」

「ううん」

「かしこまりました」

僕は時間をかけて深呼吸をする。改めて通信端末を見ると、時刻は夕方の十六時を過ぎていた。どうやら、部屋に帰って本を読みながら眠ってしまい、昼過ぎにくるコハルからの呼びかけも無視していたらしい。

心臓が高鳴っている。僕はもう一度だけ深呼吸をした。数年に一回、どうしてもこの手のミスをしてしまう。危うく、大騒ぎになるところだった。

念のため、端末から救急の通知が飛んでいないかを確認する。安否の確認が一定時間とれないとき、確認者の判断で救急の通報をしなくてはならない。この場合、コハルからの通報を受けたアパートの管理人がその判断をすることになる。僕はコハルに、就寝時以外の時間で四時間以上返事がない、かつ生活音がしないときに通報するよう伝えてある。

僕は冷蔵庫から水の入ったビンを取りだして一気に飲み干した。あと二十五秒、起きるのが遅かったら一階に住む大家が僕の部屋に押しかけてくるところだった。

「コハル」

僕は再びテーブルに戻り、通信端末を手にとった。

「いかがなさいましたか？」

「なにか飲みたい」

「炭酸でよろしいですか？」

「ううん。なにか、落ち着くものがないな」

「ハーブティはいかがでしょう」

今までコハルからハーブティを勧められることがなかったので少し驚いたが、よくよく考えると今の気分にはぴったりかもしれない。

「じゃあ、甘めで、渋くないものを」

「かしこまりました。五分ほどでお持ちいたします」

「うん。ありがとう」

コハルと会話して気が緩んだのか、体の感覚が鮮明になりつつあった。まだあたたかい季節だが、妙に肌寒い。そこで僕は、先ほどの失態で汗をかいていたことに気が付く。

「コハル」

「いかがなさいましたか？」

「今からシャワー浴びるから、十五分後に持ってきてもらえる？」

「かしこまりました」

端末の画面が切り替わったことを確認して、シャワールームに向かう。洗濯用のカゴに服を投げ入れ、シャワールームのドアを開けた。夕暮れの日が差し込んでおかげで、電気をつけなくても十分に明るかった。

すっかり立て付けが悪くなったドアを閉め、ゆっくりとコックをひねる。すぐに丁度いい温度のお湯が頭から降り注いだ。

ふと、どういうわけかレベッタのことが頭をよぎる。あの誕生日以来、体の調子が変わった気がする。今日ほどではないが、思っていたより長く寝てしまう日も増えたとし、なにより、レベッタのことを考える時間が多くなっていた。

彼女が僕と一緒にいたい理由は一体なんだろう。もし、彼女自身の尊厳や自尊心を守るために僕の存在を利用しているのであれば、それは危険なことだと伝えなければならぬ。

僕はレベッタの期待に応えられないし、万が一応えたとしても、自分の性質を守るためにまた一人になりたがるだろう。

でも、それがこの国では当たり前のこと。

レベッタが求める一緒にいるのは、きっと物理的な話だけではないはずだ。彼女が本当に求めているものはなんだろう。

思い出？

共感？

体温……？

どうして彼女は、寂しいことを恐れるのだろうか。

孤独でいることの、なにが寂しいのだろうか。

一人でいれば、人は孤独になるのだろうか。

寂しいことと、一人でいることは同じではないはずだ。

衣食住が当たり前で、更にそれらが機械によってほとんど自動化されているこの世の中で、わざわざ人とふれあう必要はあるのだろうか。本当の自分を切り売りしてまで、他人に執着する必要があるのだろうか。

考えがまとまらないうちに、全身を洗い終えてしまった。コックを締めるのと同時に思考回路にも蓋をする。

シャワールームから出て着替えを済ませたタイミングで、通信端末からコハルの声が聞こえた。

「ハーブティをお持ちしました」

「ありがとう。今開けるよ」

僕はタオルを頭にかぶせて、玄関のドアを開けた。コハルからティーカップを受け取る。

「ありがとう」

「それでは、失礼します」

そう言うと、コハルはそそくさと戻っていった。二十四時間対応してくれるとはいえ、コハルにはコハルの時間があるのだろう。

閉めたドアにもたれかかって、ハーブティを一口飲む。お腹のあたりがじんわりと温かくなるにつれ、引きずっていた焦りや不安が和らいでいった。

僕の気分が元に戻ったことを見計らったかのように、テーブル上の通信端末から通知音が聞こえた。端末のアドレスはほとんど誰にも教えていない。どこからのメッセージか記憶を辿って、すぐ答えに行き着いた。

【件名】今日はありがとうございました。

【内容】こんばんは。ヒィカです。先ほどはご案内頂きありがとうございました。おかげさまで妹とも合流できて、今は部屋でのんびり二人でお茶を飲んでいます。ついさっき妹と相談しまして、今度レタさんを家に招こうかという話になっているのですが、ご都合が良い日時ってありますか？

僕はテーブルから端末を拾い上げて、ベッドに寝転ぶ。予想通り、今朝連絡先を交換したヒィカからだった。どうやらヒィカは、兄妹で引っ越しをしてきたらしい。

彼のメッセージは話をしたときと同様、距離感は近いものの、気を使っているのが見て取れた。悪く言えば気を使っているとわざわざアピールをしているような文章、とも取れるが、変に取り繕って本論がおろそかになるよりは数倍ましだった。つまり、僕は彼の文章が嫌いではない。

仕事柄、人の使う言葉がどうしても気になってしまう。とはいえ僕も、偉そうにできるほど立派な文章は書いていないので、評価も程々に返信文を考える。

【件名】RE: 今日はありがとうございました。

【内容】こんばんは。合流できたのならなにより。それと、明日から週末まで仕事だからあまり都合はよくないかな。お気遣いありがとう。またの機会に。

遠慮します。の一言に、最大限の装飾を付け加えてメッセージを送り返した。僕は仰向けになって伸びをする。このまま再び寝てもいいが、あと数時間で夕食の時間がきてしまう。もうないとは思いたい、日に二度も同じ失敗はしたくない。

ベッドに置いてあった本を手取る。読みかけの小説が表示されたが、今はただ頭を空っぽにして適当に文字を流し読みしたい気分だった。本を操作して一覧に戻り、入っているデータから適当な論文を表示させた。

しばらく目に文字を映していると、通信端末から再び通知音が聞こえた。

【件名】招待の件につきまして

【内容】レタさんが案内してくれたおかげで、ついさっき引っ越し作業が一段落しました。あのまま迷子だったらきっと明け方まで徹夜だったと思います……。それと、表題の件ですが、ちょっと気が早かったですね、すみません。なにかのついででもよいので、またの機会にぜひ、よろしくお願いします。

僕は今まで読んでいた文章と同じようにメッセージを流し読みする。一度本を読むと、なかなか戻って来られない。僕の場合、小説も論文も同じだった。

少しずつ頭をチューニングして、ヒカからのメッセージを読み返す。徹夜のくだりはどういった意図を持って書いたのか分からなかったが、概ねよい文章といえるだろう。あくまでも僕にとって、だが。

次のメッセージでやりとりが終わる文章を考えはじめたとき、ふと、もう一度ヒカに会ってみてもいいかもしれない。という思いが湧いて出てきた。もし話が合うようだったら、レベッタが抱いているであろう寂しさについて、第三者から意見を聞けるかもしれない。気まぐれであることに違いはないが、少なくとも会って不快に感じることはなさそうだった。

【件名】RE: 招待の件につきまして

【内容】週末の昼頃なら空いているから、A区の喫茶店でお茶でもどう？

メッセージを送って数秒後、すぐに返事が返ってきた。

【件名】RE:RE: 招待の件につきまして

【内容】本当ですか！ 週末は俺も空いてるので、レタさんの都合に合わせてます！

誤字を指摘したい気持ちをぐっと堪え、詳しい日時を提案するメッセージを送ってすぐ、通信端末を枕の横に放り投げた。

自然とため息がでる。自分で決めたこととはいえ、これ以上やりとりをすると約束したことを後悔しそうだった。

それから僕は夕食の時間まで本の文字に目を滑らせた。断片的に頭に入ってくる文字が、あの日の出来事を意識させる。きっと、僕自身がそういう言葉を選びとっているのだろう。

レベッタに押し倒されてベッドに寝転んだあのとき、彼女を受け入れていたら、今頃どうなっていただろう。意味のない仮定だと分かっているながらも、頭は勝手に想像を続ける。

腕のなかで眠るレベッタ。それを微笑みながら見つめる僕。もしかしたら強く抱きし

めるかもしれない。そして、それに気付いたレベッタも僕のことを抱きしめる。その瞬間、僕はレベッタの体温がたまらなく愛おしくなるだろう。

果たしてそこに、孤独は存在しないのだろうか。

どんなに甘い言葉を交わしたって、どんなに激しく体を交わしたって、僕らは一人。一人ずつ。一人同士の人間だ。

きっとそれらの行為は、孤独を紛らわせているだけなのだ。その瞬間は孤独を忘れられるのかもしれない。だが、限りなく早い速度で迫ってくる孤独の恐怖から逃れるために、言葉と体で孤独を躲し続けなくてはならない。そして、それを続けるためには、同じ思想を持った相手同士でなくては成り立たない。

そうしてまた、ふとした瞬間に、自分は孤独だ。ということをおぼえるのだ。

そんなことを繰り返すくらいなら、初めから孤独を受け入れるべきなのではないだろうか。孤独からの開放を求めれば求めるほど、誰かに歩み寄りなくてはならないし、結局は息苦しくなって本当の自分を見失ってしまう。

その瞬間こそ、恐れるべきなのではないだろうか。

それはきっと、孤独よりも寂しくて、一人よりも少ない。つまり、欠けている状態。

もし僕が、レベッタなしでは生きられなくなったとして、そこにはどれほどの恐怖と苦痛が待っているのか。

逆に、レベッタがそうだったとしたら……。

だから僕は――

「リタ様。ご夕飯はいかがなさいますか？」

コハルの声で我に返る。時計を見ると、確かに夕食の時間になろうとしていた。思っていたよりもずっと考えにふけていたらしい。

「今日のメニューは？」

僕はいつもと同じようなやりとりをしてオーダーを済ませる。

いつもと同じ。

僕はこれを守るために一人でいたいかもしれない。

きっとそれはレベッタにとって、なに一つ価値のないことなのだろう。

2

週末の昼間。僕はA区の喫茶店でヒィカを待っていた。迷わないよう迎えに行ってもやろうかと思っていたが、彼はこの国の移動に慣れたいと言って、僕の迎えを断った。

最初に注文した水に入っていた氷がすべて溶けたころ、ヒィカが店に入ってきた。彼は店内を見回したあと、僕を見つけてゆっくりと歩いてきた。

「すみません、おまたせしちゃって」

ヒィカは控えめな音を立ててイスに座った。すぐさま店員が湿ったタオルとドリンクメニューを持ってくる。

「ブレンド一つ」

ヒィカはタオルだけ受け取った。店員は黙ってドリンクメニューを懐にしまって去っていく。

「静かなところですね」

「この国でうるさいところはないよ」

「そうですか」ヒィカはしきりに辺りを伺う。「ここも、誰もいないんですね」

「うん。店員と僕らだけだね」

ヒィカは着いた安心からか、ふうと一息ついてコートを脱いだ。

「どう？ この国は」

「そうですね……」

コートを背もたれに掛けたあと、ヒィカは口を開いた。

「人混みもなくて過ごしやすいです」

「それはよかった」

僕はほんの少しだけ嬉しくなり、それと同じくらい小さく微笑んだ。

「レタさんはなにか頼まないんですか？」

ヒィカは僕の前に置いてある水を見ていた。

「これを頼んだ」僕は水を一口飲む。

「でもここ、カフェじゃないんですか？」

「そうだね」

「水だけでいいんですか？」

「ちゃんとお金は払ってるから」

「え？」

「美味しいんだ。ここの水」

僕の言葉にヒィカは呆然としていた。

「お水にお金を？」

「うん。そう言ったと思うけど」

「め、珍しいですね」

「そうかな」

彼が言いたいことは分かっていたが、あえて分からないフリをした。きっと、どこでも飲める水なんかにお金を出してもったいないと思っているのだろう。

「よく来るんですか？ このお店」

ヒカは話題を切り替えた。これ以上この話を広げても仕方ないと思ったのならば、懸命な判断だ。僕は彼の判断力に免じて、丁寧に答えてやる。

「たまに、かな。基本的には外に出ないから」

「そうですか」

「この国の人たちは、みんなそんな感じだよ」

「そうみたいですね」

「だからこうして、一緒のテーブルを挟んでお茶を飲む人も滅多にいない」

「それは、レタさんの話ですか？」 ヒカは首をかしげる。

「ううん。この国の人の話」

「なるほど」

つぶやくように言ったヒカの言葉を遮るように、店員がコーヒーをテーブルに置いた。

「ご注文は以上でよろしいですか？」

「はい。ありがとうございます」 ヒカは頭を下げた。

店員もヒカと同じくらいの深さでお辞儀をして、音もなく去っていった。

「いい香りだ」

ヒカは目の前のコーヒーを覗きながら言った。

それから僕たちは、どちらから話すわけでもなく、ぼーっと外の景色を眺めていた。マンションの隙間を縫って届いた日光が、すぐそこの歩道を照らしている。

「いい天気ですね」

ヒカは穏やかな声色で言った。

「そうだね」僕は短く答える。

「レタさんは、この国に来られてどれくらいなんですか？」

「生まれてからずっとだよ」

「え、そうなんですか？」

「うん」

「この国の人って、みんな外の人かと思ってました」

「じゃあ僕はみんなに含まれてないってことだ」

ヒカはどういうわけか、急に焦ったような素振りを見せた。

「あ、いや……。気を悪くされたのならすみません。そう噂で聞いていたもので」

「噂？」

「はい。この国に住んでる人のほとんどは、外国の人って……」

「そのことに関して言えば、その通りだよ」僕は水を飲んだ。「この国に生まれた人は、みんな外に出たがる」

「そのみんなに、レタさんは……」

「もちろん、含まれてない」

ヒカは照れくさそうに笑った。誘導のような問答だったが、思い通りに僕が答えたことが嬉しかったのだろう。僕はただ、自分が思っていることを言っただけだったが、それで喜んでもらえるのなら悪い気はしない。レベッタと話していたら、こうはならないだろう。

「そうですか」ヒカは口元を隠すようにコーヒーを飲む。「俺の周りにも、この国出身の人がたくさんいました」

「そっか」

「どうして、みんなこの国を出て行くんですか？」

「孤独が嫌いだから、かな？ 多分」

「孤独の国なの？」

「うん」

僕は手のひらを組んでテーブルの上に置いた。

「君のように、外から来る人は孤独を好んでやってくる。けれど、その人たちが産んだ子どもたちは、親の孤独に付き合わされることになる」

ヒカは一瞬、眉間に皺を寄せた。僕は気にせず続ける。

「子ども自体、この国にあんまりいないから、学校で友達を作ることも難しいし、偶然近場で遊んで、そこで友達になるってことも滅多にない」

「じゃあ、誰かに会いたくなって、この国を出て行くんですね」

「そういうこと」

「この国から来た人は、みんな寂しがり屋でした」

「そう」

ヒカは神妙な面持ちで僕の言葉を聞いていた。少しわざとらしいなと思ったところで、彼はなにかを思いついたような表情になる。

「レタさん」

僕は返事をせずにヒカと目を合わせた。

「この国で、なにか気をつけることってありますか？」

「気をつけること？」

「はい。例えば、文化の違いとか、法律的なこととか……」

僕は考える。いくつか思いついたが、そのなかでも一番大切なことをまず教えることにした。

「突然だけど、この国の死因ナンバーワンって知ってる？」

「え？」

「この国の人が死ぬ一番の原因」

「えっと……マンションが多いので、落下事故、とか」

「はずれ」

ヒカは顎に手を当てて考える素振りを見せる。最初の答えで落下死を出すあたり、適当に話を聞いているわけではなさそうだった。

しかし、いくら考えても答えはでなかったらしく、ヒカは首を振った。

「すみません、分かりません」

「そっか」

僕はうなづく。もったいぶっても仕方がないので、すぐに答えを言った。

「正解は、孤独死」

ヒカは目を見開いた。

「孤独、死」

「ちなみに、孤独が辛くて死ぬことじゃないよ」

「ええ、それは……。えっと、なにかあっても助けがこない、ってことですか？」

「そう。突発的な怪我とか、病気で倒れたときに、助けてくれる人が近くにいない」

「なるほど」

「だから、この国には暗黙のルールがある」

「暗黙のルール、ですか」

「そう。例えば、知り合いくらいの付き合いの人でも、音信不通になったり、急に姿を見なくなったときは、万が一のために電話で連絡をして、安否の確認をとるんだ。そして、その電話すらとられないときは、通報か、その人の家まで様子を見に行く」

「そこまではするんですか？」

「間に合わなかったらいけないからね」

「間に合わないことはあるんですか？」

「さぁ……。僕はまだ、そういう場面に出くわしたことはないかな」

「そうですか」

ヒカは口元を緩ませた。

「この国の人って、他人に無関心だと思っていたんですが、違うんですね」

僕はヒカの言葉の意図が分からなかったので、黙って次の言葉を待った。

「人の命を尊重していることは、とてもいいことです」

「そういうことなら……」僕は腕を組んだ。「他人の命を尊重してる、といえは聞こえはいいけど、実際はちょっと違うと思う」

「どういうことですか？」

「明日は我が身。自分が助かりたいから、やってるってだけのこと」

ヒカは俯いたあと、黙ってしまった。

この国の在り方を考えれば考えるほど、僕の考え方に合っていて感動を覚える。ヒカも同じだと勝手に思っていたが、この様子を見ると違ったようだ。

この国に住みたがる人間は、みんな同じような思想を持ってやってくる。しかしそれは、あくまで「同じような」で、「同じ」ではない。だから最終的に、この国の思想に微調整をする工程が必要になる。そして、それができなかった人間は、この国を去っていく。

ヒカはなにか考えているのか、俯いたままだった。そのあいだ、僕はなにもすることがなかったので外の景色を眺めていた。

「この店で流れているの、クラシックですね」

不意に、ヒカがつぶやいた。

「クラシック？」

ヒカに言われて、初めて店内に音楽が流れていることに気が付いた。わざわざ聞き

耳を立てなければ分からないくらい、小さな音量だった。

「サティですよ」

「へえ」僕は適当にうなづく。

「俺、この曲好きなんです」

「そう」

僕は興味がないことを包み隠さずに相槌を打つ。

「レタさんは聴かないんですか？ クラシック」

「うん。そもそも、音楽を聞かない」

「え？」

ヒカは声にならない声を上げた。

「ほ、本当ですか？」

「うん」

「一度も……？」

「厳密に言うと、こういう店で流れているのは聞くね」

ヒカは僕を見たまま、イスに背中をもたれた。

「あとは、そうだな、親が聞いているのを聞いたことはある」

「それは、聞こえた。が正しいかもしれませんね」

「確かに、その通りだ」僕は思わず笑ってしまう。

「えっと、それで、例えばレタさんの親御さんが聞いている曲が聞こえて、なにか思ったりしませんでした？」

「なにかって？」

「格好いいとか、綺麗とか」

僕はそのときのことを思い返してみる。

「思想を変えようとする、下品な歌詞が印象に残ってる」

「そう、ですか……」

ヒカは悔しそうにつぶやいた。

僕はヒカの様子をよそに、店員を呼んでもう一度水を頼んだ。二杯目の水が運ばれ、店員が去って行くと、ヒカは意を決したように僕の方を向いた。

「俺、実は音楽やってるんです」

「へえ、音楽」

「驚きました？」

「正直」

驚いたことを伝えただけのつもりだったが、ヒカは照れくさそうに笑った。どうやら僕が彼に一目置いたのだと勘違いしたらしい。

ふと僕は、いつの間にかヒカから目が離せなくなっていることに気が付く。彼が持つ表情のバリエーションは、今までに会った誰よりも豊富だった。見ていて飽きないと思うと同時に、表情でここまで細かく意思表示をできるのかと感心もしていた。言葉だけが、この世界における唯一のコミュニケーションツールだと思っていた僕にとって、この発見は一つの衝撃だった。

「もともと五番……えっと、芸術の国の出身だったんですが、いろいろあってこっちに

来たんです」

「そうなんだ」

「はい。あそこにいる人たちとは、馬が合いませんでした」ヒィカは表情を曇らせた。「本当に、ダメなところですよ、あそこは……」

その表情は、ヒィカにしては珍しい、憎しみを感ぜさせる表情だった。

「あ。すみません」

自分の表情に気付いたのか、ヒィカは慌てて笑顔を作った。しかし、その笑顔の裏でなにか別のことを考えているのが見て取れた。

「せっかくだから聞かせてよ。外の国の話」

外の国に興味はなかったが、ヒィカがなぜあの表情をしたのかが気になったので話を掘り下げることにした。

「えっと、そうですね……」

ヒィカは一瞬だけ困ったような表情をしたが、それは僕に促されたから仕方なく話すというアピールのための表情に見えた。もしかしたら、外の人間はこうやって表情でも会話ができるのかもしれない。

「レタさんは、芸術ってなんだと思います？」

「さあ」

僕は考えるフリをした。

「俺は、魂の具現化だと思うんです」

「なるほど」

今の相槌は適当すぎたかと思ったが、ヒィカは気にしていないのか話を続けた。

「だからこそ……魂から生まれるものだからこそ、それに嘘を吐くことはできないんです」

ヒィカの表情に憎しみの色が滲んでくる。

「今、あの国で活躍している奴らは、それを捨てて、評価されるものだけを作って成功しただけなんです。つまり、魂を捨てている」

「魂を？」

「そうなんです。俺は、あいつらが許せない」

温厚そうに見える彼から、驚くほどの憎しみが溢れ出ていた。

「それを支持している奴らも、金目当ての奴らばかりです」

「支持しているというのは、聞いてる人ってこと？」

「どちらかといえば、制作側……いやパトロンのほうが正確ですね。誰が作っても変わらない。同じようなものがあの国には溢れている。売れるからという理由でね」

「でも、お金という対価をもらっているのなら、それが本来あるべき形なんじゃないかな？」

「それは、おっしゃるとおりです。だけど、それが絶対的に正しいものになってしまったら、芸術はこの先どんどん廃れていきます」

ヒィカの表情が曇った。この話を始めたときの表情だ。

「芸術家も、パトロンも、受け手も、お金が集まるものが一番だと錯覚しているんです。いや、錯覚させられている。芸術家の魂を金に変えるために」

興味があったのもつかの間、彼は自分の後悔を誰かに共有することで解消しようとしていることに気付いた。新しい表情もない。僕は早々に話を切り上げることにした。そもそも芸術自体に興味はないし、それを金にしようがしまいが、どちらでもよかった。

「それで君は、この国に来たってことか」

「はい。そういうことになります」

ヒカは目をそらして俯いた。もともと居た国が自身のコンプレックスになることは、今の時代よくあることだ。話を切り上げたのは彼にとってもよかったかもしれない。

「あの、すみません。国の話というより、芸術の話でしたね」

ヒカは冷静になったのか、僕を一瞬見て頭を下げた。

「どの記事で読んだかは忘れたけれど」僕は一応の謝礼として、申し訳程度のフォローをすることにした。「国が掲げる思想が先鋭化して、本来の意味からかけ離れていくってことは珍しくないみたいだよ」

ヒカはゆっくりと頭を上げる。

「本来の意味、とは？」

「さっき、この国には子どもが少ないって話をしたけど、出生率が低いこともあって、過保護な親が多くなっているんだ。もちろん、無関心な親も一部いるけどね」

「なるほど。子どもには干渉する、というケースもあるんですね」

「そう。子どもは欲しいけど他人と干渉はしたくない。つまり、子どもを育てるチャンスがどうしても少なくなるから、自分の理想を押し付けてしまうらしい」

ヒカは悲しそうにため息をつく。

「親の孤独に付き合わされる、とさっきレタさんが仰いましたが、それ以外にも親の影響は大きいんでしょうね」

「子どもはとくに、会える人が限られているから」僕はうなずく。「特に身体的な願望に関しては、僕も色々苦労した」

「レタさんも、ですか？」ヒカは驚いた表情をする。

「うん。親の理想は内面的なことだけじゃないからね。容姿や所作だったり、まあ、色々よね」

「そうですか……。そんな問題があるんですね」

「でも、これはまだ理由が分かる方かな」

僕はヒカを見習って、呆れていると伝わるように首を振ってみる。

「最近、この国に引っ越してきたのに誰彼構わず会いたがる、干渉したがる人が増えているらしい」

「なるほど」ヒカは苦そうにコーヒーを飲んだ。

「最近、新聞やニュースでもそういったことを煽る記事が増えてきてる。`あなたは一生、孤独のままでいいですか？、なんて記事もたまに見るくらい」

「それじゃあ、なんのためにここへ来ているのか分かりませんね」

「嫌なら、ただ出て行けばいいだけなのに」

「確かに、そうですね」ヒカは僕の言葉を聞いて、自嘲するように笑った。「この国から出て行く人は、どの国に行くんでしょう」

「大体は二番か、三十五番かな」

「三十五番って、どこでしたっけ？」

「天動の国」

「あそこに行くんですか？ この国の人が？」

「うん。あそこは自己顕示欲の解消を掲げている。外からは馬鹿にされているみたいだけど、この国で鬱々と暮らしていた人にとっては、理想的な思想なんだと思う」

「想像できないですね……」

「そうかな」

「この国の人は、それでいいって思っている人が住んでいるものだと思っていました」

「それでいい？」

「自己顕示欲がない……いや、目立ちたくない人、ですかね」

「それは、外から来た人だけだと思う」

「確かに、それもそうですね」 ヒィカはうなずいた。

「そうだ。本来の意味とかけ離れているといえば、さっき言った二番の国でも、同じようなことが起きているらしい」

僕はすっかり得意になって話した。

「二番目は……」

「愛情の国」

「その国も？」

「愛を与え合うの意味が少しずつ変わって行って、今では貞操観念のない人ばかりが集まっているらしい」

ヒィカは顔をしかめて首を振った。

「結局、どこの国にも歪みはあるってことですね」

「思想は、一人につき一つじゃないから」

ヒィカは片手で目を覆ったあと、大きなため息をついた。

「本当に自分に合った国を見つけるのは、難しいんですね……」

僕はなにも答えずに窓の外を眺めた。この世に生を受けた場所が、自分に一番合う思想を掲げているというのは、実はすごく恵まれていることなのかもしれない。

「でも多分、俺はこの国が一番合うんじゃないかと思ってます」

窓の外に向けた僕の視線を戻すように、ヒィカは話しはじめた。

「俺が好きな芸術家は、みんなこの国に住んでるんですよ」

「そうなんだ」

「なにかを作る人は、孤独を愛する人が多いんです」

僕は適当に相槌を打つ。創作をする人が孤独を愛している、という話は聞いたことがなかった。もしかすると、彼は早々になんでも決めつける癖があるのかもしれない。

「だから俺も、ここで自由に音楽を作ろうと思っているんです」

さっきまで険しかったヒィカの表情は、いつの間にか穏やかになっていた。

「この国は、自分の時間を大切にしている人がたくさんいる」

「そうかな」

「そうですよ」

ヒィカの表情が晴れやかになる。まるで、自分が核心をついたことを言ったかのよう

な表情だった。あまりピンとこないのは、僕が彼の話を聞き流していたからだろうか。

「そういえば、レタさんはどうして、この国に住み続けているんですか？」

念のために今までの会話を思い返そうとしたとき、ヒィカが次の話を始めてしまった。僕は思考回路を元に戻すために、水を飲んで時間を稼いだ。

なぜこの国に住み続けているか。答えは決まっているが、どう言えばヒィカに理解してもらえるだろう。

「……自分を飾らなくていいからかな」

結局、言葉通りなにも飾らずに答えた。

「やっぱり、そうですね」

ヒィカは思っていたよりも満足そうに頷いた。

「レタさんと出会えてよかったです。本当に」

「それはなにより」

ヒィカは機嫌を良くしたのか、コーヒーをもう一杯頼んだ。店員がコーヒーを持って戻ってきたとき、彼は店員に話しかける。

「この曲、サティですよ」

「ええ」

「お好きなんですか？」

「私はあまり。オーナーがお好きなようで、よくかけています」

「オーナーは今どちらに？」

「今日は休みをいただいています」

「そうですか……。ありがとうございます」

ヒィカが会釈すると、店員は足早に去っていった。

僕はヒィカの発言に耳を疑っていた。彼の言動はついさっき僕が言った「この国に引越してきたのに他人に干渉したがる人間、そのものだった。やはり彼も、この国にいながら他人との関わりを欲しているのかもしれない。

ただ、それでも僕が席を立つほど不快に思わないのは、彼自身の思想を僕に押し付けようとしていないからだろう。なにかを試されているような緊張感も、自分の話が絶対的なものだと言わんばかりの威圧感もなかった。

ヒィカは一杯目と同じようにコーヒーの香りを楽しんでから、カップに口をつけた。

「いいコーヒーだ」

僕はしばらく、上機嫌でコーヒーを嗜むヒィカを眺めた。なにかを僕に伝えようとしているのかと思うくらい大げさな動きだったが、特に伝わってくるものはなかった。もしかすると、彼は本当にコーヒーを楽しんでいるだけなのかもしれない。

「あ。そういえば」ヒィカは我に返ったような表情になって、通信端末を取りだした。

「遅いな……」

誰かからの連絡を待っているのか、ヒィカは腕時計を確認した。

「待ち合わせでもしてるの？」

興味はなかったものの、話を振ってみる。

「妹です。面接が終わったら、ここで落ち合うことになっていたんですけど……」

「え、ここに来るの？」

「はい。レタさんのことを話したら、挨拶したいって聞かなくて」

ヒィカは申し訳なさそうに笑った。

「ちょっと通話してみてもいいですか？」

そう言うと、ヒィカは僕の下承を得ずに妹に連絡をし始めた。僕はその様子を見ながら、適当に帰るタイミングを探っていた。

妹からの反応がなかったのか、ヒィカは不服そうに端末をしまった。

「うーん。まだなにか話してるんですかね……」

「近くの店？」

「はい。この通り沿いにある雑貨店みたいです」

「ああ、あそこの」

「ご存知ですか？」

「一ヶ月に一度行くか行かないかだけど」

「そうなんです。じゃあ働けたら、そのうち会えるか」

僕は会話が一段落したと思い、一口だけ残っていた水を飲んだ。コップをテーブルの上に置いたとき、ヒィカは鼻から息を漏らすように笑った。

「もうそろそろ行きますか」

どうやら、僕が帰ろうとしているのを察したらしい。ヒィカはコーヒーを一口飲んで立ち上がった。

「今日はありがとうございました」

僕はうなずき、そのまま席を立つ。

「また機会があったら、お茶しましょうね」

「うん」

「すみません、お会計お願いします」

ヒィカは店員を呼びつけ、カードを差し出した。

「あ、僕も払うよ」

「いいですよ。このあいだ案内してもらったお礼です」

「そんなつもりで案内したわけじゃないよ」

「分かってます。これは、俺がそうしたいからそうしているだけです」

ヒィカがうなずいたのを合図に、店員はそのままレジに向かって行ってしまった。話してみてなんとなく察していたが、彼は一度決めたら人の話を聞かなくなるタイプのようだ。レベッタにも近しい性質があることを考えると、僕の周りにはそういう人が集まる傾向があるのかもしれない。

「美味しかったです。また来ます」

ヒィカはそう言い残して店から出て行った。僕はなにも言わずヒィカの後ろについていく。

「レタさん。これから雑貨屋に行ってみませんか？」

「今から？」

「はい」ヒィカは輝く目を僕に向けている。

「悪いけど、今日は帰らせてもらおうよ」

僕は迷わず答える。ヒィカは残念な気持ちを包み隠さず肩を落とした。

「そうですか……」

「それじゃあ。僕はこれで」

「あ、そしたら俺も帰ります！」

僕が帰ろうとすると、ヒイカは急ぎ足でついてきた。

そのまま僕たちはなにも話さずに街路を歩いた。厳密にいうと、ヒイカがなにかを話したがっている様子だったので、僕は黙ってそれを待っていた。

しばらくして、ヒイカは話しづらそうに口を開けた。

「俺、その……、本当のことを言うと、逃げてきたんです」

特に言うことがなかったので、次の言葉を待った。

「芸術の国で、俺の作った音楽、結構評判よかったです」

「へえ」僕は興味なさげに相槌を打った。ヒイカにもそれは伝わっているだろう。

「でも、パトロンがだんだん俺の作品の方向性や売り方に口を出してきて……。よりによって、俺がさっき言ったような、流行っているものに変えろって」

ヒイカがこの話でなにを伝えたいのか、僕には分からなかった。

「裏切られた気がしたんです」

「誰が、なにを？」

要領の得ない話に、少しだけ苛立つ。

「俺はシンプルに、自分がいいと思うものを作ってきました」ヒイカは僕の態度を無視して話を続ける。「パトロンも、そんな俺の作品を気に入っているとばかり思っていました」

ヒイカは首を振った。

「要求を飲めなかった俺に、あいつは言ったんです。お前は、自分のためにしか作品を作れない能なしだってね」

全く簡潔ではないが、僕の質問に答えてくれていたらしい。つまり、彼の作品を気に入って金銭的な支援をしてくれていたと思っていたパトロンが、実は自分の作品を使ってお金儲けをしようとしていたという話らしい。芸術のことはよく分からないが、そういった欲を綺麗に装飾してアウトプットするものだという事は僕でも知っていた。だからこそ、ヒイカのようなタイプの芸術家は活動しづらいのかもしれない。

「衝撃的でした。自分の魂を形にしている芸術家は、この国では必要とされていなかったんだと」

ヒイカの目は、この国の人間と同じように光が灯っていなかった。しかし、その奥にはなにかキラついた、黒い炎のようなものが見えた気がした。

「それで失望したんです。あの国の芸術にね」

吐き捨てるように言ったあと、ヒイカは何度か瞬きをする。コマ撮りの映像のように、瞬きをする度にヒイカの目に光が戻っていった。

「すみません。こんな話をしちゃって」

「べつに」僕は首を振る。

「そうですか、よかった」

ヒイカはほっと胸をなでおろす。僕は真面目に聞いていなかったからと付け足したかったのだが、良いように解釈されて会話が終わってしまった。

わざわざ訂正をするほどでもなかったのに黙って前を向く。すぐ先にC区の看板が見

えた。あまり会話に集中していなかったとはいえ、それなりに時間が経っていたらしい。

「今日はありがとうございました」

分かれ道の前でヒィカは深々と頭を下げる。

「こちらこそ」

「それじゃあ、失礼します」

「うん」

僕は適当に手を振って帰路につく。後ろから足音が聞こえてこなかったのも、もしかするとヒィカは僕の姿が見えなくなるまで見送っているのかもしれない。そういえば、レベッタもたまに同じようなことをする。

そんなことを考えながら道を曲がる。そこで僕は、レベッタが言っていた寂しさについて、ヒィカに意見を聞こうとしていたことを思い出した。

僕は今さっき通った曲がり角に戻り、分かれ道を確認する。

しかし、そこにはもう誰もいなかった。

3

それから一週間後、僕はA区にある雑貨屋に足を運んでいた。

生活をしていれば、必ず不足するものが出てくる。コハルに頼めば大抵のものは手配してくれるのだが、月一回という頻度と、僕が散歩をしたくなる頻度が奇跡的に合致しているのもあって、買い出しだけはいつも自分で済ませていた。

買い物カゴに石鹸や歯ブラシ、洗剤などを放り込んでいく。最近は食生活が偏っているので、サプリメントもいくつかカゴに入れた。

「いらっしゃいませ」

商品でいっぱいになったカゴをレジカウンターに置いたとき、店のバックヤードから見覚えのない従業員が出てきた。そういえば、店に入ったときに聞こえた声も、いつもの従業員とは違う声だった。

彼女は商品の値段を一つひとつ丁寧に読み上げながら、カウンターの空きスペースに商品を並べていった。いつもは年配のオーナーらしき人がカゴから袋に商品を適当に入れ、いつの間にか計算していた値段を伝えてくるのだが、今日はその芸当は見られないらしい。

「以上でよろしいですか？」

僕はいつもと違う対応に困惑しながらも同意する。すぐに彼女が商品の合計金額を読み上げた。

「お支払いはどうされますか？」

「カードで」

特にきっかけになる出来事があったわけではないが、彼女にカードを渡したとき、ふとヒカの話思い出す。そういえば、彼の妹がこの店の面接を受けていると話をしていった。

「お返しします」

僕は彼女からカードを受け取る。もしかすると、この女性がヒカの妹かもしれない。そう思うと、確かに外の人間特有の雰囲気をもっている。

「袋詰めいたしますので、少々お待ちください」

彼女は幼い見た目よりも落ち着いた声で僕に笑いかける。少しだけぎこちなく、けれど丁寧に僕の買った商品を袋に詰めていった。

「手伝おうか」

手持ち無沙汰だったので、普段はしない提案を持ちかけてみる。

「ありがとうございます」

彼女はにこやかに微笑むと、カウンターの下から大きな紙袋を一枚取りだした。僕はそれを受け取って、一緒に商品を袋に詰めていく。

「まとめ買いですか？」

彼女は当たり前のように話しかけてきた。このタイミングで話しかけてくる人間はあまり見たことがない。僕は改めて、彼女が外国の人間だと確信した。

「うん。これで一ヶ月はもたせる予定」

とはいえ、ヒカカの妹という確証はどこにもない。いきなり間違っただけを聞いても今後が気まずくなるだけなので、少しだけ会話をつなげて探ることにした。

「確かに、ひと月しっかりもちそうですね」彼女はくすくすと笑った。

「君、新しい人？」

「はい。先々週に越してきたばかりで……」

先々週。ヒカカが引っ越してきた時期と一致していた。他の国と比べて、この国は人の流入が盛んではなない。この情報で、彼女がヒカカの妹だという可能性が一気に高まった。

「こちら袋を分けますか？」

「ううん。一緒に大丈夫」

「かしこまりました」

彼女は再び微笑んで袋詰めを再開した。

「もしかしたら、なんだけど」

「はい」彼女は手を止めて僕の方を見た。

「先々週、引っ越してきたばかりの人の道案内をしたんだ」僕は彼女の真っ直ぐな視線に驚き、思わず目をそらしてしまった。「その人が、確か妹と一緒に引っ越してきたって言って、ここの雑貨屋で働くかもって言ってたんだけど……」

「もしかして、レタさんですか？」

彼女は僕が思っていたよりも早く答えにたどり着いた。

「うん。やっぱり君は、ヒカカの妹？」

「そうです！ わぁ、ここで会えるとは思ってませんでした」

「面接、受かったんだ」

彼女は目を輝かせてうなずいた。

「ここの方すごく良い人で、すぐに働いていいって言ってくれて……」

「そう。それはなにより」

僕は袋詰めを再開する。

「あ。すみません、申し遅れました。私、ミィといいます」

ミィは改まってお辞儀をした。僕は聞こえたよという意思表示のために軽くうなずく。

「兄がお世話になりました」

「大したことはしてないよ」

「でも、喜んでました。この国で最初の知り合いができたって」

「そっか」

くすぐったそうにミィは笑う。ヒカカ以上に人懐っこい性格に見えるが、僕の経験上、この手の人間は長くこの国にはいられない。

「このお店にはよく来られるんですか？」

「たまに。月に一回くらいかな」

「なるほど。だからまとめ買いなんですね」

「そういうこと」

ミィは機嫌よく袋詰めを続けていた。ヒィカと同様、言葉がなくともなにを思っているのが分かる。僕には到底できそうにない、高度な意思表示の仕方だった。

「お兄さんは元気？」

先週会ったばかりだったが、ミィの表情のバリエーションを見たくなくて、適当な話題を振ってみる。

「ええ。やっと自由にもものづくりができると張り切っています」

「そっか」

ミィは自慢気にうなずいたあと、視線を落とした。

「ただ、張り切りすぎているのか、最近あんまり眠っていないみたいで」

「眠ってない？」

思ってもみなかった方向に話が進んだため、思わず尋ねてしまった。

「その、元々不眠症なんですけど、こっちに来てからちょっと薬の量が増えてるんです」

「なるほど。慣れない生活でストレスがたまってるのかな」

僕にしては珍しく、おそらく一般論であろうことを述べてみる。

「かもしれないね」

ミィは儂げに笑った。抑えきれない心配が表情に出ている。

「心配なら、早めに病院につれていくといい。カウンセリング系なら、B区らへんがいいと思う」

「そうなんですね。ありがとうございます」ミィは頭を下げる。「レタさんもそういうところに行かれるんですか？」

「ううん。幼なじみがよく行ってるから、多分いいのかなって」

「幼なじみさんがいらっしゃるんですね」ミィの表情に明るさが戻った。「レタさんは、この国で育ったんですよね」

僕はうなずきながら最後の商品を袋に入れる。ミィはいつの間にか自分の仕事を終えていた。

「この国で幼なじみって珍しいんじゃないですか？」

「確かに、言われてみればそうだね」

ミィはなぜかこりと笑って僕に紙袋を差し出した。

「手伝っていただきありがとうございます」

「ううん。そっちのほうが早いからね」

紙袋を受け取ると、途端にミィは寂しそうな表情をした。

「でも、レタさんと次会えるのは来月なんですね」

「そういうことになるね」

「もしお店に来て私がいいたら、声かけてくださいね」

なぜそんなことをしなくてはならないのか分からなかったが、彼女からの要望は不思議と飲むことができそうだった。レベッタ、そしてヒィカとも違うなにかを感じる。

「忘れなければね」

できなかったときの言い訳を添えて、僕は二つの紙袋を両腕に抱えた。

「お気をつけてお帰りください」

ミィはそう言いながら店の入口まで小走りで向かい、ドアを開けてくれた。

「ありがとう」

「はい。またのご来店、お待ちしております」

ミィはお辞儀をしたあと、屈託のない笑顔を向けてきた。それに負けて、僕も微笑み返してしまう。

「ありがとうございました！」

店の外へ出た僕にもう一度お辞儀をして、ミィは店内に戻っていった。僕は紙袋を抱えなおして、自宅に向かう道を歩きはじめる。

生まれたときから変わらない、誰も居ない街路を歩いて行く。

ヒカとミィについて考えようとしたとき、ふと、近頃はよく人に会っているなど思った。去年は、実家に一度帰ったときに両親と、レベッタですら三度ほどしか会っていない。もちろん、新しい人と話すことも一切なかった。

孤独の国らしからぬ人との遭遇率だが、不思議と悪い気はしなかった。たまにはこんな時期があってもいいだろう。

もしもこれがずっと続くのであれば考えものだが、幸いにして、レベッタもヒカもそう何度も会おうとはしてこない。僕に気を使っているのか、そういう性分なのかは分からないが、どちらにせよ過ごしやすいくことに変わりはない。

何度も腕をすり抜けそうになる紙袋を抱え直して歩いていると、遠くから見覚えのある人影が見えた。向こうもそれに気付いたのか、軽く手を振っている。やはり、ここ最近には人に会いやすい時期なのかもしれない。

「おはよう。レベッタ」

「もうこんにちは、だけど」

レベッタはくすくすと笑った。

「散歩？」僕は尋ねる。

「そんなところ」

僕はもう一度紙袋を抱え直す。レベッタは相変わらず、露出度の高い服を着ていた。

「レタは買い出し？」

「そんなところ」僕はレベッタと同じように答える。

「今さ、時間ある？」

そう言いながら、レベッタは僕が抱えていた紙袋に手を伸ばした。

「これ、重くない？」

「こっちのほうが軽いよ」

僕はもう片方の紙袋をレベッタに渡した。

「冷蔵庫に入れるものとかある？」

「特にないけど」

「じゃあ、今から公園いかない？」

紙袋を預けた時点でレベッタに付き合うという意思表示をしていたつもりだったが、上手く伝わっていなかったらしい。

「うん。いいよ」

「よかった」レベッタはにこりと笑った。「ここらだったら……ひだまり公園かな？」

「近くでいいなら、次の十字路を曲がったところにもあるけど」

レベッタは少し考えたあと、首を振った。

「うん。ひだまり公園に行こ」

どんなこだわりでそこを選ぶのかは分からないが、僕自身どこでもよかったので同意する。

「最近はどう？」

レベッタは紙袋を抱え直したあと、ゆっくりと歩きだした。

「レベッタと会ったかな」

「なにそれ」

「最近あった出来事の話」

「そ」

返事こそ素っ気ないものの、レベッタの口元は笑っていた。今日は機嫌が良いらしい。

「あ。この店さ、品揃え偏ってない？」

「知ってるの？」僕は紙袋を両手で持ち直す。

「うん。元職場の通勤路……まあ、ちょっと回り道だけど、たまに行ってた」

「僕の知り合いが働いてる」

レベッタは目を見開いた。

「レタ、知り合い居るの？」

「僕のこと、なんだと思ってるの？」

「孤独家」

「コドクカ？ なにそれ」

レベッタは声を出して笑った。とても失礼なことを言われた気がしたが、レベッタが楽しそうにしているので、怒るタイミングを逸してしまった。

「ひだまり公園にモニュメントができたの知ってる？」

レベッタは話が終わったと思ったのか、次の話題を切りだした。

「知らないけど」僕は適当に答える。

「私もさっき寄って見つけたんだけど、びっくりした」

「なにに？」

「大きかった」

「モニュメントが？」

「うん。ただでさえマンションで影だらけなのに」

「物があれば影はできるよ」

レベッタは少しの間を開けて、ため息をついた。

「私は明るいのが好きなの」

「そっか」

このやりとりがいつもの意味のない会話だと気づき、僕は専用の思考回路に切り替えた。

「レタの家にいる……えっと、ハルちゃんだっけ？」

「コハル」

「そうそう。こないだ、レタの話聞いて、うちにあるアンドロイドと話してみたの」
このあいだの僕の話がなにを指しているのかは分からなかったが、黙って話を聞くことにした。

「そしたらさ、思ったより意思疎通できるんだね」

「意思疎通って？」

「人と話す感じで話してみたら、人みたいに返事が返ってくる」

僕にとってそれは当たり前のことだったが、レベッタにとっては新鮮だったらしい。

「それで私、色々話してみたんだ」

「なにを話したの？」

「色々」レベッタは淑やかに笑った。「もっと早く使ってればよかったなって思った」

「家事とかはどうしてたの？」

「アンドロイド側の音声だけオフにした。うちの親もそれでなにも言わなかったし」

「そう」

返事をしながら、目の前に見えてきたひだまり公園の看板を見た。ふと、どうしてレベッタは雑貨屋からの帰り道にいたのだろう。と思った。僕が通る道は、おそらく彼女の生活圏から離れているはずだった。

「あ、見えるよ。モニュメント」

レベッタは公園を指さした。確かに形容しがたい形の物体が公園の真ん中に置かれている。

「あれは、なんのモニュメントなの？」僕は思ったことをそのまま口にする。

「さぁ」レベッタは首をかしげる。「タイトルは孤独って書いてあった」

「孤独……」

少しずつ詳細が明らかになるモニュメントを注視する。頭からつま先まで見えても、孤独は感じられなかった。

「なにか思うことある？」レベッタは興味がなさそうに尋ねてきた。

「これを作った人はきっと、孤独を知らない」

レベッタは僕の評論を聞いて、何度かうなずいた。

「確かに、そうかもね」

そんなことを言いながら、僕たちはひだまり公園の中に足を踏み入れた。公園の隅にあるベンチに二人組の男女が座っている。

「珍しい。人がいる」

レベッタが心の声を代弁してくれたので、その次に言おうとしていたことを口にする。

「どっか座る？」

「じゃあ、あそこで」

レベッタはモニュメントを指さした。

「座るところあるの？」

「土台のところ」

「座るところじゃないと思うけど」

僕の忠告を無視してレベッタは歩きだした。しぶしぶ僕もついていく。

「あぁ、重かった」

レベッタは身長の数倍以上あるモニュメントの土台に紙袋を置いた。

「そっちはサプリメント系だから重くないと思うけど」

僕もレベッタが下ろした隣に紙袋を置いた。

「また偏食？」

「僕はそんなつもりないけど」

「コハルちゃんに言われたの？」

「そんなところ」

レベッタは小さく「まったく……」と言って土台の上に座った。紙袋と同じようにレベッタの隣に腰を下ろす。土台は僕の部屋にあるイスと同じくらいの高さだった。

改めてひだまり公園を見回してみる。名前に違わず、公園中に日の光が降り注いでいた。立ち並ぶマンションによる日照率の減少と、それに伴った緑地の減少が公害になりつつあるらしいが、だからこそ生まれる、自然光を保存するようなデザインの場所が僕は好きだった。太陽の光が当たり前になってしまったら、スポットライトのように切り取られているこの光景は見られなかっただろう。

「ここ、明るくて結構いい場所だったんだけどなぁ」レベッタはため息をついた。

「モニュメントで、影ができてるね」

「ううん。そういう意味じゃない」

レベッタは首を振った。それと同時に、彼女の短い髪が乱れる。周りに建物があるせいで、こういった緑地には風がよく吹き込む。

「レタ、あのさ」

風が強く吹いて、レベッタの声がよく聞こえなかった。

「なに？」

「私ね」

レベッタは僕目をじっと見た。

「愛情の国へ行くことにした」

レベッタの声は、風の間隙を縫うようにしっかりと僕の耳に届いた。彼女の言ったことが聞こえたはずなのに、理解ができなかった。

「驚かないんだね」

レベッタは呆れたように笑った。

「多分……」僕の声は震えていた。「分かっていたのかもしれない」

「なにを？」

「その、こうなることが」

僕の答えを聞いて、レベッタは俯いた。

「望んでいた、じゃないの？」

「いや、それは違うと思う」

「そ」

レベッタはちらりと僕を見た。

「なんというか」僕は思わず目をそらしてしまう。「寂しいって、思った」

「本当？」

僕はうなづく。

「それなら、ちょっとだけ嬉しいかも」

「嬉しい？ どうして？」

レベッタは微笑んでいた。

「だって、少しでも私がレタに干渉できたってことでしょう？」

レベッタの答えは、答えになっていなかった。どうして、寂しいと思われたら嬉しいのだろう。それとも、触れられたくない事情があって、話をそらしているのだろうか。

「愛情の国に行けば」レベッタは遠くを見ていた。「私は孤独じゃなくなる」

「愛情があれば、孤独にはならない？」

「もちろん」

レベッタはそっと、僕の太ももに手を置いた。

「レタ。最後のお願いなんだけど」レベッタの手が固く結ばれる。「私のこと、抱いてくれない？」

僕はどう答えればいいのか分からず、黙ってしまった。

「なにか言ってよ」

レベッタは笑う。恥ずかしそうな、それでいてどこか冷たい、不思議な表情だった。

僕は何度も思考を逡巡させて、最後に大きくため息をついた。

「抱きしめるくらいなら」

「それじゃあ駄目」

レベッタは煙草に火をつけ、深呼吸のように吸って、吐いた。

「煙草、美味しい？」

「全然」

「そう」

風向きのせいで、煙草の煙が僕の方へ流れてくる。僕は妙に居心地が悪くなって、遠くを見ようとさっきまで人がいたベンチを見た。そこにいた男女二人は、もうどこかへ行ってしまったらしい。

「レベッタは、どうして僕が好きなの？」

「気付いてたんだ」

「なにが？」

「私がレタを好きだってこと」

レベッタは煙草を指で弾いて器用に灰を落とした。そのおかげかは分からないが、ほんの少しだけ、煙が遠くなる。

「気付いてたよ」

「じゃあ、なんできっぱり断ってくれなかったの？」

「レベッタがいつまでも言わないから」

「言わなくても分かるでしょ？」

「でも僕は、言葉以外に気持ちを伝える手段を知らない」

レベッタの細い手が、僕の手の上に覆いかぶさる。

「私は、言葉以外であなたに伝えていた」

「僕は、言葉しか扱えないよ」

「そうね」

レベッタは触れていた手を離して、前に向き直った。

「レタはさ、どうして私を愛してくれないの？」

その声は今まで聞いたどの声よりも、無機質なものだった。

なぜだろう。

僕もそれが知りたくなった。

レベッタのことは苦手ではない。価値観も、孤独のことを除けば、誰よりも近いはずだ。同じ国で、同じ学校で、同じように育ってきた。きっと僕のことを誰よりも知っているし、見てきたはずだ。

それなのになぜ、僕とレベッタはお互いに歩み寄れないのだろうか。僕は、そうまでしてこの生活を守る必要があるのだろうか。その価値は、本当になによりも代えがたいものなのだろうか。

なぜレベッタはこんな僕を好きになったのだろうか。彼女の望みを叶えてあげられない人間を、どうして。

選択肢がなかったからだろうか。もしそうなら、レベッタは他の世界を知らないだけで、僕よりも彼女を幸せにできる人がいるのかもしれない。そもそも、レベッタにとっての幸せとは、なんだろう。

僕の幸せは、一人でいること。

レベッタの幸せは、僕といること？ それとも……。

この先、お互いがお互いの幸せを叶えられないことが分かっているから、レベッタのことを受け入れてやれないのかもしれない。唯一違う、幸せの価値観のせいで、僕たちは結局離れ離れになるような、そんな気がした。

今考えたことをレベッタに伝えようと言葉を探す。僕が気持ちを伝えられる、唯一の道具。

しかし、今まで見聞きした言葉たちを総動員しても、答えられる気がしなかった。自分の気持ちに嘘をつくことも、かと言ってレベッタをいたずらに傷つけることもできない。

たくさんの言葉が喉から出かけて、それをたくさん飲み込んだ。それを何回と繰り返して、不意に喉を震わせた言葉は、

「レベッタのことが、好きだから」

だった。

僕の言葉を聞いたレベッタは、頭を垂れて、何度もうなずいた。

「ずるい……」

レベッタの言っていることは尤もだった。けれど、僕はレベッタが好きだからこそ、僕に歩み寄ることでレベッタが変わってしまうのが嫌だったのだ。

たくさんの矛盾を抱えたこの答えが、世の中にある言葉のなかで、一番僕の気持ちに近いものだった。

「でも、分かった。ありがとう」

レベッタは顔を上げた。涙でぐしゃぐしゃになった顔を見て、胸が痛くなる。

「私、レタのこと忘れないから」

「うん。僕も忘れないよ」

レベッタは短くなった煙草を捨てた。

「レタはこの先もずっと、この国で生きていくの？」

「そのつもり」

「じゃあいつか、会いたくなったらこの国に来ればいい？」

「うん」

「そっか」

レベッタはにこりと笑った。頬に涙が伝う。

それきり、レベッタはなにも言わなくなった。いつものように、僕も話すことなく黙って周りの景色を眺めた。

見渡すかぎり人はおらず、この公園を囲むマンションにも、人の気配はなかった。本当に、このマンションの数だけ人が住んでいるのだろうか。

その人たちはみんな、孤独なのだろうか。

「この国の人は、本当に生きてるのかな？」

僕は独り言のようにつぶやいてみる。

「どういうこと？」

「前にレベッタが言ってた、この国の人は死んでいるって話を思い出した」

「そんなこと、話したっけ？」

「この国には刺激がないって」

「ああ、言ったかも」レベッタは涙を拭った。

「確かにこの国での生活は、刺激がないかもしれない。誰かに会うわけでもなく、誰かに見られるわけでもなく、ただ一人で生きて、死んでいく」

「どうしたの？ レタがそんな話をするなんて」

「あれから、少し考えたんだ」

「どれから？」

「このあいだの、僕の誕生日のとき」

「そう」

手慣れた手つきで、レベッタは煙草に火をつけた。

「聞かせて」

煙草の煙がこの国の灰色にほどけていく。

「僕は、孤独でいることが好きなんじゃなくて、自分の性質を変えることが怖いんだと思う。だから、自分が誰にも歩み寄らなくていい状態が、たまたま孤独だったのかもしれない」

レベッタは煙をゆっくり吐いた。

「分かんない」

「うん。多分、そうだと思う」僕はうなずいた。

「でも、レタの言葉が嘘じゃないのは分かる。レタの頭の中では、レタの価値観では全部が合致してて、納得がいてるんでしょう？」

「そうだね」

「じゃあ、それでいいんだと思う」レベッタは微笑んだ。「もう少しだけ、早く気付いてればよかったかもね」

レベッタは息を漏らすように笑った。

「人は影響し合って生きている。私はずっとそう思ってる」

きっとこれは僕が話したように、レベッタ自身の考えなのだろう。僕は真剣に彼女の言葉に耳を傾ける。

「他人との干渉からは、逃げるできないの。食べ物だって、住む場所だって、アンドロイドだって、人が作っているんだから」

レベッタの表情は穏やかなものだった。

「孤独を望んだって、それは嘘。望んだフリをしているだけ。結局、どこかで人の姿を探してるの」

「僕も、そうなのかな」

「レタは特別。だから不思議だって思うの」

「特別……」

「本当に、最近まで疑ってなかったんだから。口ではこの生活が好きって言ってるけど、実は寂しいんだって」

レベッタは笑いながら、寂しそうな目をしていて。それは、ヒィカの笑顔にそっくりだった。

「でもね、レタの誕生日の日に確信した。ああ、この人は孤独が似合ってるなって」

「それは、褒められてる？」

レベッタは鼻で笑った。

「本音と皮肉が半分半分」

「そっか」僕は彼女の正直さに思わず笑ってしまった。「レベッタらしい」

「それは褒められてる？」

「僕は全部本音、かな」

「そう」

僕の笑顔に釣られたのか、レベッタは嬉しそうに笑った。

「レタはこの国のこと、どう思ってる？」

「どうって……」

僕は浮かび上がった答えを、伝わりやすいような言葉で口にする。

「僕にとっては、理想郷だよ」

僕の答えにレベッタは吹きだした。

「変かな？」

「ううん」レベッタは首を振る。

「じゃあ、どうして笑ったの？」

「私が思っていたよりも、ずっと気に入っているんだなって思って」

「それが当たり前だと思ってた」

「うん、そうだね」

レベッタは空に向かって煙を吐いた。

「でもね、他の人はそう答えないと思うな」

「そうかな」

「うん。だって寂しいもん。この国で生まれた私がそうなんだから、人とのふれあいを知っている人は、もっと寂しいはず」

「じゃあ、どうしてこの国にやってくるの？」

「それは、人に会わなくてもいいから」

「矛盾してるよ」

「そう。ここは矛盾している人が住む国なの」

レベッタはにこりと笑った。その笑顔には「レタ以外はね」という意味を込めているように思えた。

この国へやってきた人は、みんな孤独を望んでいるのではないのだろうか。僕のように他人との過剰な関わりが煩わしいと思う人間が偶然、他の国で生まれてしまって、本来自分が持っている思想を思い出したときに、この国へやってくるのだとばかり思っていた。

「どんなに頑張ったって、人は、一人にはなれない」

レベッタは手元から落ちていく煙草の灰をじっと見つめていた。

「だから、この国の思想がそもそも矛盾している」

「そうなのかな」

「レタ以外は、ね」

レベッタはまたにこりと笑う。さっきの笑顔の答え合わせだ、と関係のないことを考えた。

「さっき、レタが言ってたことだけど」

「さっきって？」

「この国の人たちは生きてるのかって」

「ああ……」

「私は、この国の人間は生きてると思う」

僕はレベッタの言葉を待った。

「だけどそのまま、死んでいる」

「どういうこと？」

「生きてるけど、死んでいる。生霊っていうのかな、使い方あってる？」

「……多分、本来の意味とは違う」

「そっか。残念」

レベッタは嬉しそうに微笑んだ。

「でもね、それに気付いたとき、私はこう思ったんだ」

先ほど吹いたような風が、再び僕たちの間を通り抜ける。

「この国は、生霊の棲むゴーストランドだ。って」

レベッタは吹きすさぶ風にのせるように、煙草の煙を吐いた。

僕にはあまりピンとこない答えだったが、彼女にとってはこの国を的確に表す言葉なのだろう。

「僕も、ゴーストの一人？」

レベッタの表現を尊重しながら、質問を投げかける。

「どうだろう。でも、やっぱりレタは特別って思いたい」

「そっか」

「強いて言うなら、未練のないゴースト」

「未練がなかったらゴーストにはならないと思うけど」

「確かに、それもそうだね」

レベッタが笑ったので、僕も釣られて笑う。このあいだの誕生日のときのような、少し浮ついたような気持ちになっていた。

「そういえば、レベッタはいつ愛情の国に行くつもり？」

何気なく話題を切り替えたつもりだった。しかし、レベッタはゆるやかに表情を変え、真剣な眼差しを僕に向けた。

「今日出て行く」

「え？」

僕は、耳を疑った。

「このあと、この国を出るつもり」

「え、だって……。そんな、急じゃないか。親には言ったの？」

「うん。三ヶ月くらい前に」

平然と答えるレベッタに、僕は言葉を詰まらせてしまった。

「レタには内緒にしたの」

「どうして？」

「言って、レタの態度が変わるのが嫌だったから」

「そんな……」

目眩がした。僕はレベッタに悟られないよう、ゆっくりと目を覆う。

「私の考えが変わるのも嫌だったし」

「親は、なんて？」

「別に……。あんたの好きにすればって」

「そっか」

ゆるる視界をこらえながら、なんとかそれだけ絞りだした。

「いてもいなくても一緒みたい。私」

足元にレベッタが捨てたであろう短い煙草が転がってきた。

「一番心配してたのは、今日レタと会って気持ちが揺らぐことだったけど、大丈夫そう」

「そっか」

僕は機械のように、もう一度同じ台詞を言った。

レベッタがいなくなることを知って、どこかの感情が一つ死んでしまったような感覚になった。

もっとなにか言いたいのに、言いたい言葉が見つからない。ただ、もうレベッタは僕の言葉なんか求めていない。僕自身のために、なにかを言わなければならないと思った。

「さっきさ、レタの家に行ったの」

僕の気持ちをよそに、レベッタは別の話をはじめた。

「そのときにコハルちゃんに会ったんだけど、なんかこないだと態度が違った」

「態度？」

考えていたことを一旦端に追いやって、僕は尋ねる。頭を上げると、目眩はもう収まっていた。

「なんというか、恭しい？ 他人行儀な感じじゃなかった」

「ああ……」僕はその理由を思い出す。「それは多分、僕がレベッタのことを登録したから」

「登録？」

「コハルがレベッタのことを警戒していたみたいだから、悪い人じゃないよって」

「ふうん」

レベッタは口を尖らせた。

「それだけ？」

「え？」

「私を登録するとき、どんな風に登録したの？」

コハルにレベッタのことを伝えたときを思い出す。まず年齢や性別、住所などを聞かれ、最後に僕との間柄を尋ねられた。

「ご家族のレベッタ様ですね。って言われた」

僕はどうしようもなく恥ずかしくなり、俯いた。

「私のこと、そう思ってくれてたんだ」

「だって、小さいときから一緒にいたし……」

僕の声は、隠し切れないほどに震えていた。

「でも、そんな深い意味はないんだ。なんとなく、思ってたことを言っただけで」

レベッタは意地悪そうな声で笑った。

「ばかみたい」

僕は言い返そうと頭を上げる。

「だって——」

その瞬間、レベッタは僕に口づけをした。

突然のことに頭が真っ白になる。レベッタを突き放すことも、かといって抱きしめることもできなかった。

しばらく僕たちはモニュメントの一部のように、そのままの体勢で固まった。

やがて、レベッタの唇がそっと離れる。口紅を塗っていたのか、離れる瞬間にほんの少しだけ唇が引っ張られた。

「これは、レタが知らない言葉」

「ことば？」

僕は唇に手を当てた。

「どんな言語よりも、気持ちが伝わる言葉だよ」

「今のが？」

「うん」

そう言うと、レベッタは勢いよく立ち上がった。

「よし、それじゃあ私、もう行くね」

僕はただ、レベッタをじっと見つめた。

「私、レタの家族でいられて嬉しい」

返事に窮している僕を見たあと、レベッタはまた顔を近づけてきた。

「ちなみに、私はお姉さん？ それとも妹？」

僕は少し考えて、口を開いた。

「どっちが上かは分からないけれど、双子のつもり」

「そっか」

レベッタは満足そうに微笑んだあと、僕に背中を向けた。

「ねえ、レタのアパートって郵便受け付けてるよね？」

「うん。だったはず」

レベッタは両手を空に向けて背伸びをした。伸びを終えて、両手を勢いよく下ろしながら、僕の方へ振り向く。

「それじゃあ今度、手紙書くね」

「手紙って手書きの？ メッセージじゃ駄目なの？」

「うん。端末も変えるだろうし、それにメッセージじゃすぐ終わっちゃうから」

「そうかな」

「そうだよ」レベッタは深くうなづく。「自分の送信メッセージを見れば分かると思うけど」

ここ数日で自分が送ったメッセージが頭をよぎる。

「……分かった。そしたら、手紙と一緒に住所も書いてよ。返事書くから」

「本当かなあ」

そう言いながら、レベッタは歩きはじめた。

彼女にかけるべき言葉が見つからない。さっきのように、土壇場でなにかが出てくる気もしなかった。遅れてきた感情の波に飲まれて、頭が回らない。

このままレベッタは、僕の知らない国へ行ってしまう。ただ、僕に引き止めることはできない。きっとそれは、今更レベッタも望んでいないことだろう。

レベッタは軽やかな足取りで公園の出口まで歩き、振り返った。

「レタぁ！ 今までありがとね！」

辺りに響くほどの大声でレベッタは言った。僕が見つけれなかった言葉を、彼女はいつもたやすく言っただけのけた。

僕はとても悔しくなって、レベッタに負けないうらい大きな声で叫んだ。

「僕のほうこそ、ありがとう！」

「またね！」

「また会おう！」

子どものように笑いながら、レベッタは公園を去っていった。

レベッタの姿が消えてしまったあとも、僕はしばらくそこを動けなかった。

4

レベッタがこの国を去ってから数週間後、昼過ぎの郵便で一通の手紙が届いた。送り主はもちろんレベッタで、消印には愛情の国の番号が記されていた。

僕はすぐに封筒を開けて便箋をテーブルに広げた。三枚にも及ぶ手紙には、人がとにかくたくさんいること、新しい居住地と仕事が見つかったこと、そして、同居の相手が見つかったことが書かれていた。

彼女は早々に寂しさから開放されたいらしい。僕は彼女が初めて書いたであろう歪な文字を指でなぞる。こうやって、手紙だけで続いていく関係も悪くないかもしれない。

封筒の中には手紙の他に数枚、紙に印刷された画像データも同封されていた。初めて見るが、おそらくこれは写真というものなのだろう。この国にも印刷してくれる場所があるらしいが、実際に使ったことはなかった。

一枚目はレベッタが住んでいる部屋の写真。なかなか古そうな部屋だったが、ちゃんと掃除が行き届いており、住み心地は悪くなさそうだった。

二枚目は外の景色。愛情の国の一角なのだろうか、人々が思い思いに体を寄せあって歩いているのが印象的だった。

三枚目はカプセルの写真。これは恐らく食事代わりのカプセル錠だろう。外国の人間はほとんど料理を食べないとなにかの本で読んだことがある。料理ができるアンドロイドはいるが、人々の往来が多いため、安全に食料調達ができないというのが主な理由だった気がする。自分で料理がしたいという物好きな人間以外は、必要な栄養素を効率よく摂れるカプセル錠を摂取していることがほとんどらしい。

写真の後ろには「ゴハン食べてないのにほんとにお腹空かない！ フシギだ！」と、レベッタの字で書きなぐられていた。

手紙と写真も見終わり、ぼんやりと返事を考えはじめる。しかしすぐに、便箋と封筒を用意していなかったことに気が付く。

僕はすぐに思い立ち、A区の雑貨屋へ行くことにした。

「コハル」

「いかがなさいましたか」

「ちょっと出かけてくる」

「本日は夕方から雨との予報です。お気をつけて行ってらっしゃいませ」

「ありがとう。でも、すぐに戻るよ」

僕は適当にコートを羽織り、少しでも雨に降られる確率を下げるため、足早に雑貨屋へ向かった。

雑貨屋のドアを開けて早々、店の奥からミィの明るい声が聞こえた。僕はなにも言わず、入ってすぐのところにある文房具コーナーを物色した。

便箋も封筒も、思っていたよりたくさん種類がある。どれがいいものかと迷っていると、すぐ後ろからミィの声が聞こえてきた。

「レタさんだ！ こんにちは！」

「こんにちは」

僕は振り返ることなく挨拶を返した。

「なにかお探しですか？」

「便箋と封筒を探しているんだけど、種類が多くて悩んでる」

「なるほど……。もしかして、幼なじみさんですか？」

僕は思わず振り向く。

「正解。というか、幼なじみのこと話したっけ？」

「はい。先月お店に来たときに」

「そっか……」

そうなると、ミィが知る僕の人間関係はヒィカとレベッタだけなので、消去法で幼なじみに行きつくのは当たり前かもしれない。ただ、もし僕にたくさん友人がいると伝えたとしても、彼女は言い当ててくるような気がした。

「その幼なじみさんって、女性ですか？」

「そうだね」

「レタさんはよくお手紙とか書くんですか？」

「いや、初めてかな」

「何区に住んでいらっしゃるんですか？」

「もういないんだ。このあいだ、外国へ行ってしまった」

「そうなんですわね……」

ミィはレベッタと別れた日の僕よりもはるかに悲しそうな表情でつぶやいた。彼女の勘のよさに感心をしているあいだに色々聞かれたが、あまり不快感はなかった。そういえば、初めてこの店で会ったときも同じような印象を抱いた気がする。

「外国に送るなら、封筒は丈夫なやつがいいですね。でも女性なら、これとかどうです？」

ミィが差しだしてきたのは、可愛いキャラクターがあしらわれたメルヘンチックな封筒と便箋のセットだった。

「これはちょっと……」

苦笑いが自然とこみ上げる。僕もレベッタも、文房具に限らず絵の入ったデザインは好きではない。これは自分で決めなくてはと思い直し、急いで質素なデザインのものを選んだ。

「かわいいほうがいいですよ」

僕の選んだ封筒と便箋を見て、ミィは不満気につぶやいた。

「いや、これくらいが彼女にもいいと思う」

「うーん、そうですか……。かしこまりました」

ミィは意気消沈して僕から封筒と便箋を受け取った。しかしすぐに表情を戻して顔を上げる。

「あ。お手紙を書くのが初めてなら、ペンもないんじゃないですか？」

「確かに、そうだね」

そういえば、手書きで文字を書くのは数年ぶりだった。レベッタの手紙を読みながら、読みづらい文字がいくつかあると思ったが、あまり人のことは言えないかもしれない。

僕は近くの棚から適当にペンをとり、ミィに渡した。

「以上でよろしいですか？」

僕は首を縦に振って返事をする。ミィはなぜか上機嫌でレジまで行き、商品の値段を計算する。商品数は少ないものの、このあいだよりも明らかに練度があがっていた。

「お支払いはカードですか？」

「うん」

ミィは僕からカードを受け取って機械に読み込ませる。その数秒の時間を使って手際よく袋詰めを終わらせた。

「仕事にはもう慣れた？」

僕は彼女の適応能力に感心をして、つい話しかけてしまった。

「はい。細かい作業が結構好きなので、楽しいです」

ミィはにこにこしながら僕にカードを返した。

「あの、レタさん」

「なに？」僕はカードをしまいながら答える。

「レタさん、このあとお手紙書くんですよね？」

「そうだけど」

ミィの方を見ると、彼女は僕が買った商品の袋を胸に抱いていた。

「お手紙書くの、初めてなんですよね？」

「そうだね」

「なにを書くか、もう決まってるんですか？」

「まだ決めてないけど、どうして？」

僕は手をだして商品を渡してくれというジェスチャーをした。

しかし、ミィは袋を抱いたまま僕のことを見つめていた。

「私、思うんです」ミィはにっこりと笑った。「初めてレタさんがお手紙を書くのなら、レタさんのお手紙を受け取る人も、初めてのことじゃないですか」

「そうなるね」ミィの芝居がかったセリフにほんの少し不快感を覚える。こういうとき、大抵の人間は身振り手振りで自分の通したい主張をごまかしていることが多い。

「初めてなんだから、特別なものにしてくださいませんか？」

特別、という言葉に既視感を覚える。レベッタが僕に言った言葉だ。

「特別……。でも、通常を知らないから、なにが特別か分からない」

「そこで私です」

ミィは鼻を鳴らした。意味が分からず黙っていると、ミィはくすくすと笑い始めた。

「私、お手紙たくさん書いたことがあるんです。レタさんの伝えたいこととか、メッセージをこう、ばっちりプロデュースできますよ」

言葉の使いどころは少し間違っているが、なんとなく彼女の言いたいことが分かった。初めて書く拙いであろう僕の手紙の質を上げる手伝いをしたい、ということらしい。

「レタさんから貰う初めての手紙が、とっても凝ったものだったら、幼なじみさんも喜

ぶと思うんです」

そう言われると、確かにミィの言うとおりかもしれない。おそらくレベッタは僕から届く手紙に大した期待はしていないだろうし、いいサプライズになる気もした。

「どうプロデュースしてくれるの？」

ミィは今まで見たなかで一番まぶしい笑顔になった。

「いいんですか？」

「無理のない範囲でね」

「そしたら、私このあとすぐ上がるんです！」ミィは持っていた袋を僕の両手に握らせた。「近くにカフェ、分かりますか？ あそこに集合しましょう！ 引き継ぎが終わったらすぐに行くので、絶対に待っていてください！」

「だけどこのあと……」

「そうと決まれば、私もペンとか買っていこうかな」

このあと雨が降る予報だと伝えたかったが、もうミィに僕の声は届いていないようだった。

引き継ぎを早く終わらせたいとミィに言われ、半ば強制的に店の外に追い出される。普段の僕であれば、こんな扱いをされれば黙って帰るのだが、あいにく今回はレベッタに手紙を書かなければならない。僕は改めてミィに言われたことを思い返しながらか、近くの喫茶店に向かった。

無理やりな部分はあるものの、ミィの意見には妙な説得力がある。語り口も理由の一つかもしれないが、重要どころでしっかりと筋が通っているように思える。僕が思っているよりもずっと、彼女はロジカルな人間なのかもしれない。

そう考えると、僕の周りには感情と言動が紐付いている人間が集まっている気がする。レベッタとヒィカ、二人にどこか似通った部分を感じるの、このせいなのかもしれない。逆に、ミィは二人とはまた違う感性の持ち主のように思えた。

このことについてもっと考えてみたい気もしたが、待ち合わせ場所の喫茶店がすぐそばに迫っていたので一旦考えるのをやめた。

喫茶店のドアを開けて、空席しかない店内に足を踏み入れた。いつもの窓際の席に座り、いつもと同じ注文をする。

最近少しだけ風味が変わった水を飲みながら、テーブルに下書き用の便箋を広げた。

ミィが来るまでにある程度考えておきたいと思ったが、最初の挨拶を書き終えたところで筆が止まってしまった。メッセージと同じ要領で書けるのではと高をくくっていたが、どうやらまったく違う脳みそを使うらしい。

とはいえ、ここで手を止めては、プロデューサーも困ってしまうだろう。僕はレベッタの手紙を取りだして、改めて読んでみる。

レベッタは主に新生活に対する期待と不安、この国と愛情の国の違いについて書き記していた。写真も内容に合ったもので、手紙の内容がより明確にイメージできるような構成になっている。さすが、元々ライターの仕事をしていただけのことはある。

彼女の真似事ではあるが、写真を送るのはいいアイデアかもしれない。どんな写真を送ればレベッタは喜ぶだろう。

まず思い浮かんだのは、僕たちが最後に会ったあの公園だった。しかし、いきなりそ

れを送るのはなんだか不躰なようにも思えた。

次に浮かんだ場所は学校だった。あそこにはレベッタも思い出があるだろうし、きっといつでもこの国のことを思い出せるだろう。

そこでふと、レベッタはこの国で過ごした時間を思い出したいのだろうか、という考えが頭をよぎる。彼女はこの国が嫌になったから出て行ったのだ。それなのに、この国のことを思い出させる写真を送るのは正しくないような気がした。

結局、どんな写真を送るべきなのかも分からなくなってしまった。

「お手紙書けました？」

頭を上げると、にこやかな表情をしたミィが僕の手元を覗きこんでいた。

「考え中」

自分の体たらくっぷりに恥ずかしくなり、挨拶まで書き終えた手紙を折ってテーブルの端に寄せた。

「幼なじみさんは、どこの国に行かれたんですか？」

ミィは小さなカバンをイスの背もたれに掛け、慎重な動作で腰掛ける。

「愛情の国」

「へえ、愛情の国」ミィは驚いた様子だった。「この国で育っていたら、とっても勇気がある場所ですね」

「そうかな？」

「急に关わる人が増えるわけじゃないですか。慣れないことだらけですよ、きっと」

それはどこに行っても同じように思えたが、今のミィの話を聞いて、少しだけ手紙に書くことが見えてきた気がする。

ミィは便箋と見つめ合う僕をよそに、注文を済ませた。

「レタさんは、その方に報告したいこととかないんですか？」

「報告？」

「例えば、幼なじみさんがいなくなってから起こったこととか、始めたこととか……」

「うーん、とくにはないかな」

「なるほど」ミィはうなずく。「幼なじみさんとは結構会ってたりしたんですか？」

「そうだね。ここ最近では一番会ってた人かな」

「それじゃあ、今更話すこともないって感じでしょうか」

「確かに、その通りかもしれない」

ついさっき見えかけた糸口がまた消えた。もし引越し先での苦勞があったとしても、レベッタであれば卒なくこなすだろう。僕が心配するまでもなさそうだった。

「見せていただかなくてもいいんですけど……」そう言って、ミィは僕の手元に置いてあった手紙を見た。「送られてきたお手紙は、どんな内容でした？」

僕は改めてレベッタの手紙を見る。

「えっと、この国と愛情の国の違いだとか、新生活のこととか……」

「なんだ。そこまで書いてあるなら簡単じゃないですか」

ミィは安心した様子で笑った。

「その違いに驚いてあげたり、新しい生活を応援してあげればいいですよ」

「応援か、なるほど」

「あとは、写真を送り返してあげるといいかもしれませんね」

「そのことなんだけど」僕はレベッタから送られてきた写真を手に取る。「彼女はこの国が嫌になって出ていったんだ。だから、この国の写真は喜ばないと思う」

「え、違いますよ」

「なにが？」

「風景じゃなくて、レタさんの写真を送ってあげるんです」

「え、僕の写真？」驚きで声が上ずってしまった。「そんな写真送って、どうするの？」

「どうするって……。写真で見れば、レタさんとの思い出もよみがえるし、辛いときとかも励みになると思いますよ」

「そうかな……」

「そうですよ！」ミィは笑った。「私もよく、他の国に行った子に『こっちは元気でやってるよ、って意味で、私の写真を送ってあげたりしますよ』

「へえ」

僕は思わず感心してしまった。その様子を見て、ミィはくつくつと笑いだす。

「レタさんて、面白い人ですね」

「それは、褒められてるの？」

「もちろんですよ！」

ミィは驚いた顔で言った。ヒィカ以上に、表情の引き出しが多そうだった。

「でも、僕の写真っていっても、どんなのを送ればいいんだろう」

「普通の写真が一番です」

「普通って？」

ミィは両手で作った長方形ごしに僕を見る。

「今のレタさんのままってことです」

「ふうん……」

理由は分からなかったが、ここは素直に従っておいたほうがいい気がした。やはりミィが言うことには、妙な説得力がある。

「手紙の内容、決まりそうですか？」

「うん。君の言った通りに一度書いてみるよ」

「そうですか」

ミィはにこりと笑った。

僕たちは話題が一区切りついたことを察して、お互いに飲み物を口にする。限りなく近いタイミングでコップを置くと、すぐにミィが口を開いた。

「幼なじみさんとは、いつからのお付き合いなんですか？」

「学生のころからだから、十年以上になるかな」

「すごいですね」ミィは目を見開いた。

「そうかな」

「私にも学生のころからの友達はいますけど、そこまで長くは続いていないです」

「これから続くようになるよ」

「そのころには、お二人はもっと長く続いていますね」

予想外の切り返しに思わず笑みが溢れる。ミィは鏡のように微笑み返してきた。

「お二人が小さいときって、どんな風に遊んでたんですか？」

「子どものころってこと？」

「この国で子どもを見たことがなくて、ちょっと気になってたんです」

どうしてそんな質問をしてきたのだろう。という疑問が顔に出ていたのかもしれない。ミィはすぐに理由を付け足した。

「そうだね……」

僕は幼少時代を思い出す。あのころも今とそんなに変わらない生活をしていたように思う。パソコンで宿題をこなし、家事の手伝いをして、アンドロイドと会話をする。

「二人で遊んだりっていうのは、あんまりなかったかな。そういえば」

「え、そうなんですか？」

「本当に小さいころは学校終わりに公園で遊んだりもしたけど……。でも、高学年向けの授業が始まってからは、いつも彼女に勉強を教えたから、あんまり遊ぶ時間はなかった」

「なるほど。学校で一緒だったんですね」ミィは納得したようにうなずいた。「登校されてたんですか？」

「親の教育方針でね。結果的に、幼なじみが一人できた」

「親御さんに感謝ですね」ミィはにこりと笑った。

「まあ、確かにそうだね」

ミィと話していると、自分でも気付いていなかった価値や感情に気付かされる。彼女は自分の意見を述べているように見せかけて、相手が見えていないものを代弁する能力があるのかもしれない。それくらい、彼女の意見にはすんなりと同意することができた。

僕の感心をよそに、ミィはゆっくりとため息をつく。

「そしたら、学校のない日はお一人でいたんですか？」

「大抵はそうだね。あとは、アンドロイドと話していた」

「アンドロイドと？」

「うん。学習型のアンドロイドで、いろいろと言葉を教えたり、教えてもらったりして遊んでた」

言ってみて、今の自分の生活と大して変わらないことに気が付いた。子どものころから、変化のない生活が当たり前になっていたのかもしれない。

「幼なじみさんとお話は？」

ミィは悲しそうな表情になる。きっと彼女の目には、寂しい幼少時代を過ごした人間が映っているに違いない。

「しなかったかな。でも、この国では普通のことだよ」

「そうですか……」ミィは悲しそうな表情のままカップに口をつける。「寂しい、とはならなかったんですか？」

「うん。寂しくはなかったかな」

「そうですか」

ミィは僕の答えに嘘がないことを察したのか、直前までの表情を少しだけ残しながら笑った。

「ミィは、話すのが上手だね」

僕は思ったことをそのまま口にした。ミィと話していると、ヒィカ以上の発見がある。「そうですか？」ミィは照れたような表情をした。「話すのが好きだから、それのおかげかもしれませんね」

「僕も話すのは好きだけど」

「それは伝わってきます」ミィは笑った。「でもきっと、レタさんのしたい話は、人によっては難しく感じるのかもしれませんがね」

「どういうこと？」

「こう、なんというか、着地点のない話とか、共感だけして欲しい話とか、そういうのは、レタさんあまり好きじゃなさそうだなって」

「まァ……確かにそういう話は嫌いかな」

ミィはなぜか嬉しそうに微笑んだ。

「でも多分、レタさんの周りにはいる人がしたいのは、そういう話ばかりですよ」

「なるほど」

僕は彼女が言っていることの意味が分からなかったが、適当に相槌を打った。

「レタさんは……」

ふと、ミィの後ろから通信端末の通知音が聞こえた。

「あ、ごめんなさい」彼女は急いで自分のカバンから通信端末を取りだした。「あ、もしもし……」

断片的に聞こえる会話から察するに、通話の相手はヒィカだろう。仕事から帰ってこない妹を心配して、通話をかけてきたようだ。

「お店で偶然レタさんと会っちゃって、今、お茶してる」

ミィはにやりと笑って僕を見たあと、すぐに驚いたような表情になった。

「え、今から？」

もう一度ミィと目が合う。なんとなく、ヒィカがここに来そうな予感がしたので、僕はゆっくりと首を振った。

「あ、でも、レタさんこれから用事あるから、解散するところだったんだけど」

明らかな嘘であったが、どうやらヒィカは信じたようだった。ミィは肩をなでおろして通信端末をしまった。

「お兄さん？」

「はい。レタさんといると言ったら、来たいって言い始めて……」

「そっか。あまり心配させるのはよくないね」

僕はテーブルに広げていた便箋をまとめる。

「そうですね。そろそろいきましょうか」

ミィは僕の様子を見て察したのか、ゆっくりと立ち上がった。そのまま彼女が会計をしようとしていることに気付き、僕は慌てて店員にカードを渡す。

「そんな、悪いですよ」

「このあいだヒィカに出してもらったし」僕は店員から返されたカードをしまった。「あとは、手紙の授業料かな」

そう考えると少し安い気もしたが、ミィは納得したのか自慢気な表情になった。

「分かりました。そういうことでしたら、ごちそうになります」

喫茶店を出ると、辺りは薄暗くなっていた。夕方というのものもあるが、おそらくもうすぐ雨が降るのだろう。空は灰色になっていた。

「レタさんのお家、D区でしたっけ？」

「うん」

「じゃあ、私も途中まで一緒でもいいですか？」

「いいけど、雨が降りそうだから急ぎたい」

「確かにそうですね」ミィは空を見上げた。「ちょっと早足で帰りましょう」

僕らはそのまま、特に話すこともなくお互いの家の分かれ道まで歩いた。ミィは立ち並ぶマンションを見上げたり、時折僕の様子を伺っていた。僕は僕で、レベッタの手紙の内容を考える時間に充てていた。

「それじゃあレタさん、私はこっちなので」

ミィは少しだけ名残惜しそうに僕の隣を離れた。

「お気をつけて」

「レタさんも」

僕は適当に手を振って、その場をあとにした。

手紙の内容は、まだ決まっていない。次第に暗くなっていく灰色の空を見ながら、レベッタが喜ぶことを考える。

そしてすぐに、僕は人を喜ばせたことがほとんどないことに気付く。慣れないことをしているから、きっと上手くいかないのだ。

レベッタとの記憶を思い返してみると、彼女はいつも不機嫌そうで、僕の言葉にはあまり良い反応を示さない。僕の一挙手一投足が間違いだと言わんばかりの表情をする。

今思うと、とてもひどい記憶だと笑みが溢れる。ただ、それが彼女らしいとも思えるし、なにより、そんな彼女の表情が好きだった。

視界の隅に大きなモニュメントが入り、思わず足を止める。まっすぐ家に帰っているつもりだったが、どこかで道を間違えたらしい。

いつの間にか僕は、ひだまり公園の入り口に立っていた。

ここは、レベッタと会った最後の場所。そういえばあの日も、雑貨屋から帰る途中でここに立ち寄ったのだった。

僕はしばらく「孤独」と題されたモニュメントを見つめる。あのときと印象は変わらず、作品から孤独は感じ取れなかった。

レベッタはここから愛情の国へ行った。その道の先に、なにが待っているのだろう。どんな人に会って、どんな場所に行って、どんな人生を歩んでいくのだろう。

もちろん、僕には分からないし、知る資格すらないのかもしれない。

僕はこの先もこの国で、このままの僕で暮らしていくのだろう。それは静かであることを選んだ成果でもあり、同時に対価でもある。

レベッタは、自分が払った対価に後悔はないのだろうか。

いや、後悔をしてでもこの国から抜け出したかったに違いない。誰もいない静かな生活よりも、たくさんの人と関わっていく生活のほうが、彼女が本来持っていた思想に近いものだったのだろう。

数年後、変わっているであろうレベッタを見て、僕はどう思うのだろうか。そして、全

く変わっていない僕を見たレベッタは……。

水滴が頬を伝った。すぐにぼらぼらと雨が降ってくる。泣いているみたいで嫌だなど
思いながら、僕は頬の水滴を拭った。

第三番 ゆっくりと厳肅に Lent etgrave

1

「あなたはいつまで、孤独でいるつもりですか？」

僕は通信端末に表示された広告文を読み上げた。目を覚まそうと声に出したが、予想通りあまり効果はなかった。あくびを一つして、ゆっくりと上半身を起こす。外は薄暗くはあったが、ひと目で朝が来たことが分かる明るさだった。

今さっき声に出した広告文が頭の中に残っている。孤独の国で孤独であることを煽って、一体なにがしたいのだろう。きっと旅行会社かどこかの広告なのだろうが、ターゲットを間違えていると言わざるを得ない。

「コハル」

「おはようございます。リタ様」

「おはよう」

天井に吊るしていたライトが灯り、ほんの少しだけ明るくなる。僕はベッドから降り、テーブルに端末を置きながら立て付けの悪いイスに腰掛けた。

「お食事はどうされますか？」

僕はテーブルに置いた端末を見る。画面には『ベーグル』『シリアル』『スコーン』と書かれていた。

「トーストはないの？」

「ただいま切らしております。C区のパン屋は営業時間ではないので……」

「分かった分かった」僕はコハルの言葉を遮る。「そしたら、ベーグルにしようかな」

「かしこまりました。具材はたまごとレタスとハムになります」

「うん。それでいいよ」

「かしこまりました。お飲み物はどうされますか」

「じゃあ、コーヒーで」

「かしこまりました」

通信端末の画面が『準備中』になったことを確認したあと、待ち時間のうちに洗濯を済ませることにした。

天気は晴れ。風も少しあるので、周辺の建物の影になりがちなこのアパートでも、すぐに洗濯物が乾きそうだった。

ベランダにある洗濯機に衣服を押し込み、洗剤を入れ、フタを閉めてスイッチを押す。洗濯機は仕事があることを喜ぶかのように駆動しはじめた。

水が流れる音と機械音が辺りに響くなか、僕はアパート裏の公園を見渡した。

初めてヒィカと会ったときのことを思い出す。あれからもう半年ほど経っていると考えると、少しだけ感慨深い気持ちになる。あのとき、ほんの気まぐれで彼のことを助けたが、結果的によかったと今は思っていた。

ヒカとはあれ以来、二ヶ月に一回ほどのペースで会っている。

定期的に会おうと思ったきっかけは、レベッタの話からだった。ヒカも僕と同じように、国の思想に耐えられず去ってしまった友人がいたらしい。彼は頼んでもいないのに、自分自身の経験を元に僕のことを励ましてきた。ただ、ヒカの励ましを聞いていると、不思議と心が落ち着いていた。

その他の話は基本的に創作にまつわることで、興味もなくほとんど聞き流しているが、彼の人格や雰囲気も相まって居心地はよかった。

どちらかといえば僕は、ミィのほうが苦手だった。話していて退屈しないのは彼女のほうなのだが、彼女には僕の考えていることが見透かされているような気がする。それくらいであれば、話す必要もなくなり楽だと感じるのだが、彼女はその能力を使っている間にか僕の価値観を変えてしまうような、そんな不安を覚えていた。

とはいえ、二人ともこの国での生活に慣れたのか、極端に干渉してくるなど、不快感を覚えるような言動は少なくなっていた。

レベッタとの関係も、もちろん続いている。月に一度届く手紙に返事を書き、翌月になるとその返事が返ってくる。すぐに書くことがなくなると思っていたが、意外にも最初の手紙ほど書くことに困ったことはなかった。

半年前、僕が初めて送った手紙を彼女はえらく気に入ってくれたらしく、涙が出るほど喜んだと返事を書いてあった。

「リタ様。お食事をお持ちしました」

部屋の中からコハルの声が聞こえた。僕は部屋に戻って玄関のドアを開ける。

「ベーグルとホットコーヒーになります」

「ありがとう」

「シロップもお付けしましたが、よろしかったですか？」

「ああ、そっか。言い忘れてた」

僕はいつもより慎重にトレイを受け取った。

「ドア、お閉めしましょうか？」

「気が利くね。お願い」

コハルは一礼したあと、ゆっくりとドアを閉めてくれた。僕はコーヒーとシロップをこぼさないようトレイをテーブルに置いて、イスに座る。

ベーグルを頬張りつつ、通信端末から僕宛ての郵便が届いていないかを調べた。最近はこちらで、朝にレベッタからの手紙が来ていないか確認をするのが日課になっていた。

このあいだレベッタに送った手紙には、ヒカのことを書いた。僕に知り合いがいるだけで驚く彼女のことだ。定期的に会う人ができたと聞いたらもっと驚くだろう。

それに僕の記憶が正しければ、レベッタは学生時代、登校してくるときにはいつもイヤホンで音楽を聞いていた。もしかするとヒカのことも知っているかもしれないと思い、聞き流していたヒカの経歴を断片的ながらも思い出して書いた。

端末の画面に、僕宛ての郵便が一通あるという通知が出た。今朝この国に届いたばかりのようで、届くのは明日になりそうだった。

レベッタがどんな返事をくれるのか、今から楽しみで仕方がなかった。アパートに届いたらすぐにでも持ってきてもらうようコハルに頼もうとしたとき、外から大きな物音

が聞こえた。

嫌な予感がしてすぐに部屋をでる。外廊下には誰もいない。ただ、なにかが落ちたような音だったので、念のため階段の方まで見に行ってみる。

「……コハル！」

階段の下には、コハルが部品をばらまいて倒れていた。

僕は階段を駆け下りる。コハルは口元を一生懸命に動かしながら、なにかを訴えていた。

「足を滑らせたの？ こっちから話せない？」

僕は持っていた通信端末をコハルの視界に入れる。本体からは無理でも、端末のスピーカーからなら話せるかもしれない。

しかし、コハルの声は聞こえてこなかった。

僕は急いで大家が住んでいる部屋をノックする。まだ早朝だからか、なかなか出てこない。もう一度だけノックをしようとしたとき、ドアがゆっくりと開いた。

「なんですか？」

不快そうな表情をした初老の大家が顔を出した。

「あの、コハルが……」

「コハル？」

「あ、えっと、あのアンドロイドです」

「ああ……」

大家はドアから顔を出して、僕が指さした先を見た。

「さっきの音はこれかい」

「直してあげないと……。どこの会社で作られたんですか？」

「さあ、もう二十年前に買ったものだから」

そう言うと、大家はドアを閉めはじめた。

「ちょっと」

僕は慌ててドアを抑える。

「なに？」大家は舌打ちをした。

「だって、直さないんですか？」

「いいんだよ。もう古いし、捨てて新しいの買うから。一日ぐらい我慢して頂戴」

大家は早口で言い切って、僕の手をはねのけるように勢いよくドアを閉めた。これみよがしに鍵を閉められる。一日ぐらい我慢しろ、と言われたのは、僕がアンドロイドがなくて不便だと言っているように思われたからだろうか。

もつれそうになる足を引きずりながら、コハルの元へ戻る。足元で寝そべっているコハルは、すでに動かなくなっていた。

「コハル」

分かっていたが、コハルからの返事はなかった。

コハルの隣に座り、頭をなでてやる。コハルは、僕がここへ引っ越してきてからできた初めての知り合いだった。当時からすでに古い型だったが、頑張って僕の言葉や傾向を学習してくれて、今では誰よりも簡潔にコミュニケーションが取れるようになっていた。

悔しいけれど、僕にコハルを直すことはできない。所有者の許可なく持ち出したとしても、製造会社は修理してくれないだろう。

突然訪れた別れにどうしていいか分からないまま、僕はそっとコハルの上体を起こした。とても重く、仮に修理してくれる場所を見つけたとしても、僕一人では連れていくことはできなさそうだった。

それでも僕は、精一杯の力でコハルを近くの壁にもたれ掛けさせた。床に散らばったままでは、あまりにも可哀想過ぎる。ほんの少しでも、コハルの尊厳を守ってやりたかった。

僕は改めてコハルの前に座って、ゆっくりと頭を下げる。

「ありがとう。コハル」

通信端末から一瞬だけ、ノイズ音が発せられた。僕にはそれが、コハルからの別れの挨拶に聞こえてならなかった。

2

コハルが故障した翌日の朝、仕事を始めようとパソコンを開くと、不意にインターホンが鳴った。この時間のインターホンはおそらく郵便物だろうと思い、慌てて玄関のドアを開ける。

するとそこには、見たことのないアンドロイドが立っていた。

「はじめまして。郵便物が届いております」

アンドロイドは俊敏に頭を下げたあと、手紙を差しだしてきた。

「えっと、ありがとう」

僕の怪訝そうな表情を見たからか、アンドロイドは声のトーンを少しあげて話しはじめた。

「本日よりこのアパートに配属となりました。よろしくお願ひ致します」

「え？」

「今日からここで働くことになりました。よろしくお願ひします」

アンドロイドは今言った言葉を少し簡単にして、ゆっくりと話した。

「いや、そういうことじゃなくて」

「と、言いますと？」

「今日からここで働くの？」

「はい」

「コハルは？」

「もうすぐ冬ですから、小春はすぐそこまで来ているかもしれませんね」

「違う違う。昨日までここで働いていたアンドロイドのことだよ」

「登録しました。以前のアンドロイドは欠損のため廃棄処分となりました」

僕は言葉を失った。思っていたよりもずっと早く、コハルは処分されてしまったらしい。

「登録をしたいのですが、お時間は大丈夫でしょうか」

コハルとの思い出が頭をよぎる。昨日はこんなことなかったのに、急に胸が締め付けられるように痛くなった。

「体調が優れませんか？」

僕は首を振る。

「それでは、お名前を教えてください」

僕は呆然としながらもアンドロイドからの質問に答える。気持ちが落ち着くころには、質問はすべて終わっていた。

「レタ様」

コハルと違って、このアンドロイドは一回で僕の名前を正確に覚えた。

「最後に端末を同期させますので、バーコードのご提示をお願いします」

僕は通信端末の裏にあるバーコードを見せた。

「ありがとうございます。端末の登録が完了しました」

目の前にいるアンドロイドの声が、通信端末から聞こえた。

「レタ様。改めまして、よろしくをお願いします」

アンドロイドはゆっくりと頭を下げる。

「君の名前は？」

「登録名はありません」

「じゃあ、型番は？」

「jupiter-af 5 8 7 c hです」

「じゃあ、ジプタは？」

「申し訳ございません。ジプタという名称の特定ができませんでした。お手数ですが、他の言葉での表現をお願い致します」

「違う違う。君の名前」

「登録しました」

「それ、言わないようにできないかな」

「かしこまりました」

「よろしく、ジプタ」

「よろしくお願い致します」

ジプタは改めて、深々と頭を下げる。

「郵便物、ありがとうね」

「もったいないお言葉です」

「それも、やめられないかな」

「かしこまりました」

僕は郵便物の送り主を確認して、ドアノブに手を掛けた。

「もう大丈夫だよ。朝ごはんは自分で済ませたから。またお昼に連絡して」

「かしこまりました」

ジプタは軽々とした足取りで外廊下を歩き、階段を降りていった。あの様子を見るに、昨今のアンドロイドはついに階段を克服したらしい。ジプタが去っていく姿を見送って、玄関のドアを閉めた。今度、暇があればジプタにコハルのことを教えてやろう。

このままだと気持ちが落ち込みそうだったので、僕はレベッタから届いた手紙を読むことした。中には手紙が二枚入っていたので、それをテーブルに広げながらイスに座る。

練習をしたのか、文字は前よりも綺麗になっていた。文章も変わらず読みやすく、彼女の身の回りで起きたことが明るく、そして多少愚痴っぽく書かれていた。同居していた人が部屋を出て行ってしまったという報告からはじまり、一人暮らしになることを国に申請し直さなければならないことと、同居人への罵詈雑言が綴られていた。どうやら愛情の国では、愛し合っている人を支援する制度の一環として、同居をしている人間は、していない人間よりもいろいろと優遇されるらしい。愛情の国らしい決まりごとだが、レベッタの様子を見ていると、愛情が先立って支援を受けている人はあまり多くはなさそうだった。

次の手紙には、ヒィカのことが書かれていた。どうやらレベッタは、ヒィカのことを知っているらしい。一時期、好んで彼の楽曲を聞いていたこともあったらしく、レベッタが国を出て行く少し前に知り合ったという僕の報告に対して、どうしてもっと早く紹介してくれなかったのかと、かなり強めの筆圧で書かれていた。

最後はいつものように、僕の健康を願う文章で締められていた。

手紙をパソコンの横に置きながら、時刻を確認する。いつもはもう少ししてから仕事を始めるのだが、手紙を書くほどの時間の余裕はなさそうだったので、返事の内容を考えながら仕事をすることにした。

会社へ勤務開始の申請をしようとしたとき、一件の未読メッセージがあることに気が付く。どうせ広告だろうと思ったが、送り主はヒィカだった。メッセージの返信ならば、微妙に空いた時間には丁度いい。ヒィカは不思議と、こういう手持ち無沙汰な時間に連絡をくれることが多かった。そういう偶然も重なって、関係が続いているのかもしれない。

【件名】おはようございます！

【内容】今週末また会えると嬉しいのですが、いつ頃なら大丈夫そうですか？

僕とやりとりをするなかで学習したのか、彼のメッセージは届く度に簡潔になっていた。ただ、それでも丁寧さが伝わってくるのが彼らしい。僕も同じように簡潔に予定が空いてる日時を送った。すると、すぐに返事が返ってくる。

【件名】RE:RE: おはようございます！

【内容】ではまたいつものところでお会いしましょう。あと、前々からレタさんに聴かせたかった曲があったので、忘れない内に添付しますね。いつものカフェで流れている曲です。

メッセージには音楽のギフトコードが添付されていた。とはいえ、僕自身はあまり音楽に興味がないので、とりあえずパソコンに保存だけした。

約束も取り付けたので、メッセージソフトを閉じて勤務開始の申請をした。今日のペース配分を決めるためにざっと業務の一覧を確認をしていると、年末の業務報告書作成のタスクが目にとまった。そこで僕は、一年がもうじき終わることに気が付く。

この一年、というよりこの半年は僕の人生のなかで最も濃い期間だったかもしれない。もしかすると、これから先の人生でもこんなにたくさんの出来事は起こらないかもしれない。

レベッタとの別れ。ヒィカやミィとの出会い。コハルとの別れ。ジプタとの出会い。

それにはすべて、誰かが関わっている。レベッタは思い出のことを、誰かと一緒になにかをすることで生まれるものと表現していた。僕が濃いと感じるのも、他人と会ったり、会わなくなったりしたからなのだろうか。

もし、レベッタの言っていることが正しければ、この国では毎日どれくらいの思い出が生まれているのだろう。人に会うことを避けながら、いつも同じことを繰り返している僕の一生には、どれだけ思い出があるのだろう。やはり思い出は、人と会わなければ生まれないのだろうか。

いや、それだけではきっと、思い出にはならないだろう。

思い出の正体は、変化だ。日常に転がっているほんの些細な非日常こそが思い出になる。

朝起きて、アンドロイドに挨拶をして、家事をして、食事をして、仕事をして、風呂に入って、布団に入る。この日常のサイクルに些細な変化をもたらすのが他人なのだ。だからこそ、人に会うことが思い出になりやすい。

どれだけ朝に起きたって、どれだけご飯を食べたって、どれだけ仕事をしたって、それらはいつもと同じ。変化がない。膨大な数をこなしているはずのそれらの行為も、起床、食事、仕事という簡単な言葉で済ませることができてしまう。それらは、日常として書ききかれていく。そうして、どんどん自分の人生は日常に希釈されていく。

もしかすると、レベッタはこの薄く伸ばされたような毎日から抜け出したかったのかもしれない。寂しさや愛についての話はただの口実で、死ぬまで同じような生活を続け、死ぬ間際に振り返る瞬間を想像してしまったのかもしれない。

いや、それこそ僕の想像の域を出ない。今となっては、意味のない仮説だ。

ただ一つ確かなのは、僕はそんな希釈されたような毎日に満足しているということだった。変化もなく、静かに毎日を過ごしていく。余計な感情の起伏もなければ、命の危険に晒されることもない。当たり前起きて、当たり前寝る。それだけで、僕は幸せだと思えた。

しかし、それならばどうして僕はレベッタと文通をしているのだろう。どうしてヒョカと会っているのだろう。余計な思い出はいらないはずだ。一人取り残されたような、この国の静寂が好きなのに、そんな世界を守りぬいてきたはずなのに、どうしてそれを自分から壊そうとしているのだろう。そうしないと得られないものを、気付かないうちに欲しているのだろうか。

この半年で、僕は、変わってしまったのかもしれない。

これが、孤独という感覚なのだろうか。

分からない。

ふと、ひだまり公園でレベッタに教えられた言葉を思い出す。それは、僕が初めて口にした、^レ口づけ、という言葉。

思えば、あの瞬間から僕の本質的な何かが変わってしまったように感じる。父や母と過ごした時間のなかで積み重ねた関係よりも、あの一瞬の口づけのほうが、人生で最も深い干渉のように思えた。

それほどまでに深く干渉されたからこそ、僕はもう戻れなくなってしまったのかもしれない。半年前の僕であれば、きっとレベッタを恨んでいただろう。しかし今は、少しもそんな気は起きていない。感謝、とはまた少し違うが、彼女が以前よりも身近に感じるような、親近感に近いものを覚えていた。

パソコンからの警告音が聞こえて我に返る。考えに耽りすぎて、作業の手が止まって

いたらしい。僕は咄嗟に適当な嘘をついて、仕事を再開させた。

レベッタとの口づけをこの国の言語で翻訳したとき、一体どんな言葉になるのだろう。

そんなことを考えながら、僕は残りの仕事をこなしていった。

3

週末。ひどく雨が打ち付ける音で目が覚めた。数分ほど雨の音を聞いたあと、今日はヒィカと会う約束をしていたことを思い出す。少しでも憂鬱な気持ちになったが、それだけで予定をキャンセルするのは気が引けたので、意を決して体を起こした。

ベッドから降りてすぐ、テーブルに広げられた便箋が目にとまる。手紙はほとんど書いているのだが、サプライズとしてヒィカのサインをプレゼントしようかと思っていた。ヒィカに断られたらそれまでだが、もしそれを送ることができたら、レベッタもきっと喜ぶだろう。

「おはようございます。レタ様」

生活音から感知したのか、通信端末からジプタの声が聞こえた。

「おはよう」

「朝ごはんはいかがなさいますか？」

「シリアルで」

僕は通信端末の画面を見ずに答える。

「和食、洋食もございますが……」

「ゆるめのヨーグルトもつけて」

「それだけでは、必要な栄養素がとれません」

「だからなに？」

「レタ様の健康が守れなくなります」

「別にいいよ」

「かしこまりました」

ジプタがそう言った瞬間、通信端末の画面に『準備中』と表示された。コハルはここまでしつこくなかったのに、ジプタはそれが自分の使命かのように毎回別の食事を提案してくる。今のニーズに合った機能なのかもしれないが、僕にとっては余計なお世話だった。

これから、こうしたやり取りが増えていくのかと思うと気が重くなる。きっと僕も、やめて欲しいことをしつこく伝えれば減っていくのだろうが、コハルと同じくらいスムーズに意思疎通をするためには、相当な会話量が必要になってくるだろう。

コハルのバックアップがあれば、とも思ったが、大家の様子だとなにも残していないだろう。それにコハルの体も、もうこの世にない。

僕は気持ちが落ちる前に自分の書いた手紙を手取る。誤字脱字がないか確認していると、すぐに朝食が運ばれてきた。

「お食事をお持ちしました」

「ありがとう」

「シリアル用のミルクもお付けしておきました」

トレイを見ると、シリアルとヨーグルトのほかに、ミルクが入った小瓶が乗っている。

「気を使ってもらったところ悪いけど、ミルクは飲めないんだ」

「大変失礼いたしました。回収いたします」

懇切丁寧に謝罪するジプタに小瓶を返して、早々に玄関のドアを閉めた。このまま話していると、また憂鬱な気持ちになってしまいそうだった。

テーブルにトレイを置いて、イスに腰掛ける。雨の音は依然強いまだだった。今日はきっと一日中雨だろう。僕はヨーグルトをかけたシリアルを食べながら、ヒカのことを考える。

会ったときの第一声はきっと、天気についてだろう。彼はいつも天気や気温など、他愛もない話題から始めることが多い。そして僕の調子を聞いたあと、毎回同じような文言で励ましてくれる。人によっては適当に感じるかもしれないが、僕はアンドロイドと話しているようで気が楽だった。もちろん、そう思うのが失礼だということは分かっているのですが、一度もヒカに伝えたことはない。

ただ、そのあとの話は多岐に渡る。ヒカ自身の創作の話や、この国の話、故郷から去ってしまった友人の話やミィの話をすることもある。正直、どの話題も興味はそそられないが、ヒカが話している表情や身振り手振りを見ていれば、不思議と飽きはこない。

本当に、不思議だった。どうして僕は、とくに中身があるわけでもないお茶会に毎度のこと出席しているのだろうか。

気が付くと、朝食を食べ終わっていた。これといって不味くもなく、美味しくもない。なんとも無機質な食事だった。

僕は立ち上がり、そのまま体を傾けてベッドに倒れる。

「ジプタ」

「お呼びでしょうか」

「十二時過ぎに起こして」

「かしこまりました」

最近、特にヒカに会う日は、こんな風に時間を潰すことが多くなっている。本を読んだり、散歩に行く気にもなれない。ただこうして、時間が過ぎていくのを待つことしかできない。少し前の僕からは考えられない時間の潰し方だった。

雨の音を聞きながら、ゆっくりと目を閉じる。水の中に落ちていくかのように、僕の意識は沈んでいった。

昼になり、ジプタの声で目が覚める。

「レタ様。十二時を少し過ぎました」

「おはよう」

「おはようございます。昼食はどうされますか？」

「外で食べるから、いらない」

「かしこまりました」

僕は体を起こして上半身だけ伸びをした。そういえば、今回のことに限らず、最近は外食が多くなったように感じる。

ヒカとの約束の時間まではまだ少しあるが、早めにA区の喫茶店へ行くことにした。

あそこは確か、サンドイッチなどの軽食もあったはずだ。

ロングコートを手織り、レインブーツを履いて玄関のドアを開けた。玄関前の手すりに掛けてあった傘を持って階段を降りる。

「いってらっしゃいませ」

不意にジプタの声が聞こえたので辺りを見回す。しかし、ジプタの姿は見えなかった。

「今日は雨ですので、足元にお気をつけ下さい」

そこで僕は、胸元にしまってある通信端末から声がしていることに気が付く。

「驚くからやめてくれない？」

「かしこまりました」

ため息をついて傘を広げる。雨足は少しだけ弱まっているようだが、それでもいつもより強い雨だった。

雨の中、聞き耳を立てながら無人の道を歩いていく。近くで鳴っている雨の音、遠くで鳴っている雨の音。幾重にも重なるような雨音は、喫茶店で流れている音楽よりもよっぽど心が落ち着いた。

雨音を聞きながらの散歩を楽しみ過ぎたのか、思っていた時間よりも遅れて喫茶店に着いた。時刻はちょうど、ヒカと約束をしていた時間だった。

「いらっしやいませ」

店に入ってすぐ、店員が挨拶をしてくる。

「すごい雨だね」

ヒカの第一声だと思っていた話題を振ってしまい、僕は思わず笑ってしまった。

「こんな豪雨は三年ぶりですかね」

店員は訝しげに僕を見つつも、世間話を続けてくれた。

「そうだね。それくらいだと思う」

傘立てに傘をしまい、壁にあるハンガーにコートを掛ける。店員はいつの間にか、僕たちがいつも座っている席にメニューを置いていた。

「そういえば、先に誰か来てない？」

「いつも一緒にいらっしやる方ですか？」

「うん」

「今日はまだ見ていませんね」

「そっか」

ヒカも僕と同じように、雨の音に聞き入って遅れているのかもしれない。僕はオーダーをしながらイスに座り、一息つく。

上がり気味だった息が落ち着いてきたころ、店員がオーダーしたメニューを持ってやってきた。

「コーヒーとサンドイッチになります」

コトン、コトンと皿を置く音が響く。

「以上でよろしいですか」

「うん。ありがとう」

「それではごゆっくり」

店員は頭を下げて立ち去った。僕はその様子を見ながらコーヒーを飲む。最近になっ

て、この店の水の味が変わってしまったので、代わりにコーヒーを飲むようにしていた。

窓の外を見る。雨が霧のようになっていて、いつもは見えているはずの建物も見えなかった。

僕はヒィカを待ちながら、ゆっくりとサンドイッチを食べた。相変わらず味が薄いのが、家で食べるものよりかはマシだった。

サンドイッチも食べ終わり、コーヒーのおかわりを注文する。

時計を確認すると、約束の時間からすでに三十分以上過ぎている。彼の性格からして、一秒でも遅れようものならすぐにでも連絡をしそそうだが、そういった連絡も一切ない。

念のため、僕のほうからも通話をかけてみたが、ヒィカからの反応はなかった。

「コーヒーをお持ちしましたが……」

顔を上げると、店員がコーヒーを持ってきているところだった。僕の表情を見て、なにかを察したのかもしれない。

「悪いけど、お会計いいかな」僕は立ち上がってコートを羽織る。「それも払うよ」

「救急センターに通報しましょうか？」

「いや、ここの近くで妹が働いてるはずだから、まずはそっちで聞いてみる」

僕からカードを受け取った店員は、小走りでレジへ向かう。

「緊急ですので、おかわりのコーヒー代は結構です」

店員はそう言いながら会計を済ませて、僕にカードを返した。

「ありがとう。また来るよ」

「お待ちしております」

傘を持って店を出たあと、急ぎ足でミィが働いている雑貨店へ向かった。ドアを開けてすぐ、ミィの澁刺とした声が聞こえる。

「いらっしゃいませ。あ、レタさん」

「今日、ヒィカと会った？」

ミィは目を丸くして固まってしまった。今言った言葉を思い返し、自分が思っている以上に焦っていることに気付く。僕は小さく謝って、一度頭の中で言葉を整理した。

「えっと、今日ヒィカと会う約束してたんだけど、まだ来てなくて」

「え、来てないですか？　お兄ちゃん、朝は楽しみにしていましたけど」

「そっか。来れない心当たりとかない？」

「そうですね」ミィは一瞬考えるような素振りを見せたが、すぐに思いついたような表情になる。「お薬飲んでました。多分、睡眠薬かな」

「睡眠薬？」

「はい。私が出る直前まで作業をしていたみたいで……。でも、今日は昼過ぎからレタさんと会うからちゃんと寝なきゃって」

「なるほど。それなら……」

ミィの話を聞く限り、睡眠薬を飲んで今現在も寝ているという説が有力な気がした。彼の生活サイクルまでは知らないが、不規則で寝る時間もバラバラだと聞いたことがある。

きっと、バイオリズムが合わずに寝過ぎしているのだろう。

ミィと目が合った。とても不安そうにしている。僕は反射的に目をそらして窓の外を

見ようとした。

しかし、窓に反射していた僕の顔も、ミィと同じような表情だった。

「兄に、なにかあったんでしょうか？」

「分からない……」

嫌な予感が、じわりと体に染みていく。

「そうだ。アンドロイドは？」

「いえ、二人暮らしなので……」ミィは首を振る。「ヘルスケア系の機械も、兄は付けたがらなくて」

「緊急通報の条件づけは？」

「一応、部屋のドアの開閉間隔でお互いの端末に通知が来ますけど」

そう言いながら、ミィはレジカウンターに置いていた通信端末を確認しに行った。

「どう？」

「特に来てません。でも、部屋に籠もるときは何時間も出てこないこともあるので、長めに設定して……」

目眩がした。足元がふらつく。

「でも、朝は楽しそうに話してたんですよ」

「そっか」ミィに心配させてはいけないと平静を装う。「やっぱり寝坊してるのかな」

「だと、いいんですけど……」

一瞬、会話に不自然な間が空いた。そこで僕は、自分の心臓の音が大きく鳴っていることに気付く。

本当に、ヒィカは寝ているのだろうか。

「やっぱり私、家に……」

ミィが言い切る前に、僕は走りだしていた。

「レタさん！」

ミィの声を背中から聞きながら全速力で走る。数歩走ったところで傘を忘れたことに気付いたが、今は少しの時間も惜しい。さっきまでぼーっとサンドイッチを食べていたことを後悔する。いや、そんなことを考えている場合ではない。

もう一度ヒィカに通話をかける。しかし、聞こえるのは呼び鈴だけだった。そのまま画面を切り替えて、救急センターにつなぐ。

「お電話ありが——」

「一番！」

音声ガイドの説明を無視して、救急のコールセンターにつながる番号を叫んだ。

「こちら救急センターです。どうされました？」

女性の肉声が受話口から聞こえた。僕は息を切らしながら要件を伝えていく。

「友人からの連絡が途絶えました」

「その方は今どこにいるか分かりますか？」

僕は半年前、ヒィカを送り届けたときのことを必死で思い出す。

「彼の自宅です。C区の……、五丁目の二番地のえっと……」

「マンションの名前か、識別番号、識別マーカ―は分かりますか」

「マーカ―が、確か赤二本と黒一本だったはずですよ」

「あなたは今どちらにいらっしゃいますか？」

「A区六丁目です。ここから……もうすぐC区の四丁目に入ります」

「あなたのお名前をいただいてもいいですか？」

「レタです！」

「出勤の準備が整いました。今から現場に向かいます」

「どれくらいでつきますか？」

「五分二十三秒の予定です」

「分かりました！」

「只今、おそらくご友人のご家族からも通報がありました。正確な住所も分かりましたのでご安心ください」

どうやらミィも同じような通報をしたらしい。今思えば、通報はミィに任せてもよかったかもしれない。

「それでは一度、電話を切らせていただきます」

「分かり、ました。よろしく申し上げます……！」

僕は息も絶え絶えに電話を切り、走る速度を早めた。雨とレインブーツのせいで、思うように走れない。タクシーも考えたが、ここまですればもう走ったほうが早い。冷静な判断ができていないと分かっている、今はただ、自分の体を前に進めることしかできなかった。

雪崩れ込むようにしてヒィカのマンションに駆け込み、警備室のドアを叩く。すると、すぐに屈強な警備員が一人現れた。

「友人からの連絡がないんです！」

「レタさんですね。今さっき連絡が入ったので、部屋に向かいましょう」

警備員はエレベーター横にある階段から上の階へのぼっていった。全速力で走ったせいで足はもうまともに動かない。でも、僕の体は勝手に警備員を追っていた。

警備員は三階で階段を逸れ、廊下を走りだした。僕は警備員の姿を見失うギリギリのところをなんとかついていった。自分の呼吸がうるさいせいで、周りの音が遠くなっている。

ヒィカの部屋と思われるドアを警備員が叩いていた。僕はふらつきながら足を止めて、ようやく息を整える。

呼吸音で聞き取れなかったが、警備員が一言なにか言って胸ポケットから鍵を取りだした。先に警備員が部屋の中に入る。一瞬僕の方を見てなにか言ってきたが、上手く聞き取れなかった。酸欠で、頭がぼーっとしているせいもあるかもしれない。

僕は警備員に続いて玄関をくぐった。先に入った警備員は家の奥、おそらくリビングらしきところから次々とドアを開けて様子を確認していた。

ただ、僕にはなぜか、彼のいる場所が分かった。

もしかしたらそれは、偶然だったのかもしれない。

玄関から一番手前の部屋のドアノブに手を掛けて、ゆっくりとドアを開ける。

そこに、ヒィカはいた。

僕はゆっくりとヒィカの元へ近づき、膝をつく。彼がうつ伏せになって倒れている床には、いくつもの錠剤と、吐瀉物が散らばっていた。

目を見開いたまま、寸前の苦しさを残して弛緩した表情。首筋には、爪で引っ掻いたような跡があった。

僕の息は整いはじめ、呼吸の音も静かになり始めているのに、なにも聞こえなかった。

警備員の腕が後ろから伸びてきて、そのまま僕を抱えて部屋の外へ連れだそうとした。僕はどういうわけか離れたくなくて、必死に抵抗した。しかし、警備員の力に敵うはずもなく、すぐに玄関の外に投げだされた。それと入れ替わるように救急隊員がヒィカの家に入って行く。

それから、目や耳から入ってくる情報の一切が認識できなくなって、気が付いたときには一階の警備室のソファに座っていた。警備員にヒィカのことを聞くと、数分前に救急車で運ばれていったとのことだった。

僕は警備員に礼を言ってマンションをあとにする。傘を持っていなかったので警備員に一度呼び止められたが、適当なことを言って外にでた。ミィが帰ってくるまで待たぼうがいいと頭では分かっていたが、体がふわふわとして、動かさないと落ち着かなくて、とにかく、どこかへ行きたいという気持ちだけで歩いた。

そういえば、傘は雑貨屋に置いてきてしまったのだった。コートも濡れている。今度クリーニングに出さなくては。ミィはこっちに向かっているのだろうか。無料にしてもらったコーヒーのお礼は、ヒィカと一緒にするのが店員も安心するだろうか。

雨の音が聞こえる。

雨の音以外、なにも聞こえない。

彼は、

死んでしまったのだろうか。

そう思った瞬間、体に力が入らなくなり、僕はその場に倒れこんだ。大粒の雨は絶えず、そして容赦なく僕の体を打ち付ける。

レベッタを見送ったときに似た感覚が、僕の体にじんわりと染みていく。なにかが欠けてしまったような、今見ている景色に、ぽっかりと真っ黒な穴が空いているような喪失感。

今まで触れることのできた人たちが、目の前から消えていく。

当たり前にあったものが、なくなっていく。

僕は一体、どうしてこんなにも傷ついているのだろう。倒れるヒィカを、その表情を見てしまったからだろうか。それとも、失ってしまうから？

失う？

僕はなにを失おうとしているのだろう。

そもそも僕は、なにを手に入れていたのだろう。

思い出？

共感？

体温……？

それらを失うことのなにが怖いのだろう。

僕の一部が、欠けてしまうから……？

そこで、気付いてしまう。

僕は、歩み寄ってしまったのだ。

そしてそれが、当たり前のことになっていた。

平穏に目を覚まして、安心して眠りにつく。その当たり前を守れていたから、満足していた。油断していた。けれど、そのなかに少しずつ、レベッタのことを考えたり、ヒィカと過ごすという当たり前が紛れ込んでいた。日常の一部になっていたのだ。

それは自分の、僕の日常の一部のはずなのに、僕の手が届かない場所で勝手に消えてしまう。

それは、僕自身が最も恐れている欠けた状態。一人では、僕一人では自分を満たせない状態。

苦しい。

悲しい。

虚しい。

痛い。

ふと、無機質な声が聞こえた。

そうだ。この声は……。

目を開けると、ミィが僕の顔を覗きこんでいた。

「レタさん」

ミィは泣いていた。傘をさしているので、雨が伝っているわけでもなさそうだった。

「風邪、引きますよ」

彼女の声で、僕の頭は思考の世界から現実に戻されていった。

僕は道路の端で仰向けに寝転んでいた。近くにタクシーがあるので、自宅に帰ろうとしているミィが見つけたのかもしれない。

ミィは傘を二つさしている。一つは彼女自身に、もう一つ、僕が雑貨屋に忘れていった傘は、僕の頭の上に。

「ここは、どこ？」

「C区の……多分四丁目です。うちのマンションから連絡があって、急いで帰るところで」

どうやら僕は、無意識のうちに雑貨屋へ戻ろうとしていたらしい。彼女から傘を受け取って、立ち上がろうとする。

「あ、レタさん！」

よろけて転びそうになった僕を、ミィが支えてくれた。

「ごめん、足が……」

全速力で走った疲労なのか、体がとても重く感じた。

「でも、もう大丈夫。ごめん、濡れちゃった」

「それは全然いいです」

ミィは服の袖で涙を拭いた。

「帰りながら、マンションの管理人さんにいろいろ聞きました」

「ヒィカの、様態は？」

「あまり、よくないと」

「そっか」

僕はそれ以上、なにも言えなくなってしまった。

後ろから、タクシーのクラクションが聞こえる。

「あ、行かなきゃ」

ミィは僕の手を掴んだ。

「今から、行き先を変えて病院に行くところだったんです」

「病院……」

ヒィカは今ごろ、応急処置をされながら病院についたころだろうか。確かに、救急車で運ばれたとなれば、病院に行くのは普通の行為だろう。

ただ、僕が今の今までそれを思いつかなかったのは……。

倒れているヒィカが一瞬フラッシュバックする。

「レタさん？」

ミィが顔を覗きこんできた。僕は慌てて首を振る。

「いや、なんでもない。行こうか」

そのまま、僕とミィはタクシーに乗って病院へと向かった。着いてすぐミィの名前が呼ばれ、僕はその付添人として一緒に案内された。その際、流石に濡れそぼった格好で病院を歩くわけにはいかないので、病院着とタオルを貸してもらった。

そのあと、僕たち二人は案内された集中治療室前のベンチで時間が過ぎるのを待った。

「……レタさん」

どれくらいの時間が経ったか分からないなか、不意にミィがつぶやいた。

「なに？」

「兄は、レタさんのことを、とても気に入ってました」

「……そうなんだ」

どうして今、こんな話をするのだろう。

「だから、レタさんがこうして、兄のことを想って色々してくれて、喜ぶと思います」

ミィは俯いていた顔を両手で隠した。

「私も……。感謝してて……」

抑えきれない嗚咽が、ミィの喉元から聞こえる。彼女も冷静ではないのだろう。

「私、今日はきっと仕事が終わるまで気付かなかったから」

「それを言うなら、僕だってもう少し早く気付くことができた」

ミィは僕に体を預けてきた。僕は自然と、ミィの体を抱きしめていた。傷の舐め合いだと分かっているけど、こうしてお互いをただ慰めることしかできなかった。

そして数時間後、僕たちの気持ちが落ち着いてきたところに、ようやくヒィカの顛末が告げられた。

4

ヒカの死から二日後の昼間、なんの前触れもなく部屋のインターホンが鳴った。泥をまとったような気だるさを引きずりながら、玄関のドアを開ける。するとそこには、しかめっ面をしたミィが立っていた。

「レタさん、どうしたんですか？」

「それは、こっちのセリフだけど」

「だって、その……ひどい顔ですよ」

「僕を貶しにきたの？」

「あ、いえ、違うんです！」ミィは慌てて首を振った。「今日はその、兄のことでいろいろ報告がありまして」

「報告？」

「はい。でも、その前に……」ミィは僕の髪の毛を触った。「レタさん、ちゃんとお風呂入ってますか？」

「なに、突然」

「だって、髪の毛もボサボサだし、肌も荒れてますよ」

僕はなにも言い返せなくなる。実際、ミィの言うとおりに二日前に病院から帰ってきて以降、ほとんどなにもしていなかった。仕事もずっと休んでいる。

「そんな状態じゃ、話せるものも話せません」

「……分かったよ」

僕は急に恥ずかしくなり、ミィを招き入れたあとシャワールームのドアを開けた。

「あ、レタさん」

「今度はなに？」

「服、そこで脱ぐんですか？」

「そうだけど」

ミィは焦っているのか玄関のドアノブに手をかけていた。

「僕の部屋、更衣室ないから」

「そう、なんですか……」

「恥ずかしいなら目でも瞑っておいて。イス、座ってていいから」

「分かりました」

ミィは素早くイスを回転させ、僕に背を向けて座った。

僕はため息をついたあと、服を脱いでシャワールームに入った。

この二日間、ミィが来る瞬間までほとんど記憶がなかった。ジプタと話したような気もするし、一人でなにかをつぶやいた気もする。会社に休むことを伝えたのは間違いのないのだが、どんな理由で休みをとったのかも全く覚えていなかった。

早々に髪の毛と体を洗い終えて、シャワールームのドアに手をかける。

「あがるよ」

僕はそう言いながらシャワールームのドアを少し開けて、隙間から部屋の様子を伺った。部屋にはなぜかお茶を運んでいるジプタと、相変わらず後ろ向きに座っているミィがいた。

「なに、どうしたの？」

僕は思わずたずねる。

「すみません。レタさんの通信端末から声がしたのでお話してたら、お茶を持ってきてもらうことになっちゃって……」

「来客用ですので、料金は追加されません」

ジプタは二人分のカップを置いたあと、僕に語りかけてきた。

「悪いけどジプタ。今度からそういうことはやめてくれない？」

「かしこまりました」

「それも頻度落として」

「かしこまりました。以後気をつけます」

そう言って、ジプタは部屋を去っていった。僕はさっとタオルで体を拭き、近くに掛けてあった部屋着に着替える。

「なにを頼んだの？」

僕は髪の毛をタオルで拭きながらカップの中身を見る。

「ハーブティを頼みました。すみません、勝手なことしちゃって」

ミィは振り向いて僕の様子を確認したあと、イスの向きをテーブルの方に戻して座り直した。

「勝手なことをしたのはジプタだから」僕はベッドに座った。「それで、報告って？」

ミィは僕の方を向いてにこやかに笑った。

「今日は、報告することがたくさんあるんです」

その笑顔は、いつも彼女がする笑顔よりも穏やかな印象だった。

「兄の葬式の日取りが決まりました」

「そっか」

僕は改めて、ヒィカが死んでしまったことを実感する。

「いつやるの？」

「明後日です」

「明後日か」

「私たちの故郷でやろうと思ってるんです」

「え？」

「だから今日は、レタさんにお別れを言いに来たんです」

呆然として、言葉が出てこなかった。

「これから、兄と一緒に実家に帰ります」

「今日、行くんだ」

「はい」

芯の通った声で、ミィは返事をする。

「もう支度は終わってて、あとはこの国を出るだけです」

「そうなんだ」

僕はゆっくりと、何度もうなずいた。

「レタさんも、いらっしゃいますか？」

「行きたいけど」僕はため息をついた。「僕は、パスポートを持ってないんだ。今から発行しても、間に合わないと思う」

「そうですか」

ミィは残念そうにつぶやいた。

「本当に、もう行くの？」

「はい」

当たり前だが、ミィの返事は変わらない。

どうして、僕の周りに居る人は、突然去ってしまうのだろう。それならばどうして、僕と出会ったのだろう。そして、これからいなくなるという瞬間に、どうして僕に会いにくるのだろう。どうして、僕に名残惜しい気持ちを味わわせてから、去っていくのだろう。

「一応ですが……死因は窒息死でした」

僕の考えていることを無視して、ミィは話しはじめる。

「窒息死って」

「睡眠薬の服用量を誤ったせいで、吐き気がでてしまい、吐いたものが気管に……」

「あ、いや、詳しく聞きたいわけじゃない」

僕は首を振った。

「実家でも、薬の服用量を間違っただけで倒れることはあったんです。だけど、いつもなんだかんだ無事でしたし、私もきっと気が緩んでいたんだと思います」ミィはふっと笑った。その表情は、ヒィカが自嘲するときの表情とそっくりだった。「兄は目が悪くて、なにかを身につけるのも嫌だからってメガネもしないで、だから、どこかにぶついたり、間違っただけで薬を飲んだり、よくあったんです」

「そうなんだ」

「この国では、通信端末から生活音を聞いて、生存確認をしてくれる機能があるんですよ。私、病院でそんなものがあるって知りました。もしも、もっと早くそれを知っていたら……兄は助かったかもしれません」

これは、それを教えなかった僕のことを責めているのだろうか。いや、ミィのことだから知らなかった自分を悔いているのかもしれない。二人暮らしの安心感もあって、後回しにしたり、しっかりと調べていなかったのかもしれない。

彼女にしては珍しく、脈絡のない話だった。落ち着いているように見えるのは、外面だけなのかもしれない。

僕は窓の外を見る。今日の天気は快晴だった。

どこかで、ヒィカの死はフィクションなのではないかと思っていた。

しかし、ミィの口から出たヒィカの死因は、これ以上ないほどに現実的だった。人は死ぬということを、認めざるを得ないほどに。

「ヒィカがもし、この国に来ていなかったら、結果は変わったかな？」

僕もミィと同じように、しても仕方がない「もしも」の話をしてしまう。僕自身も、冷

静ではないのかもしれない。

「それは」ミィは目を伏せた。「分かりません。どの国に行っても、同じだったかもしれません」

「そっか」

「悔しいです。私が、私さえいけば大丈夫だと思っていたのに……」

ミィはくちびるを噛んだ。涙をこらえている、いや、後悔が溢れないように耐えているのかもしれない。

「そういえば、だけど」

僕は話題を変えることにした。どうにも、ミィがつらそうにしている姿は見えていなかった。

「ミィはどうしてヒィカと一緒に来たの？」

「私、ですか」ミィの表情が驚きが変わる。「そうですね……」

ミィはハーブティを一口飲んだ。

「兄が、孤独だったからです」

「ヒィカが？」

「はい。兄が音楽家なのは、聞いていましたか？」

僕はうなずいた。

「故郷の国では、兄は音楽家としてある程度名前が知られていました。兄自身もそれに誇りを持っていましたし、この先もずっと音楽を作り続けると言っていたんです」

ミィは悲しそうに笑う。

「だけど、ある日を堺に……理由は分からないんですけど、兄はこの国に蔓延していた拝金主義を罵倒しはじめたんです」

きっと、初めて喫茶店で話したときにヒィカがしていたパトロンの話だろう。どうやら、ミィには話していないらしい。

「それから、兄の音楽はめちゃくちゃになって、出資をしてくれた人も、兄の音楽が好きでいてくれた人も、みんな離れていきました」

「それだけの理由で？」

ミィは少し間をあげたあと、ゆっくりとうなずいた。

「きっとみんな、兄の才能にだけ、惚れ込んでいたんだと思います」

「そんなものなのかな」

「ええ……。あとは、音楽以外のことはあまり上手じゃなくて、それ以外の人間関係が築けなかったのも原因だと思います」

「それはもしかして、お国柄？」

「え？」

「いや、そういう人間関係の話って、大体は国の思想が絡んでることが多いから」

この国の孤独と同じように。

「そうですね」ミィは手を顎に持ってくる。「確かに、故郷では芸術の才で人間の価値が決まるくらい、重要視されてますから……。才能がない分野では人は集まらないかもしれません」

「なるほど」

そこでふと、疑問に思う。

「ミィも、なにか芸術はするの？」

ミィはにこやかな表情で首を振った。

「絵がちょっと描けますけど、あとはダメダメでした」

「じゃあ、ミィも孤独だったの？」

「私は、そうですね。才能がないと割りきっていたのがよかったのか、友達は多かったです」

「そうなんだ」

僕は納得する。きっと彼女には、コミュニケーションの才能があったのだろう。

「兄は、音楽で得た人間関係を失ったんです」

僕の考察をよそに、ミィは話を進める。

「だから、この国に来たんです」

「一緒に？」

「はい。音楽のない兄の価値に気付いていたのは、私だけでしたから」

「じゃあ、ヒィカが孤独だった瞬間はないのかもね」

なんの気なしに言った言葉だったが、ミィはとても嬉しそうにうなずいた。

「ありがとうございます。そうだったらいいなって思います」

ミィは僕をじっと見つめたあと、手を握ってきた。

「レタさんも、音楽とは別のところで兄の価値に気付いてくれた人だと思うんです」

確かに、彼の作る作品に興味がなかったのは事実だった。ヒィカにとってそれがよいことなのか悪いことなのかは分からないが、いろいろな意味で幸いだったのかもしれない。

「さっき、兄がこの国に来ていなかったら……ってお話をしましたけど」ミィの両手に力が込められる。「やっぱり、兄はこの国に来ることを選んでいたと思うし、兄の価値に気付けるレタさんとも、どこかで会えていたと思うんです」

「必然だったってこと？」

ミィはうなずいた。仮定に仮定を重ねた話だったが、そもそもこの話自体が『もしも』の話だったことを思い出す。それならば、都合の良い『もしも』があってもいいのかもしれない。

僕たちを取り巻く雰囲気は、穏やかなものだった。

そのはずだった。

なのに、どうしてだろう。胸の奥で、なにかがうごめいている。

僕はどうしようもなくなって俯く。床に敷き詰められたタイルを見ながら、できるだけなにも考えないように努めた。なにかから目をそらしている。そんな予感がしてならなかった。

ヒィカは、芸術の国でどんな人生を送っていたのだろう。

ミィはこれから、どんな人生を送るのだろう。

いや、考えてはいけない。

レベッタは今、なにをしているのだろう。

駄目だ。考えるな。

ミィはもう、この国に戻っては来ないのだろうか。

「あのさ、ヒィカがこの国で書いた曲、残ってない？」

「え？　兄の曲、ですか？」

「うん」

僕は顔を上げずにうなずいた。うごめいているなにかに気付く前に、関係のない話をして意識をそらさなくては。

ミィは逡巡したような息づかいをしたあと、残念そうにつぶやいた。

「やめておいたほうが良いと思います」

「どうして？」

感情が落ち着いてきたので顔を上げる。

「きっと、兄も聴かれたいと思います」

「それは、さっきの才能の話？」

「いえ、単純に……その、私が言えたことではないと思うんですけど、完成品とは言えないものばかりです」

「完成品はないの？」

この会話に意味がないことは、分かっていた。

「はい。私はそう思います」

僕が話したいことは、音楽のことじゃない。

「ヒィカは言っていたんだ。作品は魂だって」

なんの話をしているのだろう。僕は遠回りな話が嫌いなはずじゃないか。

「そうですね、私もそう思います」

彼女に言わなくちゃ。

「彼の魂を受け止めたいんだ」

会話が途切れるのが怖い。

「でも……やっぱりできません」

「そっか」

僕はうなずく。そもそもこれは、僕がしたい話じゃない。

深呼吸をする。思考がどこかに行っている。目の前の会話に集中しなければ、ミィにも、ヒィカにも失礼だ。

「それじゃあ、私はこれで」

「うん」

僕は微笑んだ。

彼女も微笑み返す。

ミィはゆっくりと立ち上がり、まっすぐ玄関の方へ歩いて行く。

僕は彼女に別れの挨拶をしようと立ち上がった。

「ねえミィ。僕たち、一緒に住まない？」

「え？」

振り返るミィと目が合う。彼女の表情には、綺麗に驚きだけが表現されていた。

僕は今、なんて言った？

住みたい？　僕が？　ミィと？

きっと、さようならと言ったのを二人とも聞き間違えてしまったんだ。そうに違いな

い。僕が誰かと一緒になることを望むなんて、ありえない。僕は、孤独の国の住人なのだから。

ミィは固まったまま動かなかった。僕もどうしていいか分からず、ただ静かな時間だけが過ぎていった。

言わなくちゃ。二人とも聞き間違えたねって。ミィが困っているじゃないか。

「えっと……」

沈黙を破ったのはミィだった。

「嬉しいです。そう言っていただけのは」

僕はその言葉を聞いて我に返る。

「いや、ごめん、今は……」

「否定しないでください」ミィは僕に手のひらを向けた。「レタさんの言葉、とても意味がある言葉だと思います」

僕はついに耐え切れなくなり、視線を逸らした。

「だけど、レタさんと住むことはできません」

ミィは曖昧にしたくないのか、一言一句きっぱりと言い切った。

「私も、レタさんのことは好きですけどね」

「そう」

ミィの答えに安堵している自分がいることに気が付いた。この一言で、一体僕はどれだけの矛盾を生んでしまったのだろう。

「兄の葬儀もありますし……。それに、この国にいるのは寂しいです」

「やっぱり、故郷で暮らしたい？」

「はい」

ミィは短くそう答えた。

「理由はそれだけ？」

余計なことだと気付く前に、口をついて言葉がこぼれてしまった。

「あとは、そうですね……」

ミィは淑やかに笑った。

「レタさんには、兄の恋人になって欲しいなって思っていたんです」

「……そっか」

それが、優しい嘘だとすぐに分かった。彼女なりに、オブラートに包んでくれたのだろう。

「それは、君にとって重要なこと？」

ミィは質問の意図を察したのか、一瞬だけ口を結んだ。

「はい。少なくとも、私にとっては」

「そう」

僕はうなずいて彼女の元まで歩いた。

「ありがとう。ミィ」

僕が差し伸べた手を、ミィはじっと見つめた。

「レタさんは、それでいいんですか？」

「うん」

「分かりました」

ミィはそっと、僕の手を握った。その握手で、言葉にできない決意のようなものをお互いに伝えられた気がした。

「元気で」

「レタさんも」

「僕はずっと変わらないよ」

「そうですね」

ミィはくすくすと笑いだし、僕もそれに釣られて笑ってしまった。こんなにも愉快で楽しい気分になったのは初めてかもしれない。そしてそれが、人によってもたらされたものだと考えると、余計に可笑しかった。

僕はそのまま手を離し、玄関のドアを開けた。

「関所までの道は、大丈夫？」

「はい」

「そっか。じゃ、お気をつけて」

「ありがとうございます。お邪魔しました」

ミィは頭を下げて靴を履き、外廊下へ出た。

「さようなら、レタさん」

「うん。さようなら」

ミィは満足気にうなずいたあと、僕の元から去っていった。いつもの来客と同じように、彼女が階段を降りるところでドアを閉める。

その瞬間、自分の世界に帰ってきたような気がして、思わずため息をついた。

誰もいない、僕だけの世界に帰ってきた。

そうだ。帰ってきたのだ。

僕は今まで、別の世界に旅立っていた。

子どものころ観た映画のように、ちょっとした冒険をしていたのだ。

だけど、それも今日で終わり。

僕は、孤独の国へ帰ってきた。

帰ってきた。

帰ってきた……。

しかし、心には正体不明の穴が開いている。

人との関わりの末に、失ったもの。

僕はこの数カ月で得たものも、今まで大切にしてきたものもすべて、失ってしまった。

いや、そうではない。きっと、得た瞬間に今まで持っていたものを手放していたのだ。

僕はそれに気付かなかっただけ。そしていざ、得たものもなくなって、手元が空いたときに、ようやく自分の足元で砕けているものに気が付いた。ただ、それだけの話だ。

それは、価値観であり、感性であり、性質でもある。

得て、失って、その結果変わってしまった僕は、果たして僕なのだろうか。それを判断するのは、一体誰なのだろうか。

ゆっくりと、自分の棲んでいる部屋を眺めてみる。

無機質なこの部屋は、住み始めたときとは打って変わって、僕になにかを訴えかけてい

るように感じた。

無関心で、なにも詮索してこないはずの、僕の部屋。

それが今では、矛盾を抱えている僕を責めているような気がしてならなかった。どうして今になって、こんなにも居心地が悪いのだろう。この部屋は、本当に僕が選んだ部屋なのだろうか。

馬鹿馬鹿しい被害妄想なのは分かっている。分かっているのに、ずっと一人でいた僕を見てきたはずの部屋に気付かされるこの事実が、痛々しい形で僕の心を突き刺してくる。

僕は一人ではなくなってしまった。それと同時に、独りになってしまった。

静寂。

誰の生きている音も、聞こえない。

ゆっくりと苦しみをもち、

ゆっくりと悲しさをこめて、

ゆっくりと厳粛に、

それは、やってくる。

怖くなって、大げさに呼吸をする。

大丈夫。息をしている。だから僕は、

生きていると、言えるのか？

生きているけど、死んでいる。

これは、レベッタの言葉だ。

そうだ。

手紙。

レベッタにまだ手紙を送っていなかった。ヒィカのサインを送ろうとして、ついには叶わなかった。

助けを求めるように、レベッタに書いた手紙を探した。ヒィカが亡くなってから二日間、放心状態だったからか、手紙が見当たらない。

最終的にベッドの下で見つけた便箋は、握りしめたようなシワが入っていた。書き直そうか悩んだが、一刻も早くレベッタの返事が欲しくて、そのまま送ることにした。

「ジプタ」

テーブルの上に便箋と封筒を広げて、ジプタの名前を呼んだ。すぐに通信端末からジプタの音がする。

「なにか御用でしょうか」

「手紙を送りたい。速達で」

「かしこまりました。お部屋に伺います」

僕は封筒にレベッタの家の住所を書き込み、シワの寄った便箋を折る。

そのとき、ふと、便箋に一番綴りたい言葉が浮かんだ。

レベッタと続けていた文通のなかで、一度もこの言葉を書いたことはなかった。それは僕が望んでいないこともでもあったし、きっと彼女も望んでいないことだと思っていた。

でも今は、心の底からそう思える気がした。僕はペンを握り直して一言、手紙の最後に書き加えた。

——君さえよければ、会いたい。

散々、彼女と会うことを避けていた僕が、こんなことを書くとは思ってもみなかった。なんとも格好のつかない、とても僕らしくない言葉だとは分かっている、いち早くレベッタにこの言葉を伝えたかった。

部屋に来たジプタに手紙を渡し、速達だと念を押して伝える。コハルよりも高性能であることは間違いないけれど、どうにも信用ができなかった。

再び玄関のドアを閉める。今度こそ本当に、一人の時間だ。

いろいろなことが終わった開放感と、喪失感で心が軽くなったような気がした。いや、脆くなった、という表現のほうが正しいのかもしれない。

おぼつかない足取りでベッドまで歩き、うつ伏せで寝転んだ。

レベッタも、ヒィカも、ミィも、コハルも、僕は目の前からいなくなった。

一度空いた喪失感は、治るどころか大きくなっていく。

僕はなぜ、一人なのだろう。

僕はなぜ、この国に生まれたのだろう。

僕はなぜ、この国で生きていられるのだろう。

それならば、僕はなぜ、涙を流しているのだろう。

誰も答えてくれない静寂のなかで、僕のすすり泣く声だけが、ただ響いた。

第四番 ゆっくりと をもって Lent et blanc

1

僕はふと思い立ち、パソコンを立ち上げた。ミィが故郷に帰ってからもずっと仕事を休んでいたの、おそらく二週間ぶりの起動になるだろう。

パソコンの操作が可能になるまで画面を見つめる。これまで積み上げてきた僕の生活は、この国を包む静寂のように、音もなく崩れ去っていた。

操作が可能になってすぐ、あるコードを表示させる。これは、生前のヒィカから貰った、楽曲の視聴コードだった。確か、僕たちが通っていたA区の喫茶店で流れていた曲だと言っていた。

音楽を再生するソフトを起動させ、そこにコードを読みこませる。すると、ゆっくりと音楽が流れはじめた。

わざわざ音楽を聞くためだけに時間を使うのは初めてだった。でも今は、それしかできない。

スピーカーから流れる旋律は、なんの派手さもなく、感情の起伏もなく、淡々と、たが退屈ではない、不思議なものだった。

そしてそれは、この国で流れている静寂と、よく似ていた。

ありとあらゆるものを排した、シンプルな作品。だが、その奥にあるのは不安でも、恐れでもない。

僕はこの楽曲が持つ魂に、この上なく惹かれた。それはきっと、僕が持っていないものをこの作品が持っているからだろう。

ひたすらに、静かに流れる音楽を聞きつづけた。そうすることで、決して埋まることのない喪失感が、少しずつ小さくなっていくような気がした。

音楽を聞き終えて、少しだけ気力が戻った気がする。

「ジプタ」

「いかがなさいましたか？」

いつも邪険に扱っているのに、ジプタは変わらず僕の呼びかけに応えてくれた。

「ご飯が食べたい」

「時間外の食事となってしまいます」

「構わない」

「いかがなさいましょう」

「E区の二丁目のバーのカクテルと、ピクルスが食べたい」

「ただいま問い合わせ中です」

数秒ほどの間が空いて、通信端末の画面が切り替わった。

「こちらがメニューになります」

「どちらもおすすめで」

一瞬間が空く。再度問い合わせているのだろう。

「二十分ほどお時間をいただきます」

「分かった」

「では、ご注文を確定いたします」

「あ。あとケーキも食べたい」

「ただいま問い合わせ中です」

今度は一分ほど時間かけて、ようやくジプタの声が聞こえた。

「ケーキと一緒にですと四十分ほど掛かってしまうとのことですが……」

「いいよそれで」

「では、ご注文を確定いたします。しばらくお待ちくださいませ」

僕は終わってしまった音楽をもう一度再生した。この曲を流しているときだけは、傷が癒えていくような気がした。

「ジプタ」

「いかがなさいましたか？」

「聞きたいことがある」

「なんでしょう？」

「孤独ってなに？」

「孤独とは……。仲間や身寄りがなく、ひとりぼっちであること。思うことを語ったり、心を通い合わせたりする人が一人もなく寂しいこと。また、そのさま。です」

「国ってなに？」

「国とは……。国家。また、その占めている地域。国土。です」

「孤独の国って、なに？」

「孤独の国とは……。十二番の国の俗称。掲げる思想は他人からの非干渉。です」

「その国にいる人は、孤独？」

「統計的には多いと予想されます」

「ジプタはどう思う？」

「分かりません」

「ジプタは寂しい？」

「そのような機能はありません」

「今は働いてないだけかもよ」

「プログラムには、そのような記載はありません」

僕はそのあとも、ジプタに質問を投げかけ続けた。子どものころにやった遊びを久々にして、なんだかとても楽しくなり、つい止まらなくなってしまった。

「それじゃあ、ゴーストランドってどういう意味かな」

「幽霊の国です」

「違う違う、さっき言った、ゴーストタウンと同じ意味だよ」

「人の居ない国」

「そういうこと。じゃあ、生霊は？」

「生きながら死んでいる人」

「その通り」

「どちらも辞書には載ってありませんが」

「そりゃそうだよ」

僕はずっと笑い続けていた。ジプタの反応が面白くて、懐かしくて、もっともっと話し続けたい気分だった。

「レタ様」

「なに？」

「先ほど頼まれたお食事が到着しました」

「じゃあ、僕の部屋まで持ってきて」

「かしこまりました。それと、郵便物が届いております」

「え？ 本当？」

「はい。一緒にお渡し致します」

「ありがとう」

僕はすっかり上機嫌になっていた。ケーキを頼んだのは他にもない、今日がレベッタの誕生日だったからだ。

ケーキの写真に祝いの言葉を添えて、手紙を返してやろう。レベッタへの返事を考えていると、部屋のインターホンが鳴った。僕はもう一度、終わってしまった音楽を再生して、玄関のドアを開ける。

「お食事と郵便物になります」

僕はジプタから紙袋を受け取った。

「郵便物は袋の中に入っております」

「分かった、ありがとう」

すぐに玄関のドアを閉め、紙袋をテーブルに置いた。まずはカクテルとピクルスがに入った容器を取り出す。そして次に、ケーキが入っているであろう大きな箱を取り出して、それぞれをテーブルの上に並べた。

最後に、封筒を取り出そうと紙袋の中を確認する。

その封筒は、先日僕がレベッタに送ったものだった。

理解が追いつかず、しばらく固まってしまった。どうして僕が送った郵便物が、僕の元に届くのだろう。まさかとは思うが、間違っただけで送ってしまったのだろうか。

封筒を手にとって、送り先の住所を確認する。住所は間違いなくレベッタの住んでいる場所だった。

しかし、その住所の上には「長期不在により配達不可」という印がくっきりと押してあった。

それを最後に、愛情の国から手紙は来なくなり、

僕は、孤独になった。

引用・著者情報

引用：goo辞書

<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E5%AD%A4%E7%8B%AC/>

https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E5%9B%BD/#_jn-62449

【リンク】

時計塔プロジェクト公式HP：<https://www.cloktower-project.com/>

Twitter：URL_PLACEHOLDER_3_PJ

Youtube：<https://www.youtube.com/channel/UCEirbnZwUoLaDL4CtIwebeA>

生霊の棲むゴーストランド

著 吉岡大地

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
